

年次	傳染病院	病院	隔離病舎
大正六年	一、五〇七	二六、六三七	八、〇〇五
七年	一、四八六	二八、二五八	八、〇五五
八年	一、四八五	二八、五三二	八、二〇一

下水道(大正九年三月末)

下水道	工事着手	手工完成	排水區域内面積	排水總料	工費
東京市	大正元年十二月	大正一〇年三月	二、〇一八	三、六〇〇	八、一四〇
大阪府	明治二七年一月	同 一二年三月	四、四二〇	三	五、八五四
大阪市隣接三箇町組合	大正八年	同 一〇年三月	?	?	五八〇
明石市	明治四四年七月	同 三年十二月	三八一	〇二	一二八
名古屋	同 四一年四月	同 一二年三月	五、一六五	三、六三七	三、六四七
福岡市	大正八年	同 九年三月	五七六	八〇七	七五
仙臺市	明治三二年八月	同 二年三月	五七二	九四八	二二七
岡山	同 四五年二月	同 四年八月	七六九	四、八三〇	二八一

市	同 四年二月	同 四年三月	一、四四七	七三〇	一、二七六
廣島市	同 四年三月	同 四年三月	?	?	五五八
松山市	大正五年三月	九年三月	?	?	

第四節 給水と體力

日常一日も缺くべからざる飲料水が天然の純良なる性質を保つを要するは勿論なるも、都會に於ては井水は有害なる有機及無機物の混入あり、蒸溜水は却つて非衛生的にして且つ實行に困難なり。即ち給水工事の起りし所以なりと雖、過去二三十年來虎列拉、赤痢等の悪疫の流行の一大原因は清淨なる飲料水の缺亡にありと言ふを得べし。西洋に於ては上水道の設備は夙に希臘に在り、紀元前五百三十年頃有名なる僭主ピシストラトスのアテネの主權を掌握するや、諸種の文化的設備をなし且アテネ市に水道工事を起し給水の便を計りたり又羅馬に於ては紀元前三一三年頃ピウス・クラデウスは始めてサピニ山より羅馬市に水道を布設したるを嚆矢とし、以後人口の増殖に伴ふて設備を擴張し、共和政治時代には遂に四條の水道となり、帝政時代には更に十四條となり且其水源地も次第に遠隔となり長さ五十五哩に達するに至れり、此等の水道は地下に埋設さ







噴水其他	特別水槽を設けて他に導水するもの	別原動力及び工事其他の爲め一時使用	計	私設戸	消火栓
八六七	一五〇	二三〇	一、二四七	九九六	二、一八五
九〇〇	一五四	二三六	一、二九〇	一、〇二三	二、二三〇
九三二	一五七	二四九	一、三三八	一、〇七六	二、三二五
九九〇	一六九	二三一	一、四一九	一、〇九二	二、四三二

十年は三月末現在なり。

水道工費百萬圓以上

水道名	敷設總工費	配水管延長	一年給水總量	一日平均給水量	年度末現在給水戸數
東京市	二九、六六二	二、四八一、六八三	一、八四一	七、七六一	三五五、三六一
新宿市	一、三〇〇	七五、〇〇〇	—	—	—
東京都	六、〇六四	一、二一一、九八二	六六九	一、八二九	五七、六四七
大阪市	二二、四九四	二、五二〇、三〇七	一、四六〇	五、五六五	二二一、一九六
横浜市	一〇、四〇七	一、一八〇、〇六四	八四二	二、三〇四	七一、二一八

横須賀	神戸市	長崎市	宇都宮市	奈良市	名古屋	仙台市	山形市	廣島市	吳市	下關市	高松市	門司市	若松市	小倉市	福岡市
一、〇〇七	一三、〇一六	四、五一四	一、二〇〇	一、六四七	五、七一五	二、六九〇	一、〇三〇	二、九九一	一、〇八一	一、八三九	一、四七六	一、五〇五	二、二六一	一、一五〇	六、三三〇
九、五九八	一、三六一、三五五	三〇三、一一四	一六五、五六四	一五〇、四五九	九五三、九四七	二八九、八九九	?	五一五、九〇七	二二二、二〇四	一三三、〇三九	一七一、七九八	一二八、四九五	一〇〇、一八四	一三八、九八四	三四二、七一六
〇、二	七一〇	二二六	六八	—	三九六	—	—	二二二	三〇	—	—	一一〇	八五	七〇	—
〇、六	一、八五七	六二〇	一六二	—	一、〇八二	—	—	五七九	八二	—	—	三〇一	二二三	一九三	—
三〇八	七七、二六六	二四、八九四	五、二九二	—	三三、九八〇	—	—	三七、三九八	六、三三七	—	—	九、一六〇	六、三八五	四、六四八	—



大	市	一、七六〇	一九六、二七八	一	一	一
熊	本	一、三五七	?	一	一	一
鹿	兒	一、二九一	?	一	一	一
函	館	二、九二二	一八四、四二〇	一五七	四三〇	二七、七〇一
小	樽	一、二二二	二〇五、九七八	一八一	四六七	二、六六七

(工費、配水管は九年十二月末、給水戸数は九年三月末、他は八年度中の數なり。)

第五節 汚物掃除と衛生

市内の土地占有者は法規により其地域内の塵芥、汚泥、汚

水及び糞尿を掃除し清潔を保持せざるべからざる義務を有す、又建物の所有者は該地の清潔を保つ爲め必要なる溝渠を造るべき規定なり。元來汚物蒐集の箇所は稍々もすれば不潔に流るゝ弊害あり、而して斯かる所に多く傳染病媒介の蠅等の發生あるを以て、周囲の清潔は勿論掃除義務者は覆蓋ある容器を設け、石油乳劑等の除蟲劑を撒布する等注意せざるべからず。市内各戸より搬出せる塵芥は河川に沿ふ汚物取扱場に搬出し、「ウハ塵」と稱するは肥料として千葉縣下に運搬され「シタ塵」は深川平久町埋立地に送りつゝあり。

大都市汚物搬出(大正六年)

東	市	總	塵	一	泥
京	都	六〇、四五一	三九、三〇二	一四三	九三
大	阪	一一、六七四	四、九〇一	一〇八	四一
横	濱	四六、二七〇	九、〇八六	二〇三	四〇
神	戸	二〇、三七一	三、三六〇	二四四	四〇
長	崎	一六、四三〇	四、六七九	一四五	四一
名	屋	六、四四〇	七五九	二二四	二六
仙	臺	二〇、七一六	三、四八五	二二二	三七
金	澤	二、八六八	一	二一四	一
廣	島	四、〇二〇	一、二二二	一三九	四二
吳	島	四、三二四	一、三八〇	一一四	三六
東	京	三、五五三	四一五	一三七	一六

塵芥搬出量(東京市)



年次	掃除人夫	肥	料	燃	料	拾	芥	計
			千貫					千貫
明治四一	二二一、四八二							五七、七一六
大正二	二四一、三九三	四二、〇五二	三、七三七	一七、七五〇	六三、五四〇			
七	二四六、六八三	三九、四五一	四、六〇四	二七、三二八	六一、三八四			
八	二四八、〇一一	三〇、九二三	四、一三八	二五、三八八	六〇、四五二			
九	二五六、九七五	二五、二八二	三、九三六	二四、四四七	六一、九四九			

第六節 花柳病と體力

徳川幕府元和年間初めて遊廓設置許可の當時は娼妓は淫を賣りたりと雖、糸竹管絃の技にも通じ文藝に堪能なるものさへ存せり。正徳年間遊藝を主とする踊子廓外に生じ遂に淫賣をも兼業するに至り所謂藝妓なる今日に及んで益々盛なり。維新前の藝者は其藝は固より未熟なれども意氣の稱揚すべきものありしが、漸次低落し今日の藝妓は杯盤の間に侍し座輿を幫くるは名のみにて私娼の別名たる状況なり。ペリクリスの寵姫たるアスパシヤの如きライス・フリネ、ピチオニス・ニオドーテの如き希臘のヘテールは其境遇我國の藝妓に似たるものありと雖、辭書中に見る藝者ガールとは大差あり。彼の羅馬の旭日

冲天の隆盛を見しは國民悉く戈を執りて戰場に馳驅せしが爲めなり、平和の來りて軍備のこと一階級に屬するや國民の精神は緊張を缺き色慾と奢侈の爲めに滅亡を招きたるにあらずや。人或は藝妓は概して上流社會を顧客とし彼等の慰安たるものなれば、彼の下流社會の一般玩弄物たる傾向を有する公娼とは同日の下に論ずべからずと言ふものもあるも、公娼、藝妓共に賣淫を營む點に於ては均しく娼婦なり、然も社會は之を寛假し當人又悖徳の行爲とせず花街柳里に出入し蓄妾を恥ぢとせず、豚の如く犬の如く鶏の如き生活を爲す寒心せざるべけんや。藝娼妓の一日も速に現在の社會より驅逐すべきは必要なるも、殊に社會に病毒を播きつゝある私娼としての藝妓は最も恐るべき害物として之を遠ざけざるべからず、其害毒の家族は勿論子孫に迄及ぼすは此處に説明の要なかるべし。大正十年端西ジエネバに開催せられたる國際聯盟主催社會問題國際會議に於て、賣娼婦防止に關し各國より種々なる意見提出せられたるも結局は決議を見るに至らざりき。之より先きに佛國巴里に於て英、獨、露、伊、米、丁、西、瑞、諾、白、葡、瑞、典、佛國の諸國會して醜業娼婦輸入取締に關する條約を結び、千九百十年再び之が協定する所ありたるも歐



洲大戰の齎らしたる經濟上の大變動によりて醜業婦は爲めに激増し協定は單なる形式に止まるに至れり。我國に於ても其協定に従ふ時は未成年者は自然廢業となりて廓外に出づべく、斯の如きは風俗の公安上大問題を惹起すべく、之等醜業婦等の周旋業者約一萬五千と相俟ちて益々社會に害毒を流すこととなるべし。下の表は大正元年より四年に至る内務省衛生保健調査會の報告にして全國一三四箇所の公私立病院にて取扱ひし花柳病患者の性及年齢別なるも實際の數は之に幾倍するや知るべからず。

花柳病患者數(大正元年より四年迄)

徵毒	一五歳未満		二〇歳未満		二五歳未満	
	女	男	女	男	女	男
徵毒	四、六二六	三、六七二	七、四四五	六、五四八	二、三三七	一、四四四
軟性下疳	七八	一二四	四、七六三	二、九八四	一四、七四四	五、〇一六
淋病	五八七	一、〇九三	八、一六八	六、二〇四	二七、六二一	一三、〇〇〇

遊廓

種別	三〇歳未満		四〇歳未満		五〇歳未満		計	同上百分比
	女	男	女	男	女	男		
大正五年	二二、七九六	八、九五二	二一、九二八	七、四五一	一〇、四五三	三、二八二	九五、七三七	一一、〇二一
六	一一、四〇二	三、一六八	七〇、一三九	一、五七〇	二、二三六	四八二	四一、〇六三	一一、二三八
七	二七、八三二	一〇、八五四	二三、七二一	七、五九九	九、二一八	二、六三三	一〇〇、四二三	九、八三七
同	二五、七八六	一、九五二	一〇、四五三	三、二八二	五、一一八	一、九五二	四三、三〇一	一一、二二
引手茶屋	一五、七三	二五、八六	四、八六	一一、〇九	一、〇	一、〇	二五、八六	一一、二二







年 齡	大正五年			六 年			七 年		
	一 二 歲 未 滿	一 八	二 〇	一 四、三 九三	一 〇、二 九五	一 六、七 五〇	一 九、九 七〇	二、四 五五	一 四、一 八五
合 計	四 〇 以 上	三 五 四 〇	三 〇 三 〇	四 七、七 〇四	一、〇 七一	五 二、四 六六	一、〇 七一	一、二 四一	五 九、一 六一
二 〇	二 〇	二 五	一 二、〇 八九	一 二、九 三三	六、一 一	六、六 二二	一 、六 七六	一、四 五一	
二 五	三 〇	三 〇	二、九 三〇	三、一 二三	三、三 七四	三、三 七四	一、六 七六	一、四 五一	
三 五	四 〇	三 五	一、四 〇二	一、五 六二	一、五 六二	一、六 七六	一、六 七六	一、四 五一	
四 〇	四 〇	三 五	一、〇 七一	一、二 四一	一、二 四一	一、四 五一	一、四 五一	一、四 五一	
四 〇 以 上	四 〇	三 五	四 七、七 〇四	五 二、四 六六	五 二、四 六六	五 九、一 六一	五 九、一 六一	五 九、一 六一	

第七節 肺結核と體力

傳染病なるものが一人より他へ有害なる微菌の移傳によりて生ずるてふ發見は確かに醫術上無上の價値を有すべし、就中結核が十九世紀の中葉より都會の發達と共に其險惡の度を増し、人類の健康状態を脅かしつゝありて、都會過群の住民は勿論農村の住民に至る迄其傳染を免れざる状態に置かる

は證明の要もなかるべし。歐米各國に於ては夙に該病の恐るべきを知りて其豫防計畫に着手し銳意撲滅を計りたる結果は成績の見るべきものあり、就中英國は顯著なりとす。左に英國に於ける肺結核百萬に對する死亡率を擧ぐべし(一九一四年)

ロ ン ド ン	男		女	
	北 部 町 村	中 央 町 村	北 部 町 村	中 央 町 村
ロ ン ド ン	二二六六	二一〇五	一三三一	一四五二
北 部 町 村	一八〇四	一七〇四	一一九五	一二四九
中 央 町 村	九九六	九二五	九四四	八七五
南 部 町 村	一〇六七	九一〇	九一〇	九一〇

上掲の統計により都會より地方に於ける死亡率の小なるは注意すべきことなり我國の都市は之を歐米各國に比すれば過群の状態も緩にして家屋の構造も自由なりし結果、該患者の數も尠かりしが都市の發展と結核病に對する豫防策を等閑



に附したる爲め、遂に今日の狀態に至りしなり。  
肺結核死亡者(大正七年)

道府縣		男	女	計	道府縣	男	女	計
東	京	五,四四一	五,三三七	一〇,七七八	田	四五七	四五七	九一四
大	都	一,四九六	一,六八三	三,一七九	井	五九五	八一	一,四〇六
神	都	二,九六七	三,四二六	六,三九三	川	八二四	一,〇四四	一,八六八
兵	川	一,六七五	一,四九七	三,一七二	山	六一八	八三六	一,四五四
長	阪	二,一七五	二,三四一	五,五一六	根	三一六	二二一	五三七
新	庫	一,〇四〇	八六九	一,九〇五	取	五七六	七一六	一,二九二
埼	崎	一,三六五	一,八一八	三,一八三	山	八六八	八八〇	一,七四八
群	湯	一,〇八〇	一,一一〇	二,一九〇	島	一,三三〇	一,五四六	二,八七六
千	馬	七四七	九七七	一,六二四	口	八五六	九一九	一,七七六
茨	葉	九七五	八四四	一,八一九	山	五四〇	六四九	一,一八九
茨	城	七四三	七〇七	一,四五〇	島	五八六	八一五	一,四〇一
栃	木	七一四	七一八	一,四三二	川	五九五	七二八	一,三一三

肺結核死亡者年齢別

山	青	岩	福	宮	長	岐	滋	山	靜	愛	三	奈
形	森	手	島	城	野	阜	賀	梨	岡	知	重	良
五九三	五七三	四〇九	九四一	六七一	一,〇〇八	七三四	六四三	三二八	一,二二六	一,八八三	八〇一	三四一
六二〇	五五〇	四〇九	一,〇一九	七五一	一,五七五	一,一三三	六四八	四〇三	一,一一六	二,一二六	一,〇二七	四二三
一,二二三	一,一二三	八一八	一,九六〇	一,四二二	二,五八三	一,八六七	一,二九一	七三一	二,三四二	四,〇〇九	一,八二八	七六四
五	六	野	北	沖	鹿	宮	熊	佐	大	福	高	愛
			海	兒								
年	年	道	總	島	崎	本	賀	分	岡	知	媛	
四二,三五	四二,六三七	四七,六六二	一,八六五	五二七	九〇七	三五九	一,一四一	五五四	七一九	一,七四九	三七八	七三三
四四,二八二	四五,三一五	五一,五五三	一,七八九	四七〇	八七五	三四一	一,〇二五	四四三	七四一	一,六二七	三八九	一,〇九四
八六,六三〇	八七,九五二	九九,二一五	三,六五四	九九七	一,七八二	七〇〇	二,一六六	九九七	一,四五八	三,三七六	七六七	一,八二七



年 齡	大正三年	四 年	五 年	六 年	七 年
五 歲 以 下	二,七八一	二,七八七	二,八二四	二,七四二	二,九二一
一 〇 歲 以 下	一,五九七	一,六六三	一,八三九	一,七三七	二,一二四
一 五 歲 以 下	四,一二四	四,三〇〇	四,五六二	四,六九六	五,四八七
二 〇 歲 以 下	一三,一九六	一三,五〇四	一四,五五五	一五,六〇三	一八,四六四
二 五 歲 以 下	一三,五〇八	一三,九七四	一五,七四一	一五,一八八	一八,〇七一
三 〇 歲 以 下	一〇,六一六	一一,二〇一	一一,三五七	一一,二七八	一二,七九〇
三 五 歲 以 下	七,八一六	七,八五八	八,〇一八	八,〇九三	九,〇〇三
四 〇 歲 以 下	五,九九五	六,二三〇	六,一二三	六,一二三	六,九二四
四 五 歲 以 下	四,三九〇	四,五二六	四,八六〇	五,〇六七	五,五七一
五 〇 歲 以 下	四,二五四	四,一二七	四,一二〇	三,八九九	四,一二三
五 五 歲 以 下	三,四八三	三,六〇五	三,八二六	三,八六七	四,三六〇
六 〇 歲 以 下	三,七一九	三,四六一	三,三九〇	三,一五〇	三,〇八一
六 五 歲 以 下	二,八三八	二,八九一	二,〇六四	二,九六〇	二,九二四
七 〇 歲 以 下	一,七九六	一,八二二	二,九一二	一,九四六	一,八八四

七 〇 歲 以 上	一,三〇一	一,三〇五	一,四三二	一,四三四	一,四八八
計	八一,四一四	八三,二五四	八六,六三三	八七,九七〇	九九,二一五

故に各國競ふて結核を撲滅せんが爲め諸種の運動を起し、各都市は療養所を設けて殆ど強制的に患者を收容隔離して傳染を防ぎつゝあり。我國の結核療養所は左の如し

所 名	所 在 地	收容人員定員
東 京 市	東京府豊多摩郡野方村江古田	五〇〇
京 都 市 宇 多 野	京都府葛野郡花園村宇多野	一〇〇
大 阪 市 刀 根 山	大阪府豊能郡藤田村刀根山	三五〇
横 濱 市	神奈川県橋本郡保土ヶ谷町岩間	一〇〇
神 戸 市	神戸市夢野町	一〇〇
長 崎 市	長崎市竹久保町	六〇
福 島 縣	福島縣石城郡豊間村豊	五〇

外に十年度迄に其設立を指定せられたるは左の各都市なり







にして之に保健設備や健康法等の種々なる後天的誘因の加はるありて健康問題の發生あるなり而して健康は自我發展の第一要件にして體力の劣弱は處世上自我發展少き統合を結果するものなり。昔時白樂天謳ふて曰く久爲勞生事不學攝生道少年多病此身豈堪老と。されば古來東西共に健康を以て人類無上の幸福となせしは生理の當然にして、カーライルは健康者は造化の造れるものゝ中にて最も成功したる作品なりとし、ロングフェローは健康ならざる人の生涯は厄介にして健康なる人の生涯は歡喜なりと讚美したるは言や陳套なるも亦萬人の言はんと欲する所を代辯したるのみ。

第二節 運動と心機轉換

健康を保持又は増進するには環境の關係、榮養、保健設備等の繼續的要件あるは既に説きたるが如し、而して運動と休養との間歇的要件も亦必要なるは言ふ迄もなし。運動は各部筋肉の發達の統合を計り血液の循環を好良ならしむるのみならず心機轉換の爲め精神の休養に効果あるものなり。カーライルは或時友人より貴君の醫師は何方なりやと問はれしに答へて余の第一の良醫は馬なりとし詩人バイロンも乗馬を好み、大外交家たりしパーマーストンも

亦毎日數時間の乗馬を試みたり。宗教改革を企てたるルーテルは遊獵を好み、佛國革命の先驅者たりしボルテール及英國の大政治家ピットも亦遊獵を好みたり。グラットストンはハワルデン邸内に伐木したり、哲學者カント、ホッブスは散歩を好み、詩人ゴールドスミスは終日筆を擱くことなかりしも執筆一段落を告ぐれば倫敦郊外に散歩し、詩人スコットもウォーズワースも亦散歩して體力を養ひたり。サー・ヘンリー・ウォルトンは遊獵や釣魚の爲めにする時間は浪費されぬ閑暇なりと謂ひしは運動と心機轉換の必要を意味せしに外ならず、尙休養には睡眠と休息との二種あるも是等は後章能率の部に説くべし。

第三節 腦力的基督教

獨逸のトライチケ曰く國は力なりと、ベルンハルター曰く方は善なりと、余は是等マキアヴェリーの流を汲む帝國主義に賛同する者にあらずと雖、不注意、不攝生の弱者は一種の犯罪者なること恰も怠惰なる貧窮者の如きを信する者なり。國際間は勢力均衡にて平和ある如く個人間にも處世上の正當なる統合には其力の均衡を得ざるべからず、ニイチエは勇猛を道德なりとし、柔順を主とする耶蘇教を奴隸の道德なりとせしは確に半面の眞理を道破したるも



のなり。是に於てか余は腕力的基督教 Muscular Christianity の主張も處世上鑑むべきものあるを信ず、今より約七十年前に英國の思想家間に基督教の柔弱に流るゝを憤慨し、腕力的基督教を喧傳し實行したる者あり、其重なる者は文豪キングスレー、大説教家モリス、トムブラオンの著者として有名なる裁判官ヒューズ等にして、殊にヒューズは倫敦に喧嘩あるも職務柄の令狀を發することなく、自ら其渦中に飛び込み、サア爰にヒューズありヒューズの鐵拳を知らざるかと疾呼して仲裁をなしたるは宛然我國の俠客の如きものなりしなり。處世上腕力沙汰に及ぶを避くべきは勿論なるも、要するに人は剛健強壯の體格を備へ體力に於ても亦他に劣らざるを幾庶するは常情なるべし。

第四節 體力と自我發展

自我發展は無限なり最後の決算期に到達するには長年月を要す、剛健なる體力を備ふるにあらずんば自我集積少く常に不利なる統合を繰返し、一生涯の總決算期に達するも自我發展の少き結果を見るべし。徳川家康の遺訓として傳へらるゝ中に「人の一生は重きを負ふて遠くに行くが如し急ぐべからず」とあり、此遠き行程には健康は第一の要件たるは言ふ迄もなし。英國のウ

キリアム三世は肺を病み倫敦の空氣に堪へず、ケンシントンの閑野に靜養せし程にして咳嗽を發する毎に双頬涙痕點滴たる有様なり、此弱齡蒲柳なる王は歐洲新教國を統率して佛王ルキ十四世に對抗し、馬上に顧盼して三軍の士氣を鼓舞せしが如き例外ありと雖、健全なる精神は健康體に伴ふは動かすべからざる原則なり。對我關係に於ては心身の統合を得、對物關係に於ては環境と心身との統合を得、對人關係に於ては彼我の自我發展の統合を得べきは處世の原則なりとせば各關係の基調たるべき體力の重大なるは自明の理なり。

本章の本文中に示したる以外の参考書

- B. Fuller, *Life and Human Nature.*      W. James, *Psychology.*      P. Mantegazza, *Physiognomy and Expression.*  
 S. R. Wells, *New Physiognomy.*      O. S. Fowler, *The Self-Instruction in Phrenology and Physiology.*      A. I. Oppenheim, *The Face and How to Read It.*      J. C. Rose, *Comparative Electro-Physiology.*      F. A. Bainbridge and J. A. Menzies, *Essentials of Physiology.*      J. P. McMurich, *The Development of the Human Body.*      A. Just, *Return to Nature.*      P. Kintzing, *Long Life and How to Attain It.*      S. W. Furneaux, *Elementary Practical Hygiene.*      G. Watson, *Food and Feeding in Health and Disease.*      A. G. Woodman and J. E. Norton, *Air, Water and Food.*      A. E. Leach, *Food Inspection and Analysis.*      G. Merriér, *Sanity and Insanity.*



- J. Darton, Smoking and Drinking.      T. H. Clouston, The Hygiene of Mind.      H. Carrington, Vitality, Fasting and Nation.      O. Gaeque, The Foundation of All Reform.      永井醫學博士著生命論      正  
 理學博士著進化論講話      石井重美著宇宙生物及人類創成      吉田章信著體育運動生  
 理      安富衆輔心身養成論其他前章の終りに掲げたる參考書

## 第貳章 心力

### 第壹款 徳力

#### 第壹項 品性

#### 第壹目 品性の解釋

**第一節 内容の區分** 余の所謂心力 Mentality は心意上の能性 Faculty (能力と譯す人あるも Ability と混同すべからず) よりも廣義の語なり、能性とは知情意の作用を總稱し、更に自由意思の能性、審美の能性、感受又は悟覺の能性等の特殊の場合にも用ひらる、即ち能性は現實の心的作用を指し理想及分化向上の道程の状態に觸れざるが故に、余は其よりも廣汎なる意義の心力を提唱し、之を徳力 Virtue 及能力 Ability 及之に關聯したる心的作用を包括したる義に用ふる所以なり。而して品性 Character を主とし才能 Talent の附隨したるを人格 Personality とし、才能を主とし品性の附隨したるを能率 Efficiency とす、要するに一心は萬殊なり萬殊は又一心に歸し



心意 Mind には何等の區分あるにあらざるは勿論なるも、心意を知情意に三分するカントの舊説が説明の便宜上今日尙行はるゝが如く、余も亦心力の章に於て徳力、能力に二分し、更に之を品性、人格、才能、能率に四分して説明する所以なり。

第二節 物的生活より心的生活へ

心力とは精神作用の處世上に表現したる状態を指稱す、又物的生活と心的生活とは本來一如にして不可分關係なるが故に、既に本書の各部に於て物的生活と共に心的生活を説明したる所以なり。哲學の鼻祖タ・レスは學問の本義として「汝自身を知れ」を標榜したり、而して現代に至りオスカ・ワイルドは舊世界の門口には「汝自身を知れ」と書かれ、新世界の門には「汝自身たれ Be thyself」と書かれつつありとせり、其意は個性の覺醒は學問及處世の第一義なるも、覺醒より進んで自我の發展を要すべきを主張したるなり。十八世紀及十九世紀の物質主義に對する反動起り、十九世紀の末葉より廿世紀の初頭の過渡期には必然の傾向として努力向上のメリオリズムとなり、オイケン（オイクン）の心的生活即ち精神生活となりしは既に時代精神の項に説きたるが如し。而して近代の思想界は「カントに返れ」より轉じてオイケン（オイクン）の「宗教に返れ」に共鳴するに至りし所以は、全く

物的生活偏重の反動なりと謂はざるべからず。看よマツクス・ミュラーは印度思想を讚美して「プラトリー、カントを學べる人と雖注意に値する生命問題の解決」とし、ウイリアム・ジェームスは現世に於て我等と與に勞働する神を説き、オイケン（オイクン）は端的に心的生活を主張し、メーテルリンクは「恐らく宇宙は日毎にそれ自らを搜求しつゝあり」とし、ロマン・ロランは「ジャン・クリストフ」に新努力主義を宣傳し、バーナード・ショウは生活力 Life force を唱道し、オリバー・ロッチは「生命は算術を輕蔑し得るものとし、ベルグソンは直觀の世界を發見し、神は豫め造られたる何物をも有せず彼は斷えざる生命、行爲、自由なり、創造は神秘にあらず我等が自由に行動する時我等自身に經驗するものなり」とし、ラッセルは「吾人の思想によりて永遠の絶好世界を建立する事が必要なり」としたり、是等は何れも心的生活に對する現代人の憧憬を代表したるものにあらずや、其中最も心的生活を高調力説せしはオイケン（オイクン）なり。

第三節 オイケンの心的生活

古代の自然生活に於て世界を以て人間的實在即ち擬人視したる時代には、世界即ち人間、人間即世界にして人間と世界とは全く調和



融合の狀態にありと思考され、何等の不安をも感ぜられざりしなり。文化の發達は之を舊思想として排斥したりと雖、更に現代文化生活の傾向は明に人間が世界を自己に同化せしめんとするに至れり、是古代の擬人的世界觀を復活せしめんとするもの、明かに時代錯誤なるが如し、されど有ゆる宗教哲學又は科學と雖、人間自身の思想なる點に於て一種の擬人的世界觀の上に立つものなり、要するに世界とは吾人によりて認識せられ同化せられ結合せられたる部分を指稱し、其以外は吾人の關知する所にあらず、本來人間と世界とを分離し主觀と客觀とを對象せしむるは、或目的の下に具體的の經驗を抽象して得たる結果にして、實は直接の具體的經驗其物に於ては渾然として割ち難きものなり。例へば印象なるもの果して主觀的のものなりや將た客觀的のものなりや、截然判定し難きにあらずや、主觀と客觀との結合即ち人間と自然との結合は實に根本的實在の內面的關係たるなり、此兩者の結合の上に生活の基礎を置かんとするは、古代の擬人觀に返つと共に實在の一層深き理解の上に立脚せんとするものなりとは、オイケンの主張にして、其精神生活即ち心的生活の基調は畢竟之に外ならず。

第四節 心的生活と品性

オイケンは其著「新理想主義」の中に、個人は其氣分に於て

は無限のものを動かし、有ゆる世界以上に自由に飛揚するにせよ、其勞作は狭く限られつゝあり、即ち個人の成功は或制限せられたる對象に限らるゝものなり、心的生活は此制限に堪え得ざるが故に、個人以上に獨得の形相に生きざるべからず、斯は社會と歴史との發達に於て成し能ふものなり、即ち前者に於ては共存が後者に於ては繼起が相結合し密接に統一する働きを有す、斯の如き生活の共同は個人に到底不可能なるものを可能ならしむ、是に於て心的生活は全體として事業によつて證明せられ、全體として事業より受くる所ありと、更にオイケンは心的生活は人間とも自然とも全く獨立せる宇宙生活の一階段なりとし、自然生活の發展が極度に達したる時に、心的生活の顯現が開始せらる、宇宙生活は自然生活の低き階段より心的生活の高き階段に移り行く事によりて自己發展を遂ぐるものなりとなせり、而してオイケンの所謂心的生活の釋明に就きて其一部一節より見れば、批難すべき點なきにあらずも、要するに自我集積の結果たる生活向上の理を説きしものにして、大體に於て異論を挟むべき點無し、而して又品性は自我集積の結果たる



ことあり又原因たることあり、因果交互相依りて生活の向上發展を爲しつつあるなり。

第五節 品性の意義

品性 Character は何ぞや、天賦と遺傳と習慣とに由りて各自の性質となり、其人の實行的思想及行動を支配する一定の傾向を特有するに至る之を品性と稱す、然らば處世學に於て何故に人格と共に自我集積の一部たる品性を説からざるべからざるか、品性は其人の全體を外面に表示する特徴にして實行の先行條件なり、實行の觀念には價値の觀念を伴ふ、従つて又品性は常に價値觀念を伴ふものなるが故に、對他關係よりすれば價値觀念によつて判斷さるべき其人の特有の性質を外面に表示せる傾向なり。元來人は自己の所思を實行せんと欲する時は先づ之を思慮するも、眞に實行の上には現はるるには單に智的判斷より來る思慮のみに止らず、天賦の氣質性能と圖境により習慣となれる心的傾向と、教育及經驗によりて涵養されたる見解、嗜好、思念等が、意識無意識的或は有意無意的に働きて其人特有の一定の傾向を示す性質となり、此特性によりて其實行を支配し又は規定するものなり。故に此特有の傾向たる品性とは實行の伴ふもの、少くと

も實行の先行條件にして實行を離れたる性質は品性にあらず、他の心理問題として取扱はるべきものなり。

第六節 品性の陶冶

一定の傾向を常に表示する心意性情即ち品性は一朝一夕の自我集積にあらず、其人の心的傾向即ち氣質、性癖、體的の組織即ち身體の健、不健等に就きては、第一天賦の性質により第二には遺傳性によるものなり、之に加ふるに圖境より來る一切の習慣性あり、教育及經驗によりて涵養さるゝ、智情意一切の發達性あり、故に品性の全部が賦性及遺傳性等の先天的規定にあらず、境遇教育及經驗等の後先天的の規定も亦重大なるが故に、外部より品性の傾向を陶冶し得ざるにあらず、即ち常に外部より善的刺戟を與へ良習慣を積み、且つ精神向上を修養する時は自ら品性を高尚善良ならしめ、自己の品性を道德的に形成するを得べし、是品性陶冶の必要なる所以なり、而して良習慣が品性を形成する大條件なるが故に、品性は習慣の結果として成ると定義する學者あり、斯の如く習慣と品性は密接なる關係あるが故に、サリーは、最も最初に形成さるゝ品性なるものは兒童の遺傳的本能の總和に外ならず、されど智力及意志の發達に従ふて品性に伴ふ意義は一



層特殊のものとなり、意志の活動に依りて生じたる獨立性及確定性を包含するに至るべし、されば吾人は時に品性は意志の一樣にして且確定せるものとして論ずることあり、然るに活動を確定して一樣ならしむるは必らず習慣を含むが故に、品性は意志の自ら形成せる習慣の集まれるものと見るを得べし、現に既に年長じたる兒童にありては品性の中に自然的本能を含むのみならず、意志が自ら形成せる習慣をも包含せり」と。

## 第二目 氣質及性癖

### 第一節 氣質の區別

知情意の三者が嚴密に區別し得られざるが如く氣質 Temperament と品性とは離るべからざる關係あり、故に實驗的に個性の別を立てること困難なれば此處にては常識的見解に據りて説明すべし、固より同一の客觀的刺戟と雖各人に同一の情意作用を生せしむるものにあらず、各人特有の事情、習慣、心的發達の程度等によりて各人に千様萬態の情意作用を生せしむることは茲に説明の要なき事實なり、然も是等の特殊の條件を除去して考察するも猶同一の情意作用を

生せざる所以は何ぞや、之天賦の差に基く個性ある爲めなり。張載の氣質觀に、人の性は虛明天地の性を受く、其本性に於て善ならざるはなし、然れども太虛の疑聚して形をなすに當り氣に清濁を生じて終に各人其氣質の差を爲すに至ると、窮極の原因に至りては今日の智識にて解釋する能はざるも、生れながら各人各種の性質を有するは否まれざる事實なり。一二の例を擧ぐれば興味に對する差別の如き、或は實行系の人の如き之なり。故に昔希臘の醫家ガレヌスは人間に四種の基本液即ち粘液、血液、黄汁、黒汁、ありて個人差の原因をなせりと解釋したるは、今日より見れば非科學的にして信を措くに足らざるも、人の氣質の相異なるは體質に基因する點あるは事實なり。

カントは多血質と黒胆汁質とを感情の氣質として、輕血及び重血質と稱し、胆汁質と粘液質を活動の氣質となし、溫血冷血質と稱し、ヴントは感情の強弱及變化の遲速の點より見て胆汁質を強にして速、黒胆汁質を強にして遲、多血質を弱にして速、粘液質を弱にして遲とせり。エルゼンハンスは兩者を折衷發展して左表の如しとせり。



氣質	多血質	胆汁質	黏液質
感情生活の亢奮性	易	難	難
感情經過の形式變化性	易	難	難
強度	弱	強	弱
感情の動機力	大小 氣分に動く人 氣兼質ひ	大小 思想家、ヒコゴンデー！ 活動的理想家	大小 冷血家、頑固者 冷淡家、無感覺家

以上の四氣質は人世觀、世界觀を着色すべき主因にして即ち快の反應多き時は其氣質より生ずる人生の倫理的價値を評價する所樂天的となり之に反するものは厭世的なるが如き其例なり。

第二節 氣質と心的生活

多血質の人は感情の變化速かにして容易に變轉し常に樂觀的なり長所とする所は鋭敏なれども外部の事情に左右され易し。神經質の人は悲觀的にして現在の刺撃に搖かされることなく自己の思想を固執し未來を念ずるが故に進取の氣象に乏しく且保守的隱遁的なり。胆汁質の人は熱情剛膽に

して思慮あり、忍耐力あれども同情に欠くる所あり。粘液質は感情の變轉遅き故に現在の印象には無頓着なり沈着、忍耐力には富めども平凡を免れ難し。之を個人に就きて見んか織田信長の如きは多血質なるべく、粘液質の者には徳川家康の如き適例なるべし、又之を同人種間に擴げてはアングロサクソン人の粘液質の如き、ラテン民族の多血質なるが如き、ジャーマン民族の胆汁質なるが如き其他各國民間、各地方に於ても氣質の差は存するなり。坪内博士は、倫理と文學中に於て四氣質に就きて詳説し終りに其要を示せり、その言よく四氣質を評せしものなるを以て左に掲ぐべし。多血質、才子肌、世才家、感情家、空想家、肉慾に溺れる人、神經質、普通智慧者と稱する質である、策略家といふのもこゝから出れば、慷慨家、熱誠家、精神家、厭世家、懷疑家などもこゝから出る。粘液質、總じて慾氣の薄い樂天家は此の仲間である、君子、善人、篤實な人、實體な人、正直者、律義者、後生樂な人、恬淡家、冷淡家、お心よし、うすのろ、間拔、拔作、ぼんつく、ぼん太郎、頓問、愚圖、意氣地なし、ぐうたら、甲斐性なし、おひきずり、などといふのは皆此中から出る。胆汁質、剛腹家といふもこれから出る、大いなる事業家、十分に斷行し得る事業家もこれから出る、沈着に大事を行ふ



人も此の質、あの人は落着いた人だな、眞面目に事業をやつて屹度仕遂げるなどと評する、其代り大泥坊も之から出る、大罪人も之から出る、鐵面皮な圖々しい、押の強い奴、糞度胸の据わつた、思ひ切つたとをする、非を遂げるなどいふも此の質、神經質と云ひ膽汁質と云ひ氣質の差別が之に止りて斯かる區別の正當なるか否やは疑問なれども、要するに氣質とは感情活動の差別が其大部なるとは信じ得べし、而して此の感情活動の種々相はひとり感情生活内のみ止らず、あらゆる心的生活を支配するものなるを以て氣質は各人の情意的生活の種々相の根本差別なりと云ふを得べし。固より此傾向はその初めに於ては漠然たるも漸次其經驗を反覆し、複雑さを累ねるに従ひ、強度に於ては退歩すれども其本質に於ては發達し、各自の實行的思想及び行動を支配する一定の傾向を特有するに至るべし。然れども氣質は絶體のものにあらざるが故に、社會や文化によりて影響も受くべく、やがては人間生活の改造も可能なる所以なりとす。氣質は遺傳的に生ずる性癖なるを以て之を陶冶するは不可能事なれども之を助長、制御するに及びて或目的を遂行すべき何等かの傾向を生せしむ、之氣質の品性構成に密接なる關係ある所以なり。

第三節 遺傳的性癖

遺傳的性癖の外界の影響によりて其本質を變化すると能はざるは既に述べたり、之を自然界に對照をとりて見るに、(永井氏生命論に據る)紅色の花を開くべき櫻草を高温度の所に置くと白い花を着ける、然らば即ち外界温度によつて、紅色櫻草が其本性を變じて本來白色の花を開くべき白色櫻草に變化したのであるかと云ふに、決して左様ではない、何となれば高温度で白色の花を開いた紅色櫻草から取つた種子を、常温の下に發育させて見ると矢張紅色の花を着けるが、之に反して本來の白色櫻草は如何なる温度の下にも常に白色の花を着けるからである。サートー・マンス・ブラウンは、汝は花の都雅典に生れたるを談ること勿れ。汝に種々の感謝すべきものあり、就中正直なる兩親より生れ、同一の卵内に在りたる禮節、謙讓、誠實の諸徳が汝と共に此の世に來りしを天に感謝すべしと言へりと。

第四節 遺傳の實例

遺傳の如何に影響する所大なるかを例示すれば個人に就きてはダンテは九才にして既に大詩人の萌芽を現はし、ゲーグインはエラスムス・ダーウインの子にして、ベートーヴェンは十三才にして作曲し、徳川家康の孫に家光



の如き大人物の出でたるが如き皆此の例なり、又之を一家系に就きて見ればジョナサン・エドワードなる人の家系にありては一九〇〇年には其子孫總數一三九四人中二九五人は大學卒業者、一三人は最も大なる學會の會頭、六五人は大學教授、六〇人は醫師にして然も多くは知名の士なり。一〇〇人は傳導師若くは神學教授、七五人は陸海軍士官、六〇人は名聲ある文士及記者にして其等の人々によりて百三十五種の價值多き著書と十八種の重要な雜誌が刊行されたり、又一〇〇人餘の法律家を出だし、其中一人は米國に於ける法學教授の權威と目され、三〇人は判事、八〇人は公共事業に従事し、其中一人は米國副統領、三人は米國元老院議員、一人は知事、代議士、法制纂定者、市長、外國公使となり、一人は太平洋汽船會社の社長なりしと、而して之等多數の人々は三十三の合衆國の各州、九二の米國の各都市及び外國に住し曾て一人の犯罪者を出さざりきと云ふ。

又佛國の數學者ベルヌーイの一家にありては即ちジャック・ベルヌーイと二人の甥と甥の三人の小供とは有名なる數學者にして、兩親共に計算力に富む多くの家族より出でたる七百二十八人の小兒中四八名を除きては悉く計算に巧みなりし

と、記憶力の遺傳につきてはリチャード・ボルソンは有名なる希臘學者にして非常なる記憶力を有しその母及び姉も拔群なる記憶的才能の遺傳を有せりと、之に反し惡しき性質の遺傳に關する家系の代表的なるものには、紐育のデュークなる家族は一七二〇年生れの慥意にして放縱なる一漁夫より起り、其五人の娘より五代に至る間に約二〇〇人の外より結婚し來れる者を除去して總數一二〇〇人の子孫を生せり。其中五四〇人の履歴は判然すれども五〇〇人の履歴は稍不明瞭なりと云ふ。此一二〇〇人の子孫中三〇〇人は天死し九〇〇人中三一〇人は放浪生活を營み彼等が養育院の保護を受けし總日數は實に二千三百年の多きに上り、四四〇人は病弱者にして婦人の半數は娼婦となり、一三〇人は重罪犯人、六〇人は常習の盜賊、七人は殺人犯にして、多數なるデュークの家系中一人として普通教育修了能力を有せし者皆無なりしと云ふ、然も此の家族の爲めに合衆國は既に二百五十萬圓の費用を要したりと。

第五節 實行的の思想感情

塊地利の心理學者ヨードルは感情生活を感性的(即ち感覺を内容とする單純なるもの)精神的(即ち複雑なる表象觀念を内容とするもの)



に二大別したり、前者は説明の要なければ省き、後者につきてのみ述べれば即ちヨ  
 ードルは精神的感情(複雑なる感情)をば、形式的感情と人格的感情とに分類したり、  
 形式的感情とは個々の内容より分離し單に感情の變化方面より之を觀察して力  
 及び緊張の感情とせり、力の情とは即ち成功、進歩、優勢、明瞭、充實、其反對の無力、無能、  
 不明瞭、淺薄、貧弱の諸情にして緊張の情には期待、忍耐、躊躇、疑惑等を分ちたり、次に  
 人格的感情とは自己及び他人に關するものにして自己と他人とに關する二感情  
 に大別せり。自己感情中には名譽、自愛、満足、高慢、虛榮、及び謙讓、羞慚、後悔等を加へ、  
 對人中には愛情、憎惡、慈悲、惡意、信任、不信任、尊敬、輕蔑、羨望、嫉妬、其他の感情を數へた  
 り。大體に於ては妥當ならんも人間には更に複雑なる感情の存するを忘るべか  
 らず、これらは本書中隨所に説明するが故に、今左に天賦と遺傳と習慣とによりて  
 各自の實行的思想及び行動を支配する一定の傾向を特有せしむるものにつきて  
 述べんとす。

世には不幸、災禍、困難の中に在りて猶その中に慰安と力を見出し、如何なる闇黒の  
 ドン底生活にありても閃光の一條を見出し、巨岩に己れの頭を打ちつくるが如き  
 苦惱の中にも尙路傍に咲き匂ふ野花を摘みつゝ歩み得る人は幸福と云ふべし、  
 吾人は常に後に至りて後悔し或は耻ぢざるべからざる不正にして、公明ならざる  
 行爲あるべからず、將に霽れんとする雲は如何に闇黒なりとも白金の光を藏すべ  
 し、疾しからざる良心は不斷の響應あるを忘るべからざるなり、人は如何なる困  
 難にも打ち勝つ向上心を有せざるべからず、然れども誤られたる功名心の乗する  
 所となるべからず、誤られたる功名心は止むる所を知らざる飛行機にして遂には  
 墜落すべき運命を有す、固より、人は向上を要す、されど向上を求むるにも放膽なる  
 べからず、よろしく深慮を回らすべきなり、ヂスレリーの言ひし、天を仰がざる者は  
 地に俯すべし、天に翔け登る勇なき靈魂は恐らく地に匍匐せざるべからざる運命  
 を有す、てふ名言を忘るべからず、而して事に當りては誠實ならざるべからず、何と  
 なれば、誠實は己れの有する唯一の財寶なればなり、古人も、此世に於て犯されたる  
 最初の罪は——幸にも惡魔は智識の樹上にて行へり——不誠實なりと云へるに  
 あらずや、誠實になさざることば神の徳を潰すことにして遂には人間をも迴避せ  
 ざるべからざるに至るべし。



### 第三目 品性の種々相

#### 第一節 誠實

品性の種々相を擧ぐれば千態萬樣、指に違なきが故に、其重なるものに就き之を説くべし。吾人の行爲は多々なるも誠實 [Honest] にして天眞流露のものならんには如何に相異なるが如く見ゆるも一意思より出でたる調和統合の行爲たり、程伊川の所謂「公なれば則ち一、私なれば則ち萬殊、人心の同じからざる其面の如きは唯是私心」と曰ふものは是なり。本心より出でたる各行爲は行爲それ自身に於て行爲の如何なるものなるかを雄辯に語りつゝあるものなり。家庭と謂ひ社會と謂ひ國家と謂ひ要するに誠實てふ一本の綱に結びつけられて始めてその確實なる存在の意義あるものにあらずや、誰か明日の確實性なくして今日の生活を續けん。人生のあらゆる行爲の主權者たる誠實は詩人アーノルドの父の「心の透明」と稱し、總べての徳の上に置きたるが如く、如何なる理由の下にも犠牲を許さざる至上の物たるを吾人は切言するものなり。誠實は總ての行爲となりて現はるべけれども勤勉も亦其中の一なり。例へば眞の聲名は如何なる富貴の家に生

れたる者と雖、勤勉ををきて他に求むべからず、何となれば富貴は父祖の傳ふる所のものなれども、眞の聲名は勤勉によりて贏得せる唯一のものなればなり。世に福運は盲人の如くして人を識別せずといふものあれども、焉んぞ知らん斯かる人は自己の周圍に福運の群りつゝあるを知らざる人なり、福運は常に誠實の人に迎へられんことを望めり、古人は「天才とは他に一種の才あるにあらず凡人の誠實勉勵によりて得らるゝものゝ別名なり」と言へり。何物と雖、浪費は慎しまざるべからず、浪費は誠實ならざる間隙に生ずるものなり、浪費中時の浪費の弊害より大なるものなし、恵まれたる今日は神の至善至高の賜物ならずや、世に白髪を頂きて猶過ぎし歳月の再び廻り來らんことを請ひ祈る心事程いたましきものあらざるべし、是の如きは皆時に誠實ならざりし結果ならずして何ぞ。羅馬の大哲セネカ曰く「我等は皆時の短きを歎す、されど我等はその用途に窮する程の時を有せり、我等の一生は無爲なるか、適切なる何物をもなさざるか、或は爲すべきことを爲さずして過すべし。我等は常に命の短きを歎じつゝ、なほ我等の生命は盡くる期あらざる如く振ふなり」と。



第二節 向上

向上 Aspiration の美德も流れて浮華輕佻となり冒險突飛となるに

至りては其弊害の恐るべきものある言ふ迄もなし、世には一時爆發的聲名を馳せ非常なる喝采裡に迎へらるゝ者あれども、その過大に過ぐる想像的評價を裏切りて時の流れと共に凋落する實例尠からず、誤れる向上心は容易に完全の幻影を寫すものにして眞實の假面者なれば、早晚その眞相の曝露するや自明の理由なり。凡そ信念と希望とを抱ける人は、他の何物を有するものより優者なるべし、例へば一は明晰なる頭腦と判斷力を備へ、一は向上的にして解放的力強き精神の所有者と假定せんか、其感化する所何れが大なるか、人は學ぶことを中止すればその成長も中止することが眞理なりとせば向上心の重大なること以て知るべし。然れども所謂向上的進取的或は精力家と稱せらるゝの人は往々想像的の目的に幻惑し之に向ひて渴仰し努力するものあり、斯の如きは向上心の羅針盤を誤りたるものにして速やかに叡智を以て此一大贖造の假面を剝がざるべからざるなり。ゲーテは人は修養の爲めに生くるものにして、事を完成せんが爲めにはあらず、己れを完成する爲めに生くるなり、陰徳を施して名無きは汚名を歴史にとゞむるよりも

優れり、ケーナン Cuman の女は無名なるも、ヘロデアスの有名なるよりも遙かに幸福なり、誰かピラト Pithous となるよりも寧ろ眞の盜賊なることを欲せざらんや、と言へり眞に味ふべき言ならずや。向上心は自己を主張し決して他を模倣するものにあらず、撓まざる不斷の修養により、累積せる力を基礎として天與の才能を發揮するに務むべし、何となれば他より借り來れる才能は眞に自己に屬するものにあざればなり、而して眞に自己の才能を發揮し天地の創造者に合せんと務むるものは、眞の向上心を有するものの行爲にして他より借り來らばその分配を二分せざるべからず、且稍々もすれば其方向を誤たしむることあるを注意すべきなり、山上豊かに匂ふ百合を手折らんとする者は、一人の援助の來るを俟つものにあらず、助力を卻けて己れ一人が努力の草鞋を履きて進む勇者の所有を俟つものなり、凡そ人強烈なる向上心を有すれば、それに従ひ一層確固たる理想と指導力を有せざるべからざるは個人も、民族も國家も同一なり、マルチン・ルーテルは最も強烈なる自我主張者の一人なり、絶體的なる自己信賴と獨斷を楯に時代の精神を革新せんと一大獅子吼をなせる人なり、その世上に見る似而非野心家と異



なる所以のものは固よりルーテル其人の深刻なる自己感情によるべけれども、歴史上新くまでに自我の社會的擴大を確保せんと務めしもの、中他に比すべきものなき所以は、燃えるが如き信仰に根ざすと共に要するに時代の精神の向上を覺醒せしめ指導せんとする或る信仰と一致せる爲めならざるべからず、民族に於ては奮闘的なるアングロサクソンにその例を見るを得べし。然れども今日は總べてのものが分析し、解剖され統計化さるゝ科學才能の弊を受けて智識は才能なりと信する者さへあり、果して智識を餘所にして他に求むべきもの無きか。或人の言へる如く智識活用の世界にありては或は智識は萬能なるべきも其根本的基礎たる向上心——即ち神に祈禱する心を措きては要するに思想の遊戯たるを免れず、而して自己反省を忘れたる人の靈魂は呪はれて地上に匍匐し飛躍するを得ざるべし。然りと雖神に祈禱し或は信念の體得を爲すことは人間の蟲のよき願望を以て上天の耳を瀆すものと混同すべからず、萬物の本源たる神又は究竟相に調和——處世學の言葉を以てすれば内外の統合を得ることが、人間唯一の努力の目標にして、之に向つて進むとを外にして、他に向上心を如何に解釋すべきぞ。性格

の種々相は爰に説き盡し難しと雖、其中最も重大なるは誠實と向上心との二なり、誠實なき向上心は危険にして向上心なき誠實は能率なきが故なり。

第三節 環境と品性

國境と人生との交渉は既に屢説明したる如くなるが其品

性に及ぼす影響の大なるは眞に驚くべきものなり。荀子は其性惡篇に「繁弱鉅黍、古之良弓也、然而不得排擲、則不能自正、桓公之慈、太公之闕、文王之錄、莊君之咎、闔閭之于將、莫邪鉅闕、辟閭、皆古之良劍也、然而不加砥礪、則不能利、不得人力、則不能斷、驂騮驥、鐵離、絳耳、此皆古之良馬也、然而必然有銜轡之制、後有鞭策之威、加之以造父之馭、然後一日而致千里也。」夫人雖有性質美、而心辨知、必將求賢師而事之、擇賢友而友之、得賢師而事之、則所聞者堯舜禹湯之道也、得良友而友之、則所見者忠信敬讓之行也、身日進於仁義、而不自知也者、靡使然也、今與不善人處、則所聞者欺誣詐僞也、所見者汗漫淫邪貪利之行也、身日加乎刑戮、而不自知者、靡使然也、傳曰、不知其子視其友、不知其君視其左右、靡而已矣、靡而已矣。」と唱へしが如きは是なり。之に反し家庭、社會の惡感化ある場合多きも亦免れざるとなり。一二の例を舉げんに謀故殺は人の大辟にして、而も其因由は多く家庭の復雜なる事情が各人の性行に及ぼしたる結果たるは統



計の示す所なり。又自殺の如きも精神錯亂の結果なるも、後に示す統計によれば之又家庭の各人に及ぼす影響に原因するものにして、思想問題、男女問題、勞働問題、政治問題、其他時代思潮は勿論、日々起る社會の種々相の影響なきを得ざるなり。外界の印象を最も受け易き小兒を見よ、小兒は實に鏡の如く此の時代の喜びも悲しみも吸収されて彼の思想をもつくるべし、ブルーム卿 Brougham は「小兒が生れて十八ヶ月目より三十ヶ月目に至る、此間の物質世界と自己の力と他の物體の性質に就き、更に進んでは自己の心と他人の心とに就きて學ぶ所のものは、彼が其後全生涯に於て學ぶ所のものより多かるべし」と。同時に母親の感化の偉大なるものあるを忘るべからず、實に母親は「家庭にありては總ての心を引く磁石、總ての眼を引く北極星なり」彼の大文豪、大藝術家と唱へられし多くは母親の感情と趣味とが、其子の天分を指導するに與つて力あるは明らかなる事實にして、グレイ、スコット、バインズ、シルレル、ゲーテ等の生涯を知れる者誰か之に嘴を入れん、エマースンは「文明の完全なる尺度は善良なる女性の感化なり」とし、ゲーテは「我が母は生きる價値ありし人なり」とし、大ナポレオンは「予の今日の榮達は母の感化教訓か與つ

て力あるなり」としたり。

受刑者

父母存在	男 一六、一二五 女 九七二
父又は母のみ存在	男 二一、八三二 女 一、二九〇
父母共に死亡	男 二〇、五三六 女 一、五五一
棄兒	男 五二 女 六

殺害

原因	大正五年	六年	七年	八年
盜賊の爲め	四五	五九	三九	一九
怨恨に因り	六三	一一九	六〇	五六
爭論上又は一時の怒に因り	二二四	四〇二	二三〇	二二七
賭博上の争に因り	七	一三	一三	一六
計				
男				一九
女				一三
計				三二







失 戀	身 體 の 不 具	愛	親 又 は 夫 妻 子 等 の 死 去	親 又 は 夫 妻 子 等 の 病 氣	淫 逸、放 蕩	老 衰、身 體 の 不 自 由	厭 世	迷 信	兵 役 不 合 格 兵 役 忌 避	其 他	不 詳	總 計	計 女 男	
													女 男	女 男
三四 六五	二二 九八	九六 九八	三三 三〇	一一 七六	一 一六	〇 一七	一 〇四	一 一八	一 〇四	二 四六	一 七六	一 四七	一 二四	一 二四
四三 九九	二二 三二	七九 三〇	四二 四八	一一 九二	一 〇三	一 九三	五 八一	一 三四	一 一四	二 四七	二 六〇	一 四七	一 一四	一 一四
六三 四七	二二 二四	六七 一五	三六 七三	一一 二七	一 一八	一 〇二	六 八六	一 四九	一 一三	四 五〇	二 六六	一 四六	一 一四	一 一四
四四 七六	三三 三四	六八 一八	六三 一五	二二 二二	一 二七	一 一五	六 〇二	二 四	一 九三	四 六三	二 七九	一 五七	一 二五	一 二五
一 三	五 四	三 四	五 七	五 五	二 一	一 四	一 三	六 一	一 九	五 三	二 六	一 四	一 二	一 二

米の相場と自殺者棄兒 (内務省社會局調査)

年 代	米 價	自 殺 者	棄 兒
明治三三—三五	十二圓	八千四百五人	二百四十人
三六—四四	十三圓—十五圓	九千—一萬人	三百三十四人
大正元—七	十八圓—廿二圓	千—千三百人	二百四十五人
八	三十二圓—五十圓	一萬二千六百廿四人	百六十一人
	四十五圓—八十圓	一萬二千四百卅一人	百五十一人

吾人は何人と雖伯夷叔齊にあらざる限りは社會の一員として生活せざるはなし、従つて時代精神と社會的意志に支配されずんばならず。吾人の見聞する所は社會の習俗にして、學ぶ所のものは時代の智識なり。況や日常生活に要する總ての物質は悉く之を社會に仰ぐに於てをや。モンテスキューは一國の政治が國民の品性に及ぼすを論じて曰く「壓制政體の人民は恐怖を以てし、君主政體の人民は名譽の念を以てし、共和政體の人民は徳義を以てし、各々其社會に生活しつゝあるものなり」と。即ち政治の人心に及ぼすを説けるものなり。産業も亦氣質に影響する所大なるべし、即ち農を業とせる地方の人民は一般に純朴なれども、商工業發達の



地方にありては進歩的にして輕薄の傾きあるが如きは其例なり。又宗教の影響する所も大なる勢力を有すべし、即ち日蓮宗の行はるゝ地方は概して現世的にして、禪宗の行はるゝ地方は質朴なれども粗漫なるが如き、或は露國は外部から異民族の壓迫を受け外部に發展するの餘地なかりし爲め國民の精神は試練され、其結果キリスト教の信仰は根底を深く國民の心奥を固め露西亞人獨特の氣質を養成したるが如き這般の事實を語るものなり。然れども政治、科學、實業、經濟、哲學、藝術等の一切の必然たる新傾向を表現體得せしめ、人生、社會に關する根本の理解力を養成すべき教育の影響の大なるは茲に説明の要なかるべし。一生涯の半ばをロビンソン・クルーソーの如く水と太陽とのみ見て暮し文明を呪ふて終に孤島の蠻人間に韜晦したる、生れたるまゝの天才畫家ゴウガン Paul Gauguin は「教育は寧ろ余の妨げなりしなり」と曰へるは抑も何事を語るものなりや。我日本の教育制度の弊も亦餘りに政權に左右さるゝ點に在り。教育にして若し一度政權の下に附屬せんか眞の教育は望むべからず何となれば教育の自由は忽ち蹂躪せらるればなり、ゴウガン言葉よく之を語るものにあらずして何ぞ。又形式にのみ流

れたる思想訓練の上に樹てられたる教育は何等の利益を齎らさざるのみならず、返て吾人の個性を傷くるものなり、ルネッサンスに於けるダンテの教育上偉大なる影響ありし所以を忘るる勿れ。現時の我國の教育機關の大發展に伴ふて一大飛躍をなさしむる新生命を養ふを忘れたる當事者は、文藝復興期に於ける偉大なるペトラルクの「人生の最も尊きものは詩なり、凡そ理論なるものは徳性の奴隸に過ぎず、藝術こそは道德と眞理とを兼備せるものなり」との主張を味ふべきにあらずや。ジエレミイ・テイテ曰く「天上の美を觀るものは眼にあらず、音樂の妙を聽くものは芽出度き出來ことの吉報を聽くも耳にあらず、其は五官や心の總ての快味を感ずる靈魂なり。故に靈魂が尊く且優るに従ひて其感ずる所の快味も亦益々偉大且愉快なるべし。故に子供の時に我々は立派な貂の毛皮や、星月夜の夜光珠や、枝も鳴らさぬ太平の御代を見るも、又高僧の説教を聞くも我々は一向心に意識せず所謂見れども見えず、聞けども聞えず單に愚人の愉快、痴人の歡喜を感ずるに過ぎざるなり。」

第四節 品性の力

個人の生活も國民の生活も品性の基調なくして向上發展を



遂ぐる能はず、能率増進も社會改造も畢竟品性問題を外にして行はるべからず、社會改造尠くも其一部たる個人又は公共團體の生活改善又は救助に於ても痛切に之を感ぜざるを得ざるなり。試に見よ恩惠を受くる貧民階級は其當事者個人に對して感謝報恩を不必要なりとするも、當然一層社會奉仕の念を起すべき筈にあらざるや、然るに事實は之に反し困りし時は救助を受くべきを期待して貯蓄心を有せず、甚しきは救助の不足を訴へて目的を達すれば、蔭で舌を出す[が如き、相當教育ある貧民階級の態度にも發露する亡狀なり、其他労働者の資本家に對する要求、社會運動家の行動目的中には不法不徳のものあり、吾人は資本家の横暴を赦す能はざる如く、労働者の横暴をも容るゝ能はず、等しく是横暴なり、一を非難し一を許容する理由は寸毫もあるべき筈なければなり。更に國家に就きて之を見るも其輿廢は一に國民の品性に基くとは陳套の言なるも亦不可動の事實なり、ルイ十四世が其宰相コルベールに問ふに佛國の如き廣大にして人口多き大國が、和蘭の如き小國を征伏し得ざりし理由如何を以てす、コルベール之に答へて曰く、國の大小とは領土の大小を謂ふにあらず其國民の品性に據るなり」と、羅馬は七丘にして起り

周は十里にして天下に王たり、之に反して國民の品性にして墮落せんか、如何なる大國も土崩瓦壞史上より空しく消え去れり。

(人重くして物輕し)

人の物に於ける、其自ら附くを聽し而して其自ら去るに任ずれば、即人重くして物輕し、人重くして物輕ければ、則物の人に附くは堅し、物の人を去り分裂四出して禁ず可からざる所以のものは、物重くして人輕ければなり。古の聖人の、其天下を取るは、其驅りて而して之を來すにはあらざるなり、其天下を守るは、其劫して之を留むるにはあらざるなり、天下をして自ら附かしめ、已むことを得ずして之が長と爲る、吾は天下の利を役せざれども、然も天下自ら至る、夫是を以て去就の權は、君に在りて而して民に在らず、是を之人重くして物輕しと謂ふ。(蘇子由、階論)

(人各々天賦の特性あり)

且つ夫れ鈎繩規矩を待ちて、正しき者は、是其性を削るなり、繩約膠漆を待ちて而して固き者は、是れ其徳を侵すなり、禮樂に屈折し、仁義に啗食して、以て天下の心を慰むる者は、此れ其常然を失ふなり、天下に常然有り、常然とは曲れる者は鈎を以てせず、直き者は繩を以てせず、圓なるものは規を以てせず、方なるものは矩を以てせず、附離するに膠漆を



以てせず、約束するに纏索を以てせず、故に天下誘然として皆生じて、而して其生する所以を知らず、同焉として皆得て、而して其の得る所以を知らず、故に古今二ならず、虧く可からざるなり、則ち仁義又奚ぞ連連として膠漆纏索の如くにして、道德の間に遊ぶことを爲さんや、天下をして惑はしむ。(莊子、外篇駢拇)

(品性と信用)

是れ故に冥冥の志無き者は、昭昭の明無く、惛惛のこと無き者は、赫赫の功無し、術道を行く者は、至らず、兩君に事ふる者は容れられず。

誠ならざれば則ち獨ならず、獨ならざれば則ち形れず、形れざれば則ち心に作り色に見れ言に出だすと雖も民猶若として従はざるなり、従はしむと雖も必らず疑ふなり。(荀子、不苟篇)

(君子たるは環境の如何に係らず)

故に君子事を力むれば日に強し、欲を願へば日に逾しくもす、壯を設くれば日に盛なり、君子の道や、貧なれば則ち廉を見る、富めば則ち義を見る、生れば則ち愛を見る、死すれば則ち哀を見る、四行は虚く假るべからず、之を身に反する者なり。(墨子、修身)

(君子と小人との別)

子の曰く、君子は和げども同じからず、小人は同じけれども和がず、子の曰く、君子は泰な

れども驕らず、小人は驕れども泰かならず。子の曰く、君子には事へ易けれども、説はしめ難し、之を説はしむるに道を以てせざればなり、其の人を使ふに及びては之を器にす、小人には事へ難けれども、説はしめ易し、之を説はしむるに道を以てせざると雖も、説ぶなり、其の人を使ふに及びては、備はらむ事を求むと。(論語)

君子は能あるも亦好く、不能なるも亦好し、小人は能あるも亦醜く、不能なるも亦醜し、君子は能あれども即ち寛容易直にして、以て人を開導し、不能なれば即ち恭敬縛縶にして、以て人に畏事す、小人は能あれば即ち無傲僻にして、以て人に驕溢し、不能なれば即ち妬嫉怨讟にして、以て人を傾覆す、故に曰く、君子は能なれば則ち人は學ぶを榮とし、不能なれば即ち人は之に告ぐる事を榮しむ、小人は能なれば即ち人は學ぶを賤み、不能なれば則ち人は之に告ぐるを羞づ、是れ君子と小人との分なり。(荀子、不苟篇)

材性知能は君子小人一なり、榮を好み辱を惡み、利を好み害を惡むは、是れ君子小人の同き所なり、若し其の之を求むる所以の道は則ち異なり。(荀子、榮辱篇)

(向上心なきは誠む可し)

孟子曰く人の患へば、好みて人の師と爲るに在りと。(孟子、離婁章句)

(迷信を排す)

怠徳公御代、北の方に夜々群星出づ、世人是を見て、亂あらんと言合へり、或時御咄に下



々此星を亂あらんと疑ふ由、何れも能く心得よ、大なる天下の、ある星一つ出でしとて、何れの國に當るやを、誰も存ぜず、我國へ是非當り、此の如しと思ひ候事愚なり、其上善くも悪しくも、天の氣に顯るゝ事、如何ぞ人間除くべけんや、是皆愚なる者の申す事なりと仰せられし、明君の御心掛、感ぜぬ者ぞなき、(責而者草、徳川秀忠)

信綱公御病氣差詰り、既に大切なりし時、御嫡輝綱公に仰せらるゝは、大猷院様、當上様遊ばされける御自筆の物を取出し、新しき薬籠の内へ詰めよと、御指圖ありて、則ち御眼前にて輝綱公をして詰めさせ給ひて、我等見る前にて、焼くべしと宣ひて、火を打ち焼かせ給ひ、烟收ると等しく、薬籠其の蓋を麻を以て緘げ、自分の封を付け給ひ、我死なば此薬籠を頸にかけ埋むべしと仰付けらる。又御内役人共残らず支配の帳を持参すべしと仰付けられ、其帳に相違なく帳面の通り相済みと書かせ給ひ、其下に御自分の印判を篤と押し給うて、役人共へ渡させ給ふ故、御逝去後に一人として科人なかりけるとなり、又御病氣大漸せらるゝ時、養母なる御人宜ひけるは、最早何事も入らず、念佛を御失念なされまじ、御本復あれば、是祈禱となるなり、又死後にも後世ともなり申すと仰せければ、則ち信綱公答へ宜ふは、少しも念佛を申すべき心入なし、夫はいかにと申すに、私儀は御重恩別して身に餘りぬるものなれば、常に御奉公を勤め足り申さすと、寢臥にも存する故、今以て其通りなれば、御奉公々々とは唱へ申すべけれども、念佛申すべき隙なしと宣ひけ

るとなり、寔に忠孝類なき人なりと、聞く人感涙を流しけるとなり。(事語雜志録、松平信綱)

(徳望なき事業は後世に傳らず)

一學生、名は三輪善藏といふ者、西國へ下り歸京の節、播磨路へ懸り、明石領へ入候へば、札の辻といふ様な所へ村の者罷出で、小高き所へ酒を手向け拜する様子なり、其内年寄りたる者は、感涙を流す者もあり、村の神事などにて之あるかと看過ぎ、先の村へ懸かれば、亦右の通りなり、次々村里へ懸かれば、何れも右の通り故、怪しく存じ、道筋の酒店に休み、如何なる事にて、右の通りなるやと尋ね候へば、亭主申し候は、定めし御通りなされ候序を追つて、右の通りにて御座あるべく候、是には譯之ある事に候とて、懐舊仕る體故、如何様の譯かと尋ね候へば、さればの儀に御座候、明石侯の御家中に、中根郷右門殿と申し候人、御器量もあり御徳義もあり、夫れ故段々御立身、後は郷中の事を御掌りなされ候、百姓の爲に利を興し、害を除き、村里の儀は申すに及ばず、田畑、山林等の事まで、御苦勞になされ下され候故、何れも有難く存じ、御上の首尾も宜しく御座候に付、上下共悦び罷り在り候處、何卒止む事を得られざる譯も御座候や、御暇御願、明石表御引取なされ候、百姓共餘り御残り多く存じ候て、辻々へ罷出で、御暇乞ひ仕り候、則ち何の年今月今日、此村を御通りなされ候が、唯今頃にて候右御恩惠を存じ出し、年々今日は御腰を懸けられたる



所へ御酒を供へ、年寄り候者は、落涙仕り候者も御座候、私以て右の通に候旨、物語致し候。  
 (仰景録、酒井忠勝)

(秀吉の亂倫天下を失ふ)

大阪御陣の時、夏陣に、伏見より本多佐渡守承にて、立齋様へ密に早々御越しなされ候様にとの御意あり、家康公より佐渡守へ仰付けらるゝは、秀忠公若く御座なされ候、斯様の事に及びては、律義にして、功の入りたる年盛の者、相談の向座に之なくてならぬ物に候、立花はさのみ心安すべき者に之なく候へども、弓矢を取りて功者に候、殊に物を變改せぬ氣立に之あり候間、將軍今度の談合相手に仕らるべく候、此趣佐渡守手前より申聞くべしとの御意なり、立齋様へは、御先に大阪へ御座なされ候故、早々伏見御上りなされ候處、佐渡守右の通り申談す、則ち將軍様御前へ御出なされ候、御意に、委細の儀は、佐渡守唯に相傳申すべく候、其方儀多年心安き事に候、今度出勢の内、福島左衛門大夫、加藤左馬之助、其外毛利、淺野以下、別條之あるまじくや、加藤、福島は、其方數年の舊友にて、心立も存じたるべしと、思召し上げられ候に付、御尋ねなされとの御事なり、御請に御上げられ候は、加藤、福島事、別條あるまじく候、總て太閤御取立の者共、先年其女房々々登城仰付けられ候後、役々は、太閤へも内心の憤之あり候、只今も斯様の儀、白地に申上げ候は、太閤御恩は、淺からぬ身にて候へども、一切の物は、道理と申す物之ある時は、一旦悪しく候とも、後には

能き事に成り申し候、太閤の御子孫に向ひ、弓を引き申す事は、身に取つては、權に似て候へども、關ヶ原御一戦の刻までには、秀頼公の爲めには、既に身命を捨て、家を潰し申し候是れ太閤への報恩に御座候、其後生計の爲めに、御當家より少地下され候間、何様御奉公仕るべき所存に御座候、御人數の内誰彼と、申すとも、少しも御心置かるまじく候、太閤御子孫繼絶の時節到來にて候故、御本意に任せられ候儀、少しも滞り申すまじく候由、御上げられ候、重ねて御意に、秀吉子孫繼絶の時節到來とは、如何様の事ぞと、御尋なり、又御上げられ候は、最前申上げ候様に、物は道理、次第にて御座候、太閤は信長の取立にて、信長の子孫を、或は死罪、或は流罪に行はれ候、譬へば、御當家太閤の御恩を厚くかつがるゝと申すとも、太閤の非義、子孫に報ゆ所、其通あるまじく、況や御當家少しも太閤の恩下に成りたると申す儀、御座なく候間、今度の御利運露程も疑あるまじき由、御上げられ候時、御前にも別して御納得遊され、御上げらるゝ所、一々御尤に思召し上げられ候。(立花遺香、立花宗茂)

(誠實は立身の基なり)

凡御小性の列座に仕うまつるに、御用にて召さるゝには何事にてもすべて座次の順に應ずる御作法なれば、各其定めをば守りながら、皆若輩の集りなれば、我儘を振舞ひて、御次へ出て休みがちなれば、(松平)長四郎君常に其闕を補ひて詰所を退く事なく、毎度詰



越し御用を承り給ひけるにより、上機根者よと、御目に止りけるとぞ、又或時御大奥へ御  
 劔を御持たせ御夜詰過ぎて丑の刻時分、長御廊下の幽暗き所に御劔を持ちて伺候し給  
 ひける處に、表へ出御の時分に、長四郎君假寝居給ひける所を、御劔を引取らせ給ひて御  
 持歸りあれば、長四郎君は誰とも覺えず知らず、ふと目を覺し給ひつゝ、やるまじきとて  
 追懸かり、臺徳院様へ取付かせ給ふによつて、公にてましますなり、奇特なる小兒かなと、  
 御感斜ならず、此心一生放すなど、殊の外の御褒美ありし、又或時臺徳院様御秘藏の屏風  
 御次の間にありつる處にて、長四郎君より年ましの衆中と戯ひ給ひ、夫を打破り給ひし  
 に、出御の節之を御覽あり、何者のわざぞ、御次の間に於て斯様の事何とて仕りたるやと  
 御意なれば、戯ひたる衆は詞もなく居けるに、長四郎君十歳計りの事なれども、私かく  
 〱の事と、小聲になつて御側なる衆まで申上げさせ給ふを御聽ありて、能くぞ正直に  
 言上仕りたる者かなと、却つて御褒美にて、さり乍ら重れて嗜み申せと上意ありしとな  
 り、又長四郎君幼少く在しける時、御城に寝宿し給ふ時、申す女附いて参りたり、大方  
 時々の飯をすきと喰ひきり給ふことなく、汁をかけられても皆迄喰はず、御召なりて御  
 前へ出でさせ給ひ、御用仕舞ひ歸らせ給へば、冬杯は飯已に氷りて外には飯もなければ、  
 湯に漬けさせ喰ふこと度々なりき、夏は蚊帳をつらせ給ふことなく、夜更迄も御奉公な  
 されて、行倒にも寝いらせ給ふを、朝食筑後守殿見出され、扱々笑止かな、蚊にくはれ給は

んとて、蚊帳を引懸けられたりし、後まで其様なることを覺えさせ給ふにや、朝食露の衆  
 へは御心を添へさせ給ひけるとなり、或時御臺所にて飯を喰ひ給ふ、是十歳前後の時に  
 もありけるが、其時の御老中酒井雅樂頭殿、土井大炊頭殿、青山伯耆守殿、其外歴々あられ  
 ける所にて、召させらるゝと聞召し、答をも投捨て膳の上をばね越え、走りて御前へ出で  
 給ふ體を正綱公見給ひて、宿所へ歸らせ給ひ、長四郎君を呼ばせられ今日御臺所にての  
 爲體を見給ふに、扱々尾籠なる形勢かな、思ふても見られぬ雅樂頭殿、始め御老中歴々坐  
 し給ふ中にて、前後辨へざる振舞詞に絶えたり、不禮千萬なると悲しみ、泪を流し給ひ  
 ての教訓なりき、長四郎君謹みて宣ひけるは、御意至極に奉存候、外よりは不禮とも見え  
 申すべく候へども、今日に限らずいつとも召させらるゝ時分は、他すらも見られず、誰  
 の側に居給ふも思ひも出されず、少しも早く罷出度く存じ奉るの心計りにて、御前の儀  
 を一心に大切に存じ奉るの外他念なく急ぎ給ふ旨を宣へば、正綱公大きに悦び給ひて、  
 夫程に君の御事を大切に存じ奉り候哉、御影聞くなき其心にては必定立身仕り、御用に  
 立つべしとて、感涙を流させ給ひけるとかや。(事語繼志録、松平信綱)

(他の過誤を彌縫す)

江戸にて雨の降りける日、登城し給ひけるに、御傘に参りたる者、過りて傘の爪を御ぐ  
 しに打當てたり、下城ましましければ、供頭、御前に出で、今日の御傘の者を、いかゞ申付



け候はんやと、伺ひければ、今日は常より時刻遅れたりと覺えければ、急ぎ参りし程に、我過ちたるにてこそあれと宣ひき、又御鷹野にて、調度持ちたりし下部、いかにしけむ、轉びて、調度を散々に打損ぜしかば御氣色いかゞあらんと、近習の者、恐れく、其由申しければ、其轉びたる下部は、怪我はせざりしやとのみ仰せられき、(銀臺遺事、細川重賢)

常にも供膳の事につきて、過せし事は、さまゝありけれども、聊か苦め給ふ事はなかりき、或時、御一族の人、侍食せられけるに、其膳の箸、末損れてありしかば、配膳の者に取り換へて來べき由申されければ、君聞召し、いやとよ、其れは本を末になして、用ひられよ、あらはに云はんには、膳部などの罪かうぶらんは、不便なるにと宣ふ。(銀臺遺事、細川重賢)

江戸にて、ある國主の館に渡らせ給ひけるに、供膳進められし時、御箸取らんとし給ひける程に、ふとあるじに向ひて、年の寄りて候へば、暫しも用を忍びかれ候、無骨御免候へとて、つと立ちて、障子の外に出で給へば、配膳の者、案内申さんとて、御跡につきて参りけるを、側近く召して、誠は用を叶へんにはあらず、唯今飯椀の蓋を取りたるに、いかゞしたりけん、未だ飯を盛らぬにてありしかば、本のまゝに、そと蓋をして立ちたり、我暫くこゝに有りて、座敷に直らんずる時、物皆冷えはてつらんとて、汝取換へて参らすべし、あなが

し、主の殿には知らせ奉りそ、かくと知り給ひたらんには、今日のまうけ承りたる者、罪かうぶる事もあらんと、私語き給ひければ、仰のまゝに計らひたり、かしこの侍共、密に此事聞傳へて、有難き御情なりけりとて、皆涙流しけり。(銀臺遺事、細川重賢)

天明三年三月の事なり、世子顯孝公の御室は、松平土佐守豊雍の御女、采姫君と御縁約あり、初て土州御招請の時、表御座敷御祝の御饗應も、既に關に及びたれば、進付勝手御座敷に移らせ給ふべし、御勝手御饗應の物數如何、滯もなきやと、御膳番の藤沼友四郎、御膳部の番人を呼びて尋ぬるに、夫々御獻立に向ひて調べ、御勝手御座付の始めに供し参らす、餅菓子、御用意落ちて居たり、御臺所役人の申出に、御獻立表を以て、御菓子屋へ申付くべきを、何としたる事にや、取紛れて申付く、されば御臺所の不調法に止まるといふ、御膳部の申出に、縦令御臺所の間違あればとて、御獻立は全く御膳部の大事なれば、疾くに其品調にも及ぶべきを斯くまでの間違に至らせしは、畢竟の處、御膳部の不調法に止るといふ、此時友四郎指圖していふ、只今差懸り不調法の申出は、ますくよくすべし、早々多人數を出して、近所の菓子屋共へ觸渡し、餅菓子の品々取上げよ、其内を選ばよ、其相應もあるべしと云ふ、爰に於て、數人を出して呼びしかば、各有合ふ餅菓子持ちて、數軒の菓子屋馳せ集る、然れども御念に御念入れられて、其品珍しき菓子組なれば、安永十年三月



給ひし時の菓子組なりも元より出来合の菓子にあるべきにもあらず、止む事なくして、彼と是と取合せたれば品こそ悪しけれ、先づは可なりにも、御間の缺けぬ事にはなりぬ、斯かりしまゝに、友四郎そつと公を御呼立て参らせしかん、の間違あり、差懸り止む事なく候へば、是々の品を組合せてと言上せしに、其菓子組書立をつら／＼見給ひて扱も／＼玄人共のする事は格別の物なり、前に指圖せし菓子組に比べては、又雲泥懸隔に善きなりと、只管に譽め給ひし程に夫々より不調法を訴へたれど、御叱にも及ばず濟みし。(題楚篇、上杉治憲)

天明六年九月八日將軍家治公御他界あつて、御院號を凌明院殿と稱し奉る、然れば公(治憲公)月の八日々々には終日精進の料理参らすべき由、其御仰出され置きしに、或八日の朝御膳に、魚の料理して進め奉りし、御大儉中、御典にて開召す御膳故、御膳番の掛なく、女中給仕なりしより、何の心なく進め参らせたりしに、凡その事、久しく古りにし事は、間違ふ事もなきものなるが、近き頃の事には、間違ふことのある事、誰々も通れぬ常なり、今日の凌明院の御忌日なれば、精進の料理も致させよ、扱又今朝は何としたることによ、未だ食氣もなし、殊に書きかけ置きし、書物のあるを、半に筆を休め置きたれば、書く事終へて食はんこそ仕合なり、遅きは苦しからず、逆もゆる／＼とせさせよとの御意にて、御表

へ出でさせ給ひしなり、されば今日の御膳部役は、白井源藏といへる者なり、斯かる、大なる誤故、唯々恐入るのみ、斯程の不調法之ある身の、御膳の庖丁恐入るとて、同役へ相談り、扱支配頭へ訴、御裁許を待つべしと、當番の御膳番へ斷りたりければ、御膳番指圖して、御膳延引せん事恐多し、差控の申出は、御膳後の沙汰なり、先づ／＼急ぎて御膳を奉るべしとて精進の御料理には取懸りぬ、斯か／＼に、多人数を取懸け漸く御膳も調ひければ、公御膳に向はせられ、御心能く開召し、玄人のする業は、格別なるものなり、今の間に仕出したるは、玄人ならば叶はぬ事なり、殊に鹽梅の能きには驚入るとの、御賞譽度々にて常は、御膳も二椀に限りて開召せしが、今朝は三椀開召せしなり、されば源藏は支配頭へ訴ふべきに極りて、差懸る事故、差控の事斷りけるより、御膳番しかん、の事言上しければ則ち御膳に向はせ給ひし時の如く御賞譽なりし故、御膳感涙して、白井が訴を止めし。(題楚篇、上杉治憲)

御家中諸士、痛氣にて不參の節、御目附方へ斷狀出し候に、此段神慮を以て偽なき由書き申し候事、前々より御作法なり、然る處御壯年の頃御意に、前々より神文書入るゝ事れども、是は此方の誤なり、仔細は、別して小身者に至つては、病氣に之なくとも、家内に變あるか、何ぞ仔細ありて、出勤のならぬ事あるべき事なり、大身とても品に依り同然なり、然



るを神慮を以て書く事如何なり、只今より改め、神文なしに致し候へ、今まで氣が付かぬは、吾誤なりと仰せられ、其後今以て神文なきことなりと、先輩の物語承り候、新様なる隔々までも、御心を付けられ、下の難儀を思召したる御事、是にや限らず候へども、誠に有り難き思召なりと、人々感心し奉りき。(玉話集、津輕信政)

## 第貳項 人格

### 第一目 人格の解釋

#### 第一節 人格の意義

人格 Personality は其人の品性によりて各自の思想行動に現はるべき理性的及道德的の統一されたる個性なり。抑も吾人人類は表現相即ち宇宙の現象に對して種々様々の思想觀念を有す、是等の思想觀念は大體に於て共通するも、亦各個人の品性によりて特殊のものなり、而して特殊の思想觀念を理性により各自の個性に統一したる状態も亦相異なるものとす、此統一性を人格と名づく。故に人格とは主觀的には各自が意識的に思想觀念又は執意を理性によりて統一したる心的状態にして、客觀的には各自に於て其人を特殊に區別せしむる理性的又は道德的の個性を具ふる個體を指稱するなり。

#### 第二節 人格的及人格化

人格的 Personal とは人格を有する意義なり、此意義は之に對する非人格、下人格、超人格の三語の意義を擧ぐれば自ら釋然たるものあるべし。非人格 Impersonal は人格を具へざるか又は人格の形を以て顯はれざるものにして、例へば等しく服従を要求するも、父母、教師、君主等は人格の形を以て顯はるゝが故に人格的の證據とし、規則、契約、法律等を非人格的證據と稱するが如し。下人格的 Subpersonal とは未だ人格に達せざる義にして、動物の心意は自己意識の未發展の儘なるが故に下人格と稱するが如し。超人格 Superpersonal は人格を超越せる義にして、例へば神又は絶對者は之に人格の有限性を附するときは其の無限性を缺損するが故に超人格的と稱するが如し。人格化 Personification とは人間以外の事物に人格の特性中の一部又は全部を附するを指すものにして、例へば東洋及希臘、羅馬の神話中には山川草木に人格を附し、「インツプ」「グリム」を始め各國の童話に於て狐、羊、狼等に人格を附し、人類と同じく談話し行動せしむるが如し。

#### 第三節 人格の尊重

人格は羅馬にては Persona と稱し、獨立して思考し又行動す



る個體を稱し法律的の觀念なりしなり、故に羅馬人の思想を繼承せるヘーゲルは個人は權利の主體なりと論斷したり。基督教の思想は人格は絶對的價値を有すとなしたるが、此思想はカントの倫理學說に影響し、個人は合理的存在物にして其れ自ら目的を有し、他の手段方法として使用さるべきにあらずとなせり。要するに歐洲の人格の觀念は羅馬人及基督教の二淵源より發したるものにして、東洋に於ては明確に之を説きたる學說なきも、性なる語には人格を包括するものゝ如し、易經に「窮理盡性至於命」、利貞者性情也」とし、禮記に「聲音動靜性術之變、盡於此矣」とし、論語に「性相近也、習相遠也」とあるに徴して之を知るべし。而して人格を尊重すべしとする自覺は近代文化に大衝動を加へ、倫理學說の進歩となり、立憲政治の樹立となり、國際道德の發達となり、處世の大變革となれり。要するに人格の尊重とは、互に自我發展の可能性を尊重するを意味し、共同生活上最も重要事項なりとす。

第四節 生活と人格

ベルグソンは曰ふ、自我がより深く自己に還れば還るほど

其意識の諸状態は雜然として互に重疊する代りに相滲透し相親交す、而して總て他の状態の色彩を以て互々を彩る」と更にベルグソンの主義によれば斯く相滲透し相親交して總て全人格の中に融合され統一され、多にして同時に單一となるものなり、其は分ち得べき單位 Unit の結合にあらずして分つべからざる相 Mix の交錯なりとなす。即ち人格の根ざす所は生命の核心に在り、其現はれて日常生活となるも、種々様々の行爲、運営皆人格に彩られざるは無し、倫理學上の行爲の標準たる善惡の如きも普通に人格問題に就きて指稱する場合多し。今より約一世紀半前佛國に於てブルボン王室の腐敗と壓制とは將に革命の風雲を捲き起させんとせり、されど王室の國民との間に緩衝地帯を作り、除に政治の改造を計らば、決して潰瀾を既倒に回す能はざりしにあらず、此時局を極ふ實力ありしは當時の偉器ミラボー其人なりしなり。ミラボーも自ら成算ありて、王室と國民との間に立ちて盡力し初めたるも、彼が壯年時代の放蕩は國民の不安を招き、王室に通謀して自由政治を抑壓するものと疑はれ、特に王室が彼の盡力に對し謝意を表し、彼の放蕩其他の爲めに生じたる負債を償ひたる一事は益々民黨の離反となり、ミラボーの威力地に墜ち其改革案は國民に容れられざるの結果となり、悲風慘雨の大活劇を演ずるの結果を見たり。ミラボー晩年に至り當年を追懷し、此難局を救ふは我



より以外になく又必ず救ひ得たりしを確信すと雖、余が人格の非難は余の威力を奪ふに至りしは痛恨に堪えずと悔恨痛憤し煩悶の結果衰弱して斃れたり。獨り政治問題に止らず、人格の生活上の諸相に重大の關係あるは絮説する迄もなかるべし。

第五節 自由と人格

人は人格を重んじ個性を尊ばざるべからず、従つて其生活は自由ならざるべからずと雖、内外自他の統合上此自由には制限あり、之を自我の内外關係の統合に徴せんか、吾人の思想が正當の目的を實現せんには眞の法則に遵はざるべからず、吾人の働作が正當の目的を實現せんには善の法則に據らざるべからず、吾人の情緒が正當の目的を實現せんには美の法則に適せざるべからざるを知るべし。更に之を自他即ち環境との關係の統合に徴せんか、一層多くの自由の制限を見るべし、各個性の差異あり歴史あり社會の秩序ありて自由は絶對のものにあらず、ルツソオも亦曰ふ「情慾の衝動は束縛するを得るも自ら自身を束縛するは難し、されど我等自身の規定したる法律に従ふは即ち自由に外ならず」と、要するに國家成立も社會組織も自我集積なり、自由を制限するは統合上必然の成行

にして自ら人格を尊び自己の人格に従ふ所以なり。「コムトの社會哲學及宗教」の著者として有名なるエドワード・ケアードの「我等の實踐生活の眞諦はいかにして個人的放縱を超越したる自由を實現するやに在り」と言ふも、亦此意に外ならず。

第二目 人格の諸相

第一節 理想

人格は生活上種々様々の相として發現す、抑も吾人は生命の存する限り常住不斷自我集積を營みつゝあり、この心的活動こそ理想にして、自由の憧憬、向上の精神等に顯はるゝもの是なり。吾人の生活に意義あらしむるものは自由にして決して唯物的機械觀の如き或は智力主義者の説の如き不自由のものにあらず、吾人の生活は眞に吾人の所有に屬するものなり、またカントの「余は孤獨なり、余は自由なり、余は自らの王なり」の如き消極的なる自己王國に踏み止るものにあらず、其王國より踏み出し生命の根本を把握し、より活動的なる自由の天地を開拓せんとする自我なり。或人は理想は各人が庶幾ふ所に到達せんとする手段方便の如く思考するものあるも、抑も理想は究極の目的を豫測するものにあらずし



て、各人が歩む道それ自身、方向それ自身たるなり、されば理想は最後の目的、或は窮極の目的の如く不變不動のものにあらず、現在に於ける相對的たるものなり、斯かる意味に於ては理想は相對的なれ共、其理想に一致を期する點に於ては絕對的性質を有するものとす、然して理想とする所のものは進化の度に於ては物質との苦闘を續けざるべからず、其苦闘は纏てその理想に對して一層確實性を與ふるものなり、されば理想を有する者は、驀地に人生に向ひその齎らす如何なる苦惱をも害惡をも十分に經驗し、之を理解し、之を愛せんとし、正直に運命の咎を受くるも決して運命に敗るゝことなし、即ち吾人は行爲によりて精神生活に迄滲透し以て人格を發揮するなり、固よりその行爲たるや道德的に正當に行動せざるべからず、即ち客觀的妥當性を有する行爲にして、個人の如何を問はず、時代の變調に係らざる正軌なるを指稱するは言を俟たざるなり、要するに理想とは其人の智識經驗の範圍内に於て無上と想像さるゝ模範、換言すれば若し吾人にして之に到達せば満足を得らるべしと想像さるゝものを稱す、從つて理想は對我關係に於て相對的のものなるも、智識經驗の相違により各人多少其理想を異にし、又自己の生活狀態

の變化によりて理想の變化あるは當然の歸結なり、

第二節 事業

アリストテレスは「人生は運動の中に在り」と唱破したり、宇宙の表現相は流動發展止まざるが如く、人の生活は意識的にも無意識的にも變動發展して瞬時も停滯する所なし、而して其自我集積は現はれて事業となり、人格の反映として對他關係上重大なる問題となるものなり、既に事業は人格なり、人格の異なる如く事業は各人各様の彩色あり、假令同一事業に従ふも其人によりて事業に特色を生ずる所以は、事業は從にして人格が主たるが爲めなり、Selfhelpの著者として有名なるスマイルスは其著 *Life and Labour* に於て「未だ嘗て努力なき天才も偉人も有りし例なし」と曰ひし如く、如何なる人も非常の苦心奮闘の結果にあらざれば一事業の完成を見ると能はず、文藝復興期の偉大なる先驅者レオナルドは「何人も繪事に長せんと欲するものは専心集中し晨起より夜臥に至る迄常に他念あるべからず、之繪畫のみならず他の事業に於ても亦然り、又一藝に卓絶せんと欲するものは學ぶを欲すると否とに關らず朝に晝に夜に工夫を用ふべきなり、心を遊ばしめずして偏へに辛苦學習すべし」と、若し其國民精神にして弛廢し或は個



性の緊張を缺かんか個人は勿論國家をも頽唐衰退の運命に陥らしむるは歴史の證明する所なり、メルバイン卿の汝等は自力によりて途を開拓せざるべからず、而して汝等の餓死するか否かは汝等自らの努力の如何によるなり」と言へるは至當の言と言ふべし。人較もすれば安逸に日を送らんことを庶幾ふも、「無活動の間暇は危険なり」difficilis in otio quisにして、大學の所謂小人間居爲不善の傾あり、又安逸の苦痛なる例はチャールスラムが書信にても窺ひ知るべし、「小生は此度自由の身となり其喜悅に殆んど手紙を認むるべき頭腦の整調を有する能はざるものに候、小生は之によりて更に五十年も生き伸ぶるべく、小生の閑暇を少々なりとも貴下に御分讓致し度きものと存じ居り候確かに人間の行爲中最善のものは無爲閑居、熱心に働くことはその次に位する善行かと愚考せられ候：：而して二年を経過せずして再び無聊に堪えざることを其友に訴へしを見て知るべし。世には往々事業の成敗のみに心力を傾注し、目的は手段を擇ばざるに至り投機的方法に據り、或は不正の行爲をなして恥ぢざるものあり、固より欲望は行爲の必須條件と云ふべく欲望そのものに善惡なしと雖、欲望は良心の調節なくんば害惡となり、社

會を紊亂し一身を破滅することあり、是事業そのもの、根本を誤解せるに基くものにして、ゲーテは「人は修養の爲めに生きるものなり、事業を完成する爲めにあらずして自己を完成する爲に活きるものなり」と以て坐右の銘とすべし。事業の結果よりも眞に光榮とすべき資格は事業そのものにあらずして正義又は獻身の行爲に存し、然らざるものは往々大事業をなせるにかゝはらず、其人の死去と共に其名聲も亦世人の腦裏を去るが如きこの例なり。要するに事業は人格の表現にして自我實現 Self-realization の異名なるを知るべし。

第三節 藝術

藝術も亦自我表現の一部にして他の事業と異なる點は人間の趣味性に訴ふるに在り。即ち繪畫、彫刻、建築等の如く自然の力を認めて之を作者の立場より取捨選擇したるを新に組織し、此自我集積を表現して廣く人間の趣味性に訴ふるものなり。故に自我表現を爲す點に於ては何人も藝術家たるが如しと雖、藝術家たると否とは全く他の趣味性に訴ふるの技能の有無に存す、此技能を有するを天才 Genius と稱するも、亦此天才を活躍せしむる情熱をも兼備せざるべからず、イプセンは曰ふ「人若し藝術に於て活きんとならば彼は生れながらの天才以



外天才以上の或ものを有せざるべからず、即ち彼の生活を充たし彼の生活に一定の方向を與ふる情熱悲痛を有することは是なり、然らざれば彼は創造せずして唯書物を作るに過ぎざるべし」と。而して又藝術が現實の世界に立脚する以上自然に忠實ならざるべからざるが故に寫實は其要素たること否む能はざるべし、然れども藝術は現實的自然に秘められたる、或物を捉へ、現象的存在以上に超越せる本體或は生命の核心を把握せざるべからず、是藝術の作物に共通なる職分なり。元來作物中に示されたる技能は本源たるべき心靈の顯はれにして至醇なる光明の飛躍せるものなり、之に接すれば自然界のものによりて與へらるゝに等しき感銘を吾人に與ふるものたり、其天才の作物に至りては自然は藝術と一體となりて顯はるるを見るべし、例へば建築に顯はされたる崇高雄大なる力の展開は吾人の有する尺度をはるかに超越すべし、然れども一度その建築を熟視せんか吾人はその崇高雄大なる力の開展を吾人の内に現はし得るなり。故に藝術はその作品が示すよりも更に高尚なる任務を有す、即ち一切の藝術は直接に其耳目に關係すと雖、耳目そのものによりて満足するに止らず、作品が有する根本的内容は常に何等か

人格的のもの即ち吾人の生命の核心に交渉あるものなり。是藝術的作品の一般美なるものが、享樂の如く單純なる官能的享樂と全然其性質を異にする所以なり。而して自然美の寫實或は藝術により吾人の趣味性の向上さるゝは、其作品中により大により深き高尚なる自我が内在するが故にして、之によりて生活を優美圓滿にし人格を豊富充實ならしむるなり。故にすべての藝術はそのはたらきを極限に純潔にし強烈にせんとする努力を要するものなり、要するに藝術の物語る所は現實的流轉相にあらずして、永遠の相を寫し之によりて創造的進化をなすに在り、藝術の人類社會に對する職能如何に關しては、各國民各時代によりて相違するも、過去に於ては教育或は宗教的方面に用ふる等他の目的を成就すべき手段として用ひられたるもの多し。是等は、人生のための藝術 Art for life's sake の見解にして、藝術はすべて人生の實際目的、社會の改善進歩に貢獻する所あらずんば、存在の權利なし、所謂藝術の爲めの藝術 Art for art's sake はその存在の價值を認めずと、斯の如きは藝術として社會的產物たる以上は、ある倫理的色彩を帶ぶるはやむを得ざるも、要するに盾の一面より見たる立論にして妥當なる言にあらざるべし。藝術の職

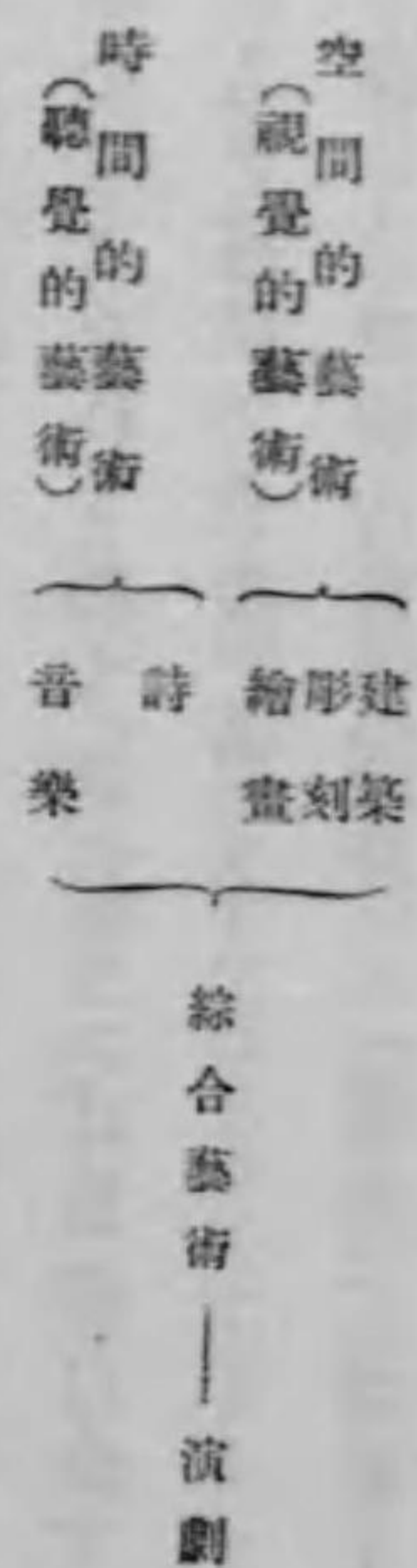


能に關しては古來幾多の説あり、近代に至りてもトルストイは從來の藝術は美しき虚偽に過ぎずとなし、彼一流の藝術論を説けり、彼に従へば文學と科學はパンと水の如きものにして犠牲と苦惱こそ思索家及び藝術家の運命なりと、以て彼の藝術觀の如何なるものかを知るを得べし。又、何れの社會にも人生に對する宗教的意識は存在すべく、この宗教的意識こそ吾人の最大幸福の標的ならざるべからず、藝術家の職分は實にこの宗教的意識を民衆に宣傳するに存するなり、即ち大なる藝術は其時代に於ける宗教的意識の現はれにして、藝術は暴力を壓迫せざるべからず、而して藝術のみが其職務を完ふするものにして、其使命は神、換言すれば愛の王國を齎らすものなりと言へり、故に之によりて之を見れば、彼は藝術を以て教化の具となせるものなり。フローベルは藝術を以て宗教、科學、道德より貴きものとなせり、彼は其書翰中に、余のなしたる如く外界より避けよ、白熊の如くに棲め、汝の思想の外汝自身をも惡魔に與へよと、彼は許嫁の女ありしが長く結婚せずして世を去れり、彼の嘗て其許嫁の女に送りし書翰中に曰く、否君は余よりも余の藝術を愛し給ふこそよけれ、藝術は決して御身を去らざるべし、病も死も之を御身より奪

ふを得ず、唯一なる眞の思想を愛し給へと、又カーペンターは藝術は材料を驅使せし全的自我表現こそ眞の藝術にして、若し民衆の藝術と云ふものがあり得べくんば、それは自我の根底に徹せんが爲に解放されたる藝術、従つて生活そのものが現に各人の本來の全的自我の表現にして之が眞の藝術なりとし、藝術即生活の境地にまですゝめて彼一家の藝術觀を主張せり。又ロマン・ローランは其著「民衆劇論」に彼の藝術觀を説きをれり、即ち彼に従へば藝術は餘りに民衆よりかけ離れたるを以て、總ての人を藝術の世界に引き入れざるべからず、それは階級に左右さるべきものにあらず、或は宗教、政治、道德、社會の一部門に隸屬すべきものにあらず、又過去の何物をも未來の何物をも防遏せんとはせざるものにして、存在する一切のものは表現され得る權利を有するものなり、而してそれは死の思想にあらずして生命の思想なる限り、又人類の生活力を増大せしむる限りに於ては如何なる思想をもとり入るべし、而して我々の望まじき伴侶は藝術に人間の理想を求め、生活に友愛の理想を探る人々の一切なると同時に、思索と活動の其美を民衆と選良とに分立せしめんと慾せざる人々の一切なりとせり。而して藝術的作品が最も豊富に人性の



内容を含有し藝術的手段の形式が最も純粹にして深刻なれば、その作品の價值又最も大なることは前述の如し、又藝術的作品とすべき形式内容なき表現は吾人の思想考察の對照としては存在し得べけれども、藝術的作品の内容と形式とは不即不離の關係を有するものにして、形式なき内容は純然たる美的考察に對して存在せざるが故に、その内容形式につきては詳説するの要なかるべし。次に各種藝術の分類に關して學者は説を異にすれども最も妥當なるは次の分類なるべし。



各種藝術の位置につきては古來異説あり、即ち音樂を以て藝術中第一位を占むべきものとせり、音樂は吾人が内に經驗し得るすべてのものを、音響を以て吾人に與ふを得るも材料の性質上漠然として理性に乏し、是音樂の長所にして又短所なり。造形美術即ち繪畫、彫刻、建築に至りては分明たる形態を有し、比較的恒久性を有す。詩は言語を材料として用ゆるを以て知的にして的確性を有す、劇に至りてはその

人物によりて情緒、激情、運命、動作、苦痛、偉大、道德的、苦悶等あらゆる人生の意義職分を示すを以て知的的確性は更に大なり。

第四節 趣味及娛樂

我國民生活の缺陷中最も思ふべきは物質主義、功利主義の世界思潮に甚しく溺惑したるに在りて、今や歐米に於ては内省反正の道程に在るも我國の思想界は尙混亂状態にありて人心適歸する所を知らざる有様なり。従つて國民の趣味性も亦卑俗低調の埒内に逍遙しつゝあると同時に、國民精神の頹廢は人心弛緩其事業に眞劍味なく其行動に緊張性を缺き、有ゆる方面はサボタージ shorage と怠慢不注意と無責任との競進會たる觀あるに至れり。然るに宇宙の表現相は生々發展瞬時も休むとなく、人生も亦活動躍進して暫くも止まざるなり、而して此不斷不休の奮闘勞苦の生活裡にも砂漠の綠地の如き春風、胎蕩花笑、鳥歌ふの餘地あり、決して平板單調ならず、慰安休養あり、善美幸福あるは一面に於て生活を趣味化し之によりて娛樂を得て自我發展の凝滯を緩和すべきなり。固より趣味は各人の個性及慣習等によりて相異なるも、要するに其趣味に従つて娛樂を得んとするは人類共通の慾望なり、然るに一利一害の相伴ふあるは社會各般の



事物に見るが如く、人は較々もすれば自己の趣味となし娛樂となす對照物に支配され主客顛倒反て身を誤ることあり所謂粹は身を食ふてふ俚言の示す實例あるは之が爲めなり。趣味の對照には種々數ふるに違あらざれども其二三を擧ぐれば茶道活花、陶器磁器、刀劍、圍碁、檯棋等に自己を見出すものあり、或はまた長唄、常盤津、新内、一中、清元、歌澤、琴、琵琶、尺八に自己を見出すものあり、或は種々の運動、遊戯に自己を見出すものあり、固より其趣味とする對照物に甲乙の存するにあらざるも、時代と社會組織の影響を蒙りて、善美或は醜惡の傾向を有することなきにしもあらず、されど之必ずしも絶體の判斷にあらざるは論勿きなり。遮莫吾人は直接効用の日常生活と共に間接効用の趣味生活を營む餘裕なかるべからず、生活の充實は直接効用と間接効用の統合を得たる状態なり、されば文化の進みたる今日に於ては趣味娛樂も亦生活上重要視さるゝに至り、各人が自發的に覺醒したるは勿論經濟界に在りても資本家側は使用人の生活向上に注意し、工場音樂、工場舞踊を試みるあり、官設電話交換局にありても、女子従業員の趣味娛樂の機關を設けて精神の陶冶を計り、一方仕事の能率を高むるに資する等生活の充實に努めつゝあり、而

して近代文明の進歩に隨伴する劇烈なる生存競争及之に基因する生活の不安動搖より、一瞬時にても逃避せんとし慰安を娛樂に求めんとする傾向は殊に都市生活に於て著しく、爲めに各國共に年々娛樂機關の増進率は顯著なるものあり、之と共に種々なる弊害を生ずるにより、我警視廳に於ても、大正十年市内に於ける娛樂機關の取締規則を統一し演藝取締規則を發布せり、其要點は市郡を通じて劇場數の制限撤廢、觀物場等建設の場所は、事實上支障なき場所に自由に建設し得ること、一の建物を以て劇場、活動寫眞、觀物場、演藝場を兼ねることを得ること、興行物は何處に於ても行はるゝこと、技藝者、説明者及び觀客を處罰すること等の規定なり、我國に於ける劇場、寄席、活動寫眞の統計を擧ぐれば左の如し。

劇場	寄席	活動寫眞	常設	臨時	常設	臨時	觀客
大正七年	八年	七年	一、二七四	一三、四八二	一四一、四四四	四六、五〇八	七二、八四二
八年	七年	八年	一、三〇八	一四、九五三	一五一、〇三六	五五、七五三	七九、八七三
七年	八年	七年	六八一	七、九五五	一四四、七九一	二八、四一〇	一九、七九三
八年	七年	八年	六三七	八、〇四二	一〇八、七六五	二七、六五五	一八、一八九
七年	八年	七年	三六二	七、一二五	一四五、四二〇	六〇、一〇〇	七五、八五四
八年	七年	八年	四四八	八、六八三	一七六、二四一	六六、〇七二	九六、六三三



其他種々なる會合興行物あり。世界に於ける歡樂境と稱せらる、佛國巴里に於ける各種娛樂的興行物に就きては佛國大藏省の調査によれば一九二〇年に於て總額二億一千九百四十五萬五千九百九十四法に及べり。

活動寫眞館 六八、七七六、四三一法  
劇場 六四、四八六、二四三

サーカス、スケート場、舞踏場 二六、二二九、五四二

音樂會、及びカフェー、コンサート 二五、六〇一、一一三

政府補助劇場 二二、七八六、五八八

音樂場 一九、九五七、五八五

博物館 一、一〇二、二一四

アーチスト、コンサート 八九一、八七一

尙英國人の遊技の爲めに費す金額(其最も多額なる活動寫眞を除く)は一年約四億九千萬圓にして其内譯左の如し。

競馬 一億圓 フットボール 七千萬圓  
狩獵 七千萬圓 演劇 八千萬圓

クリケット 六千萬圓 自動車 五千萬圓

音樂會 三千萬圓 ゴルフ 二千萬圓

テニス 五百萬圓 飛行機 四百萬圓

活動寫眞(每週看客八百萬人)

(信望無くんば身危し)

陳軫は魏王に貴ばる、恵子の曰く、必ず善く左右に事へよ、夫れ楊は横に之を樹ふれば即ち生じ、倒に之を樹ふれば即ち生じ、折りて之を樹ふれば又生ず、然れども十人をして之を樹ふしめて一人をして之を抜かしめば、即ち生ける楊ながらん、夫れ十人の衆を以て、生じ易きの物を樹ふて、一人に勝たざるは、何ぞ、之を樹うる事は難くして、之を去ると易ければなり、子は自ら王に樹うるに工なりと雖、子を去らんと欲する者衆ければ子は必ず危からんと。(韓非子、説林)

(人情薄き者用ゆべからず)

樂羊魏の將となりて中山を攻む、其の子中山に在り、中山の君、其子を烹て之れに羹を遣る、樂羊幕下に坐して、之を啜りて、一盃を盡す、文侯堵師贊に謂ひて曰く、樂羊は、我故を以て其子の肉を食へりと、答へて曰く、其子にして之を食へり、且つ誰か食はざらむと、樂羊山中に罷む、文侯其功を賞めて其の心を疑へり、孟孫獵して麋を得たり、秦西巴をして



之を載せて持ち歸らしむ、其母之に隨ひて啼く、秦西巴忍ずして之に與ふ、孟孫歸り至りて甕を求む、答へて曰く、余忍びずして其母に與へたりと、孟孫大いに怒りて之を逐へり、居ること三月、復た召して以て其子の傳と爲す、其の御の曰く、曩に將に之に罪せんとす、今召して以て子の傳と爲せるは、何ぞと、孟孫の曰く、夫れ甕に忍びず、又且つ吾子に忍びんやと、故に曰く巧詐は拙誠に如かずと、樂羊は功有るを以て疑はれ、秦西巴は罪有るを以て益々倍ぜられたり。(韓非子、說林)

(慾望惡きにあらず唯調節如何に在り)

凡そ治を語りて欲を去ることを待つ者は、以て欲を道くこと無くして、有欲に困めらるゝ者なり、凡そ治を語りて欲を寡くすることを待つ者は、以て欲を節すること無くして、多欲に困めらるゝ者なり、有欲無欲は異類なり、性の具なり、治亂にあらざるなり、欲の多寡は、異類なり、情の數なり、治亂にあらざるなり。(荀子、正名篇)

(人情の發露は音樂の起因)

夫れ樂とは樂むなり、人情の必ず免れざる所なり、故に人は樂むことなきこと能はず、樂しめば、則ち必ず聲音にはつし動靜に形はる、而して人の道は聲、音、動、靜、性、術の變是に盡く、故に人は樂しまざることを能はず、樂しめば、則ち形はるゝことなき能はず、而して道を爲さざれば、則ち亂るる事なき能はず、先王其の亂るゝを惡む、故に鐘、磬の聲を制して

以て之を道き其の聲をして以て樂しむに足りて流れざらしめ、其の文をして以て辨するに足りて息まざらしむ、其の曲直繁省廉肉節奏をして以て人の善心を感動するに足らしめ、夫の邪佞氣をして接することを得るに由なからしむ、是れ先王樂を立つるの方なり、而して墨子之を非とするは奈何。(荀子、樂論篇)

(人格の感化後代に及ぶ)

某州の一士人、藤樹(中江藤樹)の故里を經過して、其墳墓を弔はんと欲し、路を農夫に問ふ、農夫即ち耒耜を合て、徑に趨りて屋に入り、襟服を更め着て出づ、士之に跟して行く、既にして墓所に至れば、農夫拜掃すること甚だ悲し、士心に之を訝る、因りて問ひて曰く、爾の藤樹に於ける、何の親故ありて、敬禮乃ち爾るやと、農夫の曰く、藤樹先生を敬仰するもの、豈に惟余のみならんや、閩邑皆然り、父老毎に其子弟に語りて曰く、吾里、父子體あり、兄弟思あり、室に忿疾の聲なく、而に和煦の色あるもの、職として藤樹先生の遺教に由れりと、此れ一人も其思を戴かざるなき所以なりと、是に於て、士、容を變じて曰く、世に稱して近江聖人と爲すは、吾れ乃ち今にして、其虚禮にあらざるを知れりと、即ち其墓に敬拜し、厚く農夫に謝して去る。(先哲叢談、中江藤樹)

(剛直にして權貴に媚びず)

丈山は羅山と友義殊に深し、羅山集中に、其往復の書三十八篇を載す、契分見るべし、而



して意見同じからずして、終に相容れざるものあり、其三十六詩偈は、是れ本邦の三十六歌偈に倣へるなり、蘇武を以て陶潛に對するは猶ほ柿本人麿を紀貫之に配するが如し、左右各十八人、皆配對あり、初めその之を定むるに、取捨の議すべきものは、悉く諸を羅山に問ふ、蘇武、陶潛、謝靈運、鮑昭、韓愈、柳宗元、劉禹錫、白居易、李賀、盧同、林逋、邵雍、梅堯臣、蘇舜欽の七對は、羅山の改定する所なり、羅山又曾鞏を以て歐陽修に對し、王安石を以て蘇軾に對せんと欲す、而して丈山は安石の人となりて惡み、之を取るを肯んぜず、則ち賸書住來して論辯置かず、丈山卒に従はず、羅山の書の略に云ふ、荆公の罪は、誠に足下の言の如し、然も其詩は千古に卓越す、故に古今の詩を評する者、胡元任、魏醇甫、蔡正孫の輩は、荆公を謂つて一大家を爲さざる者なし、夫君子は人を以て言を廢せず、故に孟子は陽貨の語を取り、朱子の楚辭後語には、乃ち荆公の詞を載す、荆公初て自ら謂ふ、假令徳は伊周に及ばざるも、才須らく房杜に優るべし、庶幾くは君を三代の盛に致さんと、程子の曰く、新法の行るゝや、我輩之を激成すと、又曰く、介甫に益あらざるも、我に益ありと、陸象山は其罪を諸公に分ち、羅大經は其光風霽月に浴せざるを惜む、夫れ靈運、王維、宗元、禹錫の徒は、國に叛き賊に陷るも、猶是を舍てずして、何ぞ獨り荆公を拒むや、抑々六詩偈の名は、本邦の歌偈より出づ、歌偈は歌を取りて人を取らざるなり、若し今人と詩とを併せ論ぜば、常に詩偈のみならず、人偈と謂はんも亦可なりと、丈山の書の略に云ふ、古人いへることあり、

聖人以下小疵なきこと能はず、所謂謝王、抑劉併せ按すべし、垢を洗ひ疵を棄めば、暗か過なきを得んや、始めあり終りある者、其れたゞ聖人が、介甫の如きに至りては、元惡大愆なり、何ぞ小疵に比せんや、蘇洵の介甫を見るは、猶孔休の五芥を見るが如し、詐術讒慝、放肆邪侈にして、先知の察する所を遁れ難し、彼れ一旦其暴戻を拵藏すと雖も、政を乗り志を得るに臻りては、凶邪を引用して忠直を排擠し、終に文字を以て人を殺し、國を亂し、禍後世に及び、天下をして劍亡せしむ、罪之より大なるはなし、周德恭は評して、古今第一の小人となし、琴操、蔡温を合せて一人と爲す者なりと、此言最も公にして明かなり、來書に曰ふ、程子の曰く、新法の行はるゝ、吾輩之を激成すと、昇庵の曰く、此言亦非なり、季氏は周公より富む、求や之が爲に聚斂して之を附益す、孔子の曰く、吾徒にあらず、小子鼓を鳴して、之を攻めて可なりと、此れ聖門の公案にして、亦冉求の聚斂は、孔子之を激成するといはざるなり、來書に云ふ、君子は人を以て言を廢せずと、某亦曰く、君子は言を以て人を擧げずと、來書又云ふ、孟子は陽貨の語を取ると、某何ぞ孟子の語を取るに異ならんや、唯其詞言を記して、其形象を陶せずんば、荆公の詩を取て、宗詩の主張を爲さん、乃ち其人を堂宇に圖し、以て朝夕厥狀貌を看ることを欲せざるなり、若し夫の子與氏、其家に陽貨の像ありて、朝觀夕覽を歴ば、敬ばざるべけんや、惡まざるべけんや、足下以て如何と爲すと。(先哲叢談、石川丈山)



(貧窮なるも晏如たり)

(白石)久留米を許すの後、又堀田侯に遊す、居ること十年、志を得ずして去る、時に饑饉し、篋中ただ青錢三百、米三斗のみ、曰く、此れ未だ福に凍餓せずと、意氣少しも抛まず、願庵以てこれを加賀に薦めんと欲す、岡島仲通は加賀の産にして、亦願庵の門子なり、之を聞きて、感然として白石に語りて曰く、予笈を負ひて、遠遊すること、茲に若干年なり、頃家書を得るに、老母日に衰頹に過り、問に倚りて、子の歸るを待つと、一念至る毎に、百感心に攪る、若し幸に吾先生の先容に頼りて、榻を本藩に釋くことを得ば、願足れりと、白石即ち願庵に告ぐるに、此言を以てして曰く、子の仕を求むるは、何れの國か之れ擇ばん、請ふ予を會て、彼を薦めんと、願庵歎じて曰く、世衰へ道微にして、日に偷薄に入る、子の如きは、絶えてなくして、僅にある者なりと、乃ち岡島を加賀に推す、後二年、元祿癸酉、白石を甲斐府に擧ぐ、時に三十七なり。(先哲叢談、新井白石)

(宏量能く人を容る)

(家康)北條氏直へ姫君住つかせ給ひしより、四年になれども、いまだかの父子に對面し給はず、二たび氏政父子伊豆の三島迄詣る由聞しめし及ばれ、御使もて會面せまじき旨仰遣されしに、氏政が方にもさこそ存すれ、但黃瀬川を越えてこなたへ渡らせ給ふやうあらまほしとの事なり、この時酒井忠次等承りて、氏政がかくうつけたる答のまゝに、川

を越して渡御ましまさば、世の人、徳川殿は北條が旗下になりたりなどいひ傳へば、當家の名折此上なし、ひらに思召止らせ給へと諫めたり、君、名位の前後を争ふは詮なき事なり、さきに信玄、謙信の兩人和議を結ばむとて、犀川を隔て、會面せしとき、謙信ははやりかなる性質ゆゑ、信玄よりさきに下馬せしを、信玄はいまだ下馬せずして、應接せしかば、謙信大いに怒り、其場より鐵砲打出して合戦に及び、又十五年が間、戰爭やむ時なし、其ひまに織田殿は上方に切つて上り、大國の主となり、我も織田に力を合せて、一方に自立することを得たり、この入道等とく和融して軍したらば、織田殿も我も一支も成りがたきをいらぬ争ひに年月を過したる中に、他人をして大功を立てしめし事のうたてさ、今氏政實心もて我に接するからば、我何ぞ其下に立つ事をいとほむ、天下一統の後にて上につくとも下に立つとも、其折に議すべけれ、今の位争は無用なりとて、遂に時日を定め、三島におはして、氏政父子に對面ましませり、その時氏政父子は上坐に着かれ、一族の陸奥守氏輝はじめ其次に座す、君は氏政より下に着かせられ、酒井忠次、井伊直政、榊原康政ばかり陪座す、一通獻酒終りし後、美濃守氏規進み出で、御宴進まざるうちに上方の軍議をなされむかといふ、君、上方の事はとくに定め置つれば、今更議するに及ばず、けふの對面はかたみに打解けて、こゝろの宿念をも晴らし、且はこの後無事ならむ爲めなり、まづ兩國の界なる沼津の城をはじめ、城々皆とりこぼちて、境界なしにせむと思へば、もし上方



に事あらば、我手勢五萬のうち三萬を率ゐて、切つて上らば何條事かあらむ、又奥方に出馬し給ふ事もあらば、其先手承りて切懸け申さむに、三年は過ぎまじ、とにかく親、うち語らばんこそ肝要なれと宣へば、氏政はじめいとおもひの外の事に思ひ、喜ぶ事限なし、かくて酒宴も閑になりて、君自然居士の曲舞をかなで給ひ、黃帝の臣に貨狄といへる士卒とうたはせ給へば、松田・大道寺等同音に、徳川殿は當家の臣下になり給ひぬとはやしたつれば、氏政もふつばに入りて聞き居たり、酒井忠次は例の得手舞の海老すくひ、川いづれの邊にも候と舞ひ出でたれば、氏政太刀を忠次に引かる、忠次又おしいたゞき小田原の老臣等に向ひ、我等は斯様なる結構の海老をすくひあて、候と、高らかにいひけり、忠次が歌のうち、鎌倉下りといふ詞のありしを、小田原の山角總介いまはしくや思ひけむ、たむし尻うつたるを見さいな、納りに熱田の宮上りと舞留ける、大道寺いひけるは、酒井殿は鎌倉下りなれば、山角は熱田の宮まで切り上り候ととりなして、主方も客人も各興に入りたり、氏政酔ひすゝみて、君の御膝へよりかゝり、其刀を居ながら抜とりし氏政は、大功なれと戯れける、此時松田尾張の守、徳川殿にはばや當家の臣下におはしませば、何ぞ嫌忌のおはしませむといふ、この日北條が御もてなし、實に善美を盡せり、宴はて、後歸らせ給ふ、北條より山角紀伊守して御見送の役を勤めしむ、御かへさの道すがら、沼津の外郭の壁及び櫓を皆毀ち撤せしめ、本丸ばかりを御棧館の設に残され、紀伊守

に見せしめ、こたび親會せし上は、封境の險も無用なれば、かく取こぼらたり、この旨氏政父子によく傳へらるべしと御含められし故、小田原にもうしろやすくなり、いよく當家を慕ひ、隣交おこたらざりき、かゝりしかば世には徳川殿は小田原と結縁ありし上に、今度の會盟またいかなる事を議し給ふも計り難し、その上軍法をも武田が流にかへ給ひしなど京にも聞えければ、豊臣家の上下、さきに彼方に降附せし石川數正が事を古曆古曆と名付けて、用なきものゝ様におもひ嘲りけるとなむ。

宮城野口・竹浦口を攻められし時、かねて先鋒は當家、二陣は秀次と定められしに、秀次うちこして前に進まむとす、よつて村越茂助直吉をもて秀次が方へ仰せ遣されしは、秀次先陣うたれむ事、年若き御心にはさもあるべし、いと神妙の御事なり、わが陣頭を聞いて通すべし、家康も其餘勇を求めて勝利を得むと思ふなり、たゞし敵は地戰、味方は客戰にして地の利に暗し、その上今日、日暮に及むで、山下に陣取るは兵法のいむ所なり、今夜はまづこの所に屯し、明朝先陣打たればしからむかと仰遣されしかば、秀次且感じ且恥ぢて、其夜は箱根山の牛腹に陣取り、終に夜幕を燒いて夜を明しけるとぞ。

伊勢神官戸部太夫といふは、豊臣家先代より新禱の事奉はる御師なり、一とせの戰に、秀



頼が内意をうけて、兩御所を咒詛し奉るよし聞えて、伊勢の事奉はる日向半兵衛正成、中野内蔵允鞠せしに、まがふ所もなければ、罪案を決して駿府へ伺ひしに、そは奉行人の心得違ひたり、秀頼が運を開かむとて丹誠をこらせしは、御師には似つかはしき事なり、早々獄屋を出し、没入せし器財も悉く返しつかはせと仰付けられしとぞ。

矢畑の橋洪水にて評流したれば、架橋の事命ぜられしに、老臣等、この架橋、費用の莫大なるはいふまでもなし、御城下にかゝる大河のあるは、究竟の天徳にて隣國より攻來るにも、橋なきをもて便よしとす、此度流失せしこそ幸の事なれ、この後は船渡しに命ぜらるべきにやと、各議し侍るよし申上げしかば、君聞召し、抑この橋のことは、代々の書籍にもしるし、謠曲にも入りて、本朝に名高き橋なり、さるをわが代に當りて橋をかへて渡にせば、海道の旅行艱困するのみならず何がしかば、敵を怯れ、費用をいとひて橋をやめしなどは、天下後世にあざけられむは、國主の恥辱とやいはむ、まして地險をたのむは、人にも時にもよる事なれ、古人もいひし如く、國の治亂は人和にありて地險にあらず、險をたのむで敵を防がむは、本を知らざるの論なり、たゞ片時もはやく改築せよと命ぜられしかば、いづれも尊旨の快益にして、利濟の念ふかくおはしますを感じたてまつれり。(東照宮御實記附錄、徳川家康)

(寛大明察部下を憐む)

大納言(利家)様御物語には、能登國不動山の坊主共、岩成と福井備前守、三國越後守とを取廻し、謀叛仕り候時、前廉相聞え候、山の坊主共御呼び候て、御穿鑿なされ候へば、誓て、御坐なく候事に候と、靈社の誓紙を仕り候故、御返なされ候、其後大納言様、御鷹野に御出で候て御歸り候を、討ち申すべき工みを仕り候處、俄に大雨降り、路次より脇道を御歸り候故、異儀なく候、扱其後、大い色立ち申すに付、誓紙御覽候へば、程隔り候へども、誓紙の血判未だ干申さず、扱も、恐しき事と申し候、右の御鷹の時、雨降り候て、別道御歸なされ候も、御運強き御事と申し候。

金澤城代奥村故因幡果て申す後、前田丹後城代仰付けられ候、其後異風の内、不破四郎三郎當番の節、番所に臥せり申敷居より足を下げ居り申し候處、丹後通り合ひ、不沙汰なる體と、番所へ立寄り申し候へども、四郎三郎、丹後を見知り申さず、番人は揃ひ居り申し候へば、別に不沙汰之なしと申す、丹後、道より若黨を返し、今日の當番、誰々に候や書付参るべき由、丹後申す由申し入れ候へば、其後、四郎三郎驚き番歸り、異風裁許の岡島五兵衛方へ罷越し、様子申入れ候へば、五兵衛申し候は、定めて丹後殿、小松へ此儀言上たるべく候、其前我等参り、先達て言上仕るべしと早々参られ、右の様子書付を以て申上げ候へば、



何の仰出されも之なく、追付丹後も參り、此儀言上仕り候處、御意なされ候は、此儀丹後仕様悪しき故と思召し候、四郎三郎儀、丹後へ慮外仕るべき譯之なく候、丹後を見知らず候故に候間、向後番人共切々呼び、振舞申し候へと仰出され候、其後は御番衆を切々振舞申し候由。(利家夜話前田利家)

或日何方よりか馬一疋走り來り、邸の表門より玄關を躍越えて、直に前廳に入りしに、當直の士數十人馳集り、漸にして捕へ得たり、俄の事なれば、諸人あわてうるたへ、速に捕へざりし事、如何なる御咎や有らんと恐れ居たり、此由聞かせ給ひ、そは何よりの事なり、武家の門に駿馬の躍入りし事、此上も無き祥瑞なるべし、藩中の貴賤一統に酒を與へて祝せよと仰せられしかば、今まで如何なる御咎も有らむと恐れ居たる者共、忽に歡喜の色を顯し、宴に連りて萬歳を祝しけるとなり。

近習の少年宿直の夜外に出でて、夜明けて後歸りしかば、其局長大に憤り、罪を加へて後を懲すべしと罵りける由聞召され、左右を遠ざけ密に其局長を召し、彼平日武藝に心を入るゝと聞及びしが如何にも射藝等は衆人に越えて見ゆるなりと仰ありしかば、局長仰の如く武藝は珠に精を入れて修練し候なりと申す、さらば此度の罪は赦し遣すべし、世に全徳の人は得難し、一失あれば一善あれば一過は恕すべきなり、我には未だ聞せざる様にして、此後宿直怠らざる様によく戒むべしとぞ宜ひける。(有徳院殿御實記附録、徳川吉宗)

(土井)利久殿の方へ、初て老臣に命ぜられたる人參られ、問はれけるは、思掛けず重職に加はり候へば、いぶかしく存じ候、先づ大體は如何心得候はんやとありしかば、答えて、いや何の事も候はず、丸き木にて角なる器の中を掻き廻す如くにあれば、事行き申候なり、丸き器の中を廻す如く、隅々まで捜せば、事の害出來候ぞと、答えられけりとかや。

久世大和守廣之殿、或時用人出でて、臺所廻り、總じて物入多く、吟味事足らず其上に小役人共諸色を押領仕る事、屹と檢議仕るべしと申す、大和守、其臺所小役人共は、如何様なる身上なるぞと尋れらる、五兩に二人扶持と申す、又幾人程の暮しとあり、夫婦に子供三人計りと申す、時に大和守申さるゝば、右の宛行にて、其人數暮さるべきやと申されける故、用人中々難澁の由申す、大和守、其難澁を知りながら、其吟味をせらるゝば、其方共の誤なり、彼等盜をせずして、何ぞ妻子を養ふべきや、夫れを答に行ふは、大なる越度なり、能々吟味して遣さば、自ら盜は致すまじと申さる、誠に大度の志を感じ合へり。(實兩者草)



御靈社様御在國の時、兵衛御講談日にて拜聞の面々相詰めたり、相濟み候へば、又餘の御用も之ある儀に御座候處、ふと外の御用出來、殊の外御開しく罷成り申し候時に、某御藥番を勤めしに、御際の明き申す迄は、御藥差上げ申す刻限、遅く罷成り候に付、唯今御藥差上げ申すべくやと、伺ひ奉りしに、遅き心付きかな、早々呉れよと、御意に付、俄に暖め申し候、其時御藥溜の口の螺旋を其儘にて、御藥を御茶碗へ移し、御茶碗蓋を仕り、御前にて蓋を取り、差し上げ申候迄も、御茶碗の内へ螺旋入れたる事、心つき申さず候へば、御藥はゆるし、御急ぎにて召上られ候處、かつと御吐き遊ばされ候へば、御咽まで行きたる螺旋つと御吐き遊さる某是を見奉り、はつと存じ、靈魂も消え果て、自分の儀は努々存せず、扱々御大切なる儀と存じ奉り、はつと申したる計りなり、良あつて、殊の外迷惑かな、あぶない事なと仰せられける、某は未だ夢のやうに存じ奉り罷あり候處、早く上下を著し、講席へ出でよと御意にて、不審等の御尋も之なく、其後迄も右の儀は毛頭御阿なく、相替る儀なく勤めしなり、某は是切と存じ候儀に御座候所、其時の忙しき、又至極迷惑仕たるを御覽遊され、無調法他に異なる儀なれども、何の御沙汰もなき、有り難き、言語にも及ばず、一日忘るゝ事もなく存じ奉りしなり、斯様の事、誰々が身の上にも、幾度も之ありし御事なり、誠に以て有り難き御惠の程、申すも愚かなる儀なり。(玉話集・津輕信政)

公の世子にてましませし時、或日馬場へ出で、賣馬の御慰あり、時に御手明組交替の者、櫻田御屋敷へ着く日なり、其内何といへる者にや、今年始めて江戸に出でたる者なりけるが、事に不案内にて、馬場を通り、御馬見所近く行詰りけるを、御側の人々叱して退けぬ、元より不案内なれば、驚き違て、御馬見所向ふ、諸士の居小屋の垣の内に入りて、身を隠せり、斯くて久しく待ちけれども、御賣馬の止まざりければ、何かはたまるべき、止む事なくして、垣の蔭にて小便せり、侍衛の諸士、各見付けて、此事を訴へん事を議す、此事公の御耳に達しけるにや、諸士を顧み給ひて宣ひし、賣馬を見て居し故に、小便をする者を見給ふ隙もなかりしぞと宣ひし程に、議する人々、其名をも聞かずして止みぬ。(翹楚篇・上杉治憲)

(景仰すべき勇氣)

慶長四年九月九日、重陽の佳儀として、阪城にまうのぼらせ給ひしが、城中には兼れて異圖ある由郡議まち／＼なれば、本多中務少輔忠勝、井伊兵部少輔直政はじめ宗徒の人々十二人、いづれも用心して供奉せり、櫻の門迄おはしませし頃、門衛の者扈從のもの多しとて、咎むれども、聞入れず、増田右衛門尉長盛、長東大藏大輔正家、出迎へて案内し奉る、井伊、本多等十二人は、御跡に附添ひ、御使番の輩五人は、玄關に伺公す、かくて奥方に通ら



ひ給ひ、秀頼母子に對面し給ひ、御盃ども出で、とりどり御賀詞を述べらる、この時かの十二人の者どもは次の間まで何公し、其様儼然たれば城中にも兼ねての相圖相違して、敢て異議に及ばず、還らせ給ふ折柄、わざと厨所の方へ廻らせ給ひ、一間四方の大火灯のかけたるを見そなはし、是は外になき珍らしき者なり、わが供の田舎者共にも見せ度しとありて、酒井與七郎忠利をもて、御供の者悉く招呼ばれて見せしめられ、内玄關より静にまかでさせ給ひしなり、かゝる危疑の折といへども、聊御平常にかばらせ給はず人なき地を行くが如く御處置ありて、鎮靜をもて騒擾を帖服せしめ給ひし御大度はいとたうとく仰ぎ奉らるゝにぞ。(東照宮御實記附録、徳川家康)

大岡忠衛門殿極めて忠實の人なりしが、伊達政宗攝州大阪へ上るとて、途中相州中原にて放鷹せられし處に、此所は神君の御鷹場なれば、此人を置かれけるが、此事を聞ひて槍を提げてかけ來り、貴客は徳川家の鷹場を御存ありて、此狼藉に及ぶ事甚だ以て奇怪なり我等事、此所の守りを承る身なれば、此通にては一分立ち申さず候間早々我首を取りて家康公に見せられよと、大に罵りければ、政宗甚だ以て迷惑致され、種々に陳謝し、徳川殿へは我等より能々申譯すべしとて、漸くに此人を申宥め、大阪に到られ、神君へ右の次第申上げられしに、神君笑はせ給ひ誠に大岡は卒忽なるかな免し給へ、さりながら彼

は安詳譜代の者にて、三州に於て代々武功忠實の者なり、假初にも主命を背かぬ者に候と、御會釋有りければ、政宗某も弱冠より人に知られしに、大岡氏なればこそ、此の如く申候中々通例の人には非すと、却つて大岡を譽められける。(責面者草)

御野廻の節大なる蜂の巢を御杖にて落し給へば、數千の蜂飛び出で人に著しに依りて、御側の面々拂ひ、するうちに、覺えず知らず、御前を退きやゝありて皆々走り歸りて、御容體を伺ひ奉れば、蜂十ばかり御身に留りあるを、一つも御拂ひ遊ばされず、泰然として御座遊ばさる、此時何れも赤面して、恐れ入りたる風情なれば、公、顔色を正しく宜はく、分厘の針を以て、刺す蟲にすら、われを忘れたる有様なり、況んや尺の劍を以てせば、各ひかんと、御意あれば、各絶へる心地したりといふ。(有斐錄、池田光政)

御言に曰く、權現様に仕へ奉りし平松金十郎下人、道中荒井の船渡にて、或者と諍論す或者の主人、即ち金十郎の下人を討捨つる、其頃諸人は曰く、金十郎我下人を目前にて人に打たせ、何とも言はざること、臆病者かなと譏りけり、其後金十郎戰場に於て、度々一番縫をしけり、其時金十郎が曰く、総じて我は喧嘩下手にて嫁なりといへり、是れ眞の勇士と言ふべし、古の韓信と同意の士なり。(有斐錄、池田光政)



(榮辱により情誼を更へず)

貞享元年八月、堀田筑前守正俊御四位下少將紀を稻葉石見守休若御五位下越智、正江戸の御城にて刺殺し、石見守も其場にて討たれ候、其日は十五日なりければ、西山公も例の如く御登城ありけるが、御歸の時分、如何思召し候哉、綱條公及び御連枝の御方をも御同道なされ、直に石見守館へ御寄り、内室へ御懇に悔みを仰せ入れられ候處に、近き親類衆の外は誰も訪ひ申さるゝ人無之候由、筑前守は權威甚しき故にや見舞ひ申さるゝ人門前に市をなし候由。(桃源遺事、徳川光圀)

(他の過誤を防ぐ爲の嗜好を抑制す)

或時に阿部豊後守忠秋を御譽被成候て、總じて昔より執權の家々には諸人奔走いたし、出入も不<sub>レ</sub>斷有之、全盛の様子に自然他よりも相見え候儀候處、豊州の屋敷常に靜なるは、其權に誇られざる故に候、大猷院様御目鑑にて、將軍様御幼稚より御附被<sub>レ</sub>置候は、斯様なる篤實の人故に候と、御意被<sub>レ</sub>成候、右の通の御方故、ある大名より豊後守殿へ、珍しき鶴の由にて進物有之時に、兼て御飼置き候鶴籠の口を皆庭の方へ向けさせ、口をあけ、不<sub>レ</sub>殘被<sub>レ</sub>相放、上の御威光にて、人にも執し思はれし身にては物は好くまじき事に候、我等近頃ふと鶴をすき飼ひ置き候へば、はや如斯に候向後は鶴すきを可<sub>レ</sub>相止と物語有之由に候、常々少しも御自分の權威に御誇なく、謹慎の御方と今以て申傳へ候。(千年の松、保科

正之)

慶長年中より、南京より渡る處の成化年製に焼出せる陶器、南京人商ひに長時へ入津しける時、加藤左馬助嘉明好みて多く求め秘藏せらる、本南京は蟲食ひて美麗なる器に非ず、新作染付の器さらな、十人揃へ調へて珍客をもてなさるゝ時、近習の士一つ取落し割り、右の者遠慮する由を聞き、早く呼出し、苦しからざる事、遠慮に及ばざるぞ、重ねても誰も粗相は有るべき事なり、割り残りの品持ち來れとて、取りよせ碎き捨てられけり、器物を愛する心から、士を粗相の名に汚したる此の品、十の數有る物の中、何の年何某の碎きしと名を出さん事、吾本意に非ず、毛頭怒つてするにあらず、我非を改むるなりと言つて其後は器物を愛することをせずと嘉明の臣物語せしとなり。(責而者草)

(人生問題)

(此著者の舊作、人生問題なる閑文字を再録する所以は、何等の省慮なく理想なく、信念なく、又時に高遠なる人生觀を思ふの餘裕なき人物は危険なりと信ずるが故なり。餘裕とは時間と物質とに富むにあらずんば有せざるにあらず、或は暖衣飽食肉慾の天國に生き、或は逸々如として名利の巷途に迷ふて他を顧みざる者は、浪費する時間多きも富巨億を積むも何等餘裕なきものなり。本文を人格の項末に附する微意は深く思ふ



所あるが爲めなり。

人生は不如意のものなり、紅顏移るい易くして盛名の下久しく居るべからず、始皇の權威も不老不死の藥を得るに由なく、ソロモンの榮華も能く幾何の歲月を支へんや。屍燒く鳥部山昨日も今日も煙立つと叫ばしめ、浮世の夢尙濃き多情多血の武士をして西行の聖と化せしめ、革命の大業も全く挫折し身は盲目となり、鬱勃の氣を一管の筆に托して詩人ミルトンの名を成さしむ、嗚呼人生百歳に満たざるも、常に千歳の憂を抱く、蘇東坡たらざるも清風明月の夕、誰か人生の須臾なるを嘆じて流水の無窮を羨まざらんや、渺々たる一萬里の土塊茲に十餘億の肉塊を載せて無邊無極の大虚に懸垂するもの、唯是内部の地熱未だ冷散せざる間の刹那の生命のみ、更に五十年の人生を以て時間の無窮、空間の無限なる宇宙に比較す、豈蟬蟻と無量大椿との差のみならんや、しかも大小長短たゞ比較上の語のみ、點水一滴之を千八百倍の顯微鏡に照さば無数の玄微なる蟲類の生息を見む、此の微蟲より彼の點水を見る焉んぞ吾人の地球を觀るに異なるなきを知らんや。若し其れ陣風一過此蟲類の全世界を滅絶し去るを知らば、地球の運命も亦類推すべからずや、莊子の比喩論グアルテールの巨人談素より荒唐無稽ならんも宇宙の大、時劫の久を體現し得て妙なりと謂ふべし。

見よ燦たる滿天の星を、何れか是我地球と同一なる世界ならざる、或は幾萬年の往古

に於て人生の意義ある世界たりしもあり、或は現時に於て、我地球と等しく有爲轉變の世界たるもあり、或は將に進化して世界たらんとするもあり、悠々たる全宇宙より之を見れば世界の絶滅の如きは新陳代謝の一作用に過ぐるなからむ、衛星として月は地球を公轉し、地球は他の太陽系の諸星と共に太陽を中心として公轉し、太陽は其系統の諸星を率ゐて類似の幾多の太陽と共に他の一太陽を中心として公轉し、其大太陽は諸太陽を率ゐて更に又大太陽を中心とし窮極する處なく、其間光熱の潜現或は遠心力と求心力との均衡を失ふて消滅する諸星、渺からず、我地球も亦同一運命を有すと雖、勢力不滅の原則は總て再び宇宙何れの方面にか復活して窮極するなしとは學者の定説なり、人は此浩蕩漠々の宇宙に生を寄せて自覺あり信念あり、然も

けふまでもあればあるかの身をもちて

夢の中にも夢を見るかな

之にて人間は安心立命を得るものにあらず、パスカルの、人の果敢なきは誠に枯蘆の如きのみ、されど其異なる點は枯蘆は其枯蘆たるを知らざるも、人は自ら枯蘆の如しと知ること、是なり」とは其れ之を謂ふものなり。吾人の來る何處よりせらる吾人の行かんとする何處なるや、逝きて弔ひ弔ふて逝く、阿僧祇劫の汲井輪何處に始まり何處に終らむ、墳墓は墳墓を造りて地球も亦竟に一大墳墓たるべき運命を有す、人生畢竟何事をか



意味する。人生は千古の迷宮なり、科學の進歩は此疑問を排除し得べきか、人智の發達は此問題を解決し得べきか、最近オスワルドは、我哲學は假想を交へざる科學なりとて實驗科學に基礎を置て千古の迷宮を闡明せんとす、是果して成功し得べき事なるか、將又其の成功は吾人に満足を與ふべきを必ずすべきか。其れ人生の懷疑は智にあらず情の問題にあらずや、情は眞善美の圓滿なる理想を求めて有限を以て無限を追ふ、物我相答へ形影相伴ふて畢竟満足なるものあるなし。満足なきに満足を強ゆ難い哉人の安心立命を得ることや、然りと雖も、天には榮光地には平和、人生常に春風の洋々たるあり、自ら之に背きて懷疑の奴となり白眼人生を嫉視し、悲觀の鬼となり華嚴巖頭の露と化す、抑も亦愚ならずや、吾人の路は近きに在り、之を遠きに求めて満足せざるは、既に根本に於て邪道異端に陥れるものなり。我生は丘阜の上に轉する石の如しと唱へしグーテは果して明達の人なる乎、我生涯を再び繰返すも同一經路を踏まんと満足せしフランクリンは果して大觀せし人なる乎、好夢まきに破れたりと死に望みて絶叫せしモリツクは、我は我義務を完了せりと大往生せるネルソンと孰與れぞ斷末魔に六ヶ月を醫師に強請せしグアルテールは、余は既に救はれたりと感謝せるクロムワエルと孰與れぞ。人生問題は幽遠高尚なる宇宙觀を一決するの要なし、唯安心立命の境を求むれば可ならんのみ、安心立命は満足によりて得らるべく、其所謂満足とは充分なるを意味

するにあらず、足るを知るは是満足なり蜀を得て隱を望まば人生何れの處にか満足を求むべきぞ、敢て問はむ、人生の進むに従ふて自己の能力に限りあるを知る、*As we advance in life, we learn the limits of our abilities.* — *Proble.* のフルードの言、「脚力盡時山更佳、以有限勿<sup>レ</sup>追無限」の東坡の言、味ふの非なるか味はざるの是なる乎、吾人は常に風塵匆忙の裡に活動しつゝあるもの、希くば時に少閑を利用し人生問題に就き燈下友と共に會心の清談を試んことを。

### 第貳款 能力

#### 第壹項 能率

##### 第壹目 能率研究

###### 第一 能率の解釋

###### 第一節 能率の意義

能率問題は決して産業上の問題に止らず、廣く人生に涉る問題なり、既に人類の生活其ものは自我發展の爲めにして生きんとし、より良く生



きんとする努力が分化向上の人類歴史を織り出せるものなり。然るに最近の能率増進法 Efficiency method の新着眼點は人間の企業方面に存すること及此方面の實際政策として最も有利に最も周到的確に効果を收めしむる爲め、執務上の心理的理論を講ずる學問に限定さるゝに至れり。されど何人も處世上自我發展の努力を要し之に關聯して經濟生活を營む以上は、直接企業方面に關係なきも、能率増進は共通の要求ならざるべからず。能率 Efficiency は *of* (より) *the* (造り出す) の羅旬語源より來り効果又は能力程度の義に用ひらるゝに至りし語なり。

第二節 能率問題の歴史

生活問題の起る處必然能率問題の伴ふものにして、希臘支那の古代より學者及實際家の研究の能率に觸るゝもの多かりしも亦當然なり、支那にては管子は過勞を誡め、荀子及列子は分勞の必要を説き、墨子は人物本位を説き、管子莊子は精力の集中を説き、韓非子は執務の順序方法を説きたる如き何れも今日の所謂能率増進法なり。歐洲にては希臘羅馬時代より哲學者の倫理或は經濟を説き能率問題に言及せしもの尠からず、アリストテレスは、本性は常住不變なれども事物と貸財とは然らず、*non natura praemisest, non opes* とし、或は人は運動

中に存在すとし心身健全の自己を本位とし生活能率の發揮を説きたり、羅馬時代には、總ての運動は速度を加ふる毎に一層よき運動となる、*omnis motus, quo celerior, cunq;is motus* とし、能率増進を重要視したるが如き是なり。更に啓蒙時代を経て近世に至り、經濟學の起るや能率は一般人生に涉る廣義のものたらず、經濟上の問題として取扱はれたるも、眞に實際政策として周到的確の効果を收めしむる爲め、具體的に應用さるゝに至りしは極めて最近の事實なり、其先覺者とも稱すべきは米國のテイラー博士 Taylor にして、科學的管理法 Scientific Management を唱道し、一八八三年以來數年前(死亡)に至るまで著述及新聞雜誌上に於て世人の注意を喚起するに努力したり。然りと雖心理學上の能率問題の研究はテイラー以前に在り、既に獨逸に於ける心理學者ヴント Wundt (一八三二) の所謂構成心理學及び米國に於けるウイリアム・ゼームス William James に其端を發せる機能的心理學と此の二様の方面より研究せられたり。ゼームスによりて端緒を發せる機能主義なる標語はシカゴ大學に於けるエンゼル Angell (一八二九) によりて初めて用ひれ、個人心理の研究に於てのみならず又社會意識の研究に於ても同様なる研究的特色を



發揮したり、然してスタンレーホール Stanley Hall によりて種々なる精神的機能の發達的研究を始められ、ホールドキン Baldwin に至り體系を與へられて發生心理學となりたり。かくてワットスン Watson により極端に主張せられたる行動主義となりて機能主義の主張は徹底されたり。此の如き経路を取りたる心理學の研究は遂にハーバード大學教授たりし獨逸人ミュンスターベルヒ Münsterberg が米國に招かれてよりゼイムスの心理學に共鳴し、實驗心理學を實際生活に結合するに可能なる點を指示し、テラーに至りて之が應用的研究の完成を見るに至れり、之に繼ぎてスコット Gott ギルブレス Gilbreth あり、此の如く研究せられたる結果は晩近米國心理學界に於て人間工學 Human Engineering なる語が盛に行はるゝに至り、ドッチ、ソルンダイク博士の如き盛に之を提唱し、我國に於ても松本亦太郎博士によりて傳へられたり。之に據ればそが目的は心理學的研究を基礎とし、人力を利用する原理、即ち從來言ひ來れる能率増進に對する原理の研究、即ち人力の經濟的利用の基礎を築くに在りと稱せらる。世界の大勢は著しき科學の進歩によりて總ゆる事物は長足の進歩をなし、現在行はる競争は即ち法則によりて増減すべき

不定の實量を有する人間の能率の競争となれり、而して人間の天賦の力の未だ開發せられざるものあれば、此未だ活用されざる力を開發し、實務上に利導し以て能率を向上すべしとする時代となれり。最初テラーは工場の仕事に適用すべき五箇の根本原理を發表したるが、要するに能率増進は一、作業法の改善、二、器具、機械その他の設備の改善、第三適材の選擇に在りとするものにして、爾來之を各種の作業に應用する實驗者續々として起れりと雖、此新システムを商店管理に應用する試験は最近まで起らざりしなり、唯其間之が應用とも見るべきは英國のカットンが廣告と販賣法とに適用せんとしたる未完成の研究と、米國のスコット博士及エマートンが此システムの一變體たる能力増進 Efficiency Increasing を廣範圍に説きたると、米國のヨットが此システムを基礎とし販賣管理法を組織したるに過ぎず。斯の如きは畢竟筋肉労働を主とする工場に適合すべき科學的管理法も精神労働を主とする商店に適合せざるがなめならず、然るに米國のパートランド、トムソンは熱心なるテラー法研究者にして之を賣店に適用するに成功せりと稱せらる、其結果は一九一四年の十二月及其翌十五年の一月の The System



誌上に連載されたるも、嚴格なる意義に於ける成功には未だ達せざるものゝ如し、近年心理學者間には機械率より暗示 Hints を得て人間能率の増加に着想し、精神技術 Psychotechnics の研究俄然として起り此販賣能率の増進を企てつゝあり、トムソンは是等心理學者の研究を基礎として販賣能率増進を立案したるなり。而して最近各國に於ける精神労働を主とする販賣能率に關する研究は、販賣者の精神技術と共に商店の組織と顧客の需要心理との統合を計るに努め、其結果として米國に於ては新しき組織或は新しき方法の商店が現はるゝに至れり。

**第三節 能率研究の缺陷** 過去及現在に於ける能率問題研究の缺陷は人を機械視するに在り人格を度外視するに在り、現に英米の科學的管理法研究の一例は活動寫眞を應用して職工の動作を撮影し、之を調査して無益の動作を發見し、此無益の動作を省き効果多き動作のみを増進し、勞作の順序方法を定めて一般職工をして之に準據せしむるが如き又は近年起りし精神技術サイコテクニックの研究たる販賣能率研究すら機械律より暗示を得たるものにして、精神を機械視し此前提の下に研究を進めたるに過ぎざるが如き、總て刻下の能率増進の弊は人格を度外視するに在るを知る

べし。人格を別にして能率の存する理由なし、能率とは覺醒したる道義心より自發的に出て來るものなり、無自覺無責任の精神に能率増進の餘地なし、假令他より強制的に順序方法を授けて能率増進を計るも永續せざるべく、又其永續するは僅少の剩餘部分に過ぎざるべし。勿論機械律的の能率増進も亦全く必要ならざるにあらず、唯之と共に各自の個性自覺と人格尊重との根本問題あるを忘るべからず、シユモラト、セリグマンの二大經濟學者は古今東西に亙りて積年研究の結果は共に平凡なる結論に到達したり、曰く「經濟の根本は機械にあらず人に在り」と、余は茲に機械律的の能率増進法を説くも、當然其根本は從業員の品性に在るを前提としたるなり。

## 第二 反能率的なる事業

**第一節 反能率的實例** 古今東西を通じ、幾多の世界的の大事業は歴史上に存するも、これ等大事業は全體の傾向として、資本に於て將又勞力に於て其の浪費の甚しかりしを見るべし。尙此等多くの事業の内には有効なるものもなしとせざれど、



之が作製の設計法の誤まれること、勞力並に資本を十分に利用せざりしことは歴々たる證據あり、先づ歴史を繙かんに、古代埃及人によりて作製せられたる、ナイル河畔の天空に聳ゆる彼の大金宇塔 Pyramid 及亞歷山府ファロス燈臺とを見よ、尙又バビロンの空中公園、希臘に於けるエヒイシヤスの月宮殿、モウソラス王の墓、ロオツス島に於けるアポロ像、オリンピアに於ける金及び象牙より成るジュピターの像、以上の如きは、古代に於ける世界七不思議と稱せられ各々其國民の信仰、理想及び愛、或は美の表徴なり。尙近世に至りても世界最大の寺院として知られたる羅馬の聖彼得寺並に、ナポレオン一世大捷記念凱旋門及スエズ運河エツフェル塔次に蘇國フオス河口に架せられたる橋梁アルプス山上ゴットハルト墜道最後に米國に於けるオリンピック號にして是亦近世に於ける七不思議なり。されど以上の如き諸種の大事業に如何に多くの能力、資本の浪費ありしやを見るに殆ど大部分が浪費なりと云ふも敢て過言にあらざるべし。此内スエズ運河の如く幾分か實用的の事業あれど、尙千八百五十九年三千万弗の見積りにて五年間にて落成の豫定なりしも、實際の價格は八千万弗を要し殆んど十年を費したり。之を三十萬

の土民を驅役し二十年の歲月を費消し、漸く完成したるにも拘らず、其の效果より云はゞ唯だ屍體を永く保存すると星を眺むることに過ぎざる彼の金字塔に比すれば稍々實際的なりと謂ふに過ぎず。尙ゴットハルト墜道はアルプス山をくりぬきて延長十二哩の長墜道も、此の計畫は職工の衛生を重せざりし結果多數の病死者を出せりと。尙近世に於ける米國の七大事業と稱せらるゝパナマ運河、紐育の汽車の終點停車場、紐育の解通行の運河、下水の改造、亞米利加の海軍、紐育の地下道、大建築物に利用せられたる昇降機之なり。右の如きは實用の工業的大業なるも實用としての効力は極めて少なく之が製作に不用の經費及勞力が用ゐられたり。パナマ運河は六億弗紐育の終點停車場は三億弗の大金を費せしも之れが効果は幾許ぞや、右七事業の内實際有効と認められたるは地下道及昇降機なるも、之も使用上には尙幾多研究の餘地を存するものなり。

第二節 體力と動物力と器械力

最近百五十年間に於ける大進歩は、動物の力、及び風、水流の代りに石炭、石油、瓦斯、並に電力を用ふることの時代と變化し、驢馬、牛、馬、の動物力のみ利用せし人間も、己が計畫を遂行せんが爲には殆んど肉體の力を用ひ



ざるに到れり。實に世界は筋肉の時代は去りて機械力の時代となれり。即ち二人或は二頭の馬の働は四人或は四頭の馬の働くよりも比較的多くの仕事をなし、一人若しくは一頭の馬が働かば二人若しくは二頭の馬の丁度半分より以上の仕事をなす、故に最も能率ある體力の標準は一人の一人一頭の馬を以てなす仕事なり。然るに機械の應用となりては到底動物の體力にては之に對抗するを得ざるに至れり、次に之が比較を示さば。

比

較

人

馬

機械

一馬力に對する重量(ポンド)	1,000	1,000	2,000,000
一馬力一時間の燃料(ポンド)	6	3.6	0.5
一頭に對する食糧の價	40弗	20弗	1弗
馬力の極量(比例)	$\frac{1}{8}$	1	70,000
有效なる勞働時間	40	40	40
一馬力を生ずる重量は馬も人も同じく千磅なり、乍併機械を利用せば、二磅より百			

磅の間に於て足る、一馬力を生ずる一時間の燃料(人馬は食糧)人は六磅馬は三磅六なり即ち一人の人が最良の鋤を以て一平方哩の土地を耕作せんには五百六十季を要す、一人の人二頭の馬と良き鋒を用ふる時は四季に其仕事を成し得、若し十二人の人三個の牽引機械と五十一個の鋤とを用ひたらんには三十六時間にて之れを成し得べし、左に表にて示さん。

燃料の力の割合

小蒸汽機械	5
人間が手にて充分働く力	7
大なる蒸汽又は石油機械	10
小なる瓦斯機關	20
人間が短時間極度に働く力	21
大なる瓦斯機關	30

即ち、人が一日二弗の給料にて働く時、一馬力は一年、七百五十時間として五萬四千弗に相當す、小なるガンソンの機關は一年間の一馬力は三百弗に過ぎず、尙大機械



装置にては蒸汽或は瓦斯、電氣に於て一馬力一年間二十弗より二百弗の間に相當するのみ。由是觀之人間の力は機械力に比較せば、百三十五乃至千三百五十倍の高價に達せん、人三十人、一時間に漸く一馬力を與ふるに機械にては石炭一磅乃至五磅にて成すことを得。斯の如くんば即ち、一噸の石炭は五人の男にて一年間働く力に相當す、かくて人間の體力の價値は次第に少に現今の如きは實に僅少となりたり。今や文化の發達は人間は自己の體力を以て牛馬と比較し、機械と比較する時代にあらず、機械を利用し運轉し之を指揮する所に大なる價値の表はるべき時代なり。往時アゼンヌの自由市民は開化の殆んど頂點に達せり、當時の市民は少なくとも五人の奴隸を有せり。又バラオは七年間の饑饉を利用し以て人民より金及び貯藏物或は家畜其他土地、自由までも攝取し、然して金持ちとなれり。今日印度にては金持が安眠せんが爲に多くの奴隸をして毎夜池の蛙を打殺さしめ、或は一夜中團扇を以て煽がしむるともありと。斯の如きは少數の金持の生活が多數の勞力を空費するものにして、實に反能率的の著明なるものなり。今日の如く機械力の應用は即ち如何に使用するも疲勞せざる多數の奴隸を使役するが如し、

實に人類社會の利益幸福の一大増進と云ふべし。しかのみならず近世の思想の發展は、自然の隠れたる富源の開發となり、コロンブスをして米大陸の發見をなさしめ、フルトンをして汽船をステイブソンをして機關車レールの發明をなさしめ、厚生利用の顯著なる進歩を來さしめたり。

第三節 能率發揮の時代

斯の如く人間の思想は時代を進歩せしめ、筋肉の努力乃至は壓制を以て人を活動せしむる時代は過去となれり。現代は實に監督の時代協同的獎勵の時代となり、共に機械の創造者となり又同時に機械の利用者たらざるべからざるに至り、最高幹部と雖、又弱輩なる日傭労働者を己がまゝに指圖することを得ざるの時代となり、従て夫々力勞と秩序に應じて活動せざれば機械も亦完全十分なる能率を擧ぐること能はざるに至れり。斯くて道德の如きも必然舊道德は滅びて新道德の勃興を見るに至れり。故に能率増進法を研究し人力を利用する上に於ても過去の如き單純なる方法にては到底世に處して成功者たるを得ず、茲に於て能率を増進せしめんが爲め心理學上に基礎を置き、人間の内部に深く存在する天賦の力を開發し、之を實務上に利導して絶大の効果を收めざるべか



らず。斯の如く能率増進は目下の急務なるに關はらず、尙現今にありても、完全に能率を發揮さるゝは殆ど稀にして、勞力及時間の浪費の如き非能率的行爲の有ゆる方面に存するは遺憾なり。實際社會に四十年間活動すると假定し、その間有要なる生産的の時間十萬時間を超ゆるは殆んど無しと謂ふにあらずや。口には「時は金なり」と貴重がる者もありても尙無駄話しに長時間を空費し或は貴重なる時間にも愚圖々々するが如きこと往々あり、嘗に自己の時間のみならず他人の時間をも空費せしむるに至る。而して時間の浪費程輕視せらるゝものゝ他に之なきを見るに至りては實に驚かざるを得ざるべし。我國にありては此弊の特に著しきは、蓋し封建時代の遺風の然らしむる所にして、既に人種として此の點に於ては相當苦痛を経たる結果、斯の如き時間の浪費には最早一種の習慣性となりたるものゝ如し、到處に於て電車の乗降、乗換に長時間を要し、集會に多人數の時間を徒浪せしむる等其他枚擧に遑あらず、此等の弊風に對して不平を稱へ改革を企てざるは不思議なり、されど此等の事柄も早晚吾人の經濟的利用の爲めの改革時代に遭遇すべし。尙現今の如く能率増進を計るべき時代にあり繁文縟禮形式偏重の所謂

御役所風なるものありて、非能率的行爲の我國有ゆる社會に彌漫するは驚くべき弊害なりと謂ふべし。

### 第三 能率心理

#### 第一節 能率増進の諸條件

能率増進の根本的研究問題は、即ち前述の如く、普通意識の才能は勿論、更に吾人の有する限りの潜在意識の才能をも開發し、以て之を人の活動上に利導せんとするに在り。人間の活動は物的活動並に心的活動の二方面に大別せられ、物的活動即ち純粹生理的活動とは、心臓の活動或は肺臓の活動の如きを指し、之れ以外の活動は總て心的活動の中に包含せらる。然して心的活動は一の目的を有し、一の成果を得んが爲になす、精神及肉體の活動を營むもの、從つて意識の存在を必要とし、殊に意志作用の成果なり。而して、之には多少、肉身的活動の伴ふものなるが故に常に多少の努力を伴ふを必要とす、此肉身活動の參加する量の多少により、大なる場合は之を外部的意志動作と稱し、少にして精神的活動が其の主要部分を占むる場合は之を知的作業と稱す。故に能率増進に關し、必要なる根本的研究は、之の心的作用に置かざるべからず、然して、之が能率問題と最も



密接せる關係あるは次に説く所の如し。

一、行動の内的條件、前述の如く、人は本來内的(精神)外的(身體)の兩面的存在にして、之が内部の變化は直ちに作用の成果に一變化を來するが故に、作動に關する内的情態の變化は、亦直ちに能率上に影響を及ぼすべきなり。例へば、疲勞、練習の如きもの、如き、之が研究はやがて人を使用し訓練し、利用する上に最も必要な事項となり、之によりて如何なる作業方法を探らしむるや、或は如何なる訓練方法を採用すべきや、或は又如何なる條件の下に練習せしむべきか、そが根本を明白ならしめ實際上の作業、更に進んでは人生の向上に利導するに關係ある大問題なり。

二、行動の外的條件、人の活動は又外部(圖境)の種々なる變化により活動を異にするが故に、外部的條件の變化は直ちに能率に大なる影響を與ふるものなり。併して外部的條件とは、日常の食事、空氣の情態、氣候、天候の如何、或は日時の影響、光、音又は嗜好品即ち糖分、酒、煙草等之なり。

三、行動に於ける個人差、人は其の面を同ふせざるが如く、心的作動に於ても、個人差の著しきを見る、先づ個人差の研究とは、年齢の差異、男女の性別、等其他種々ありて、之

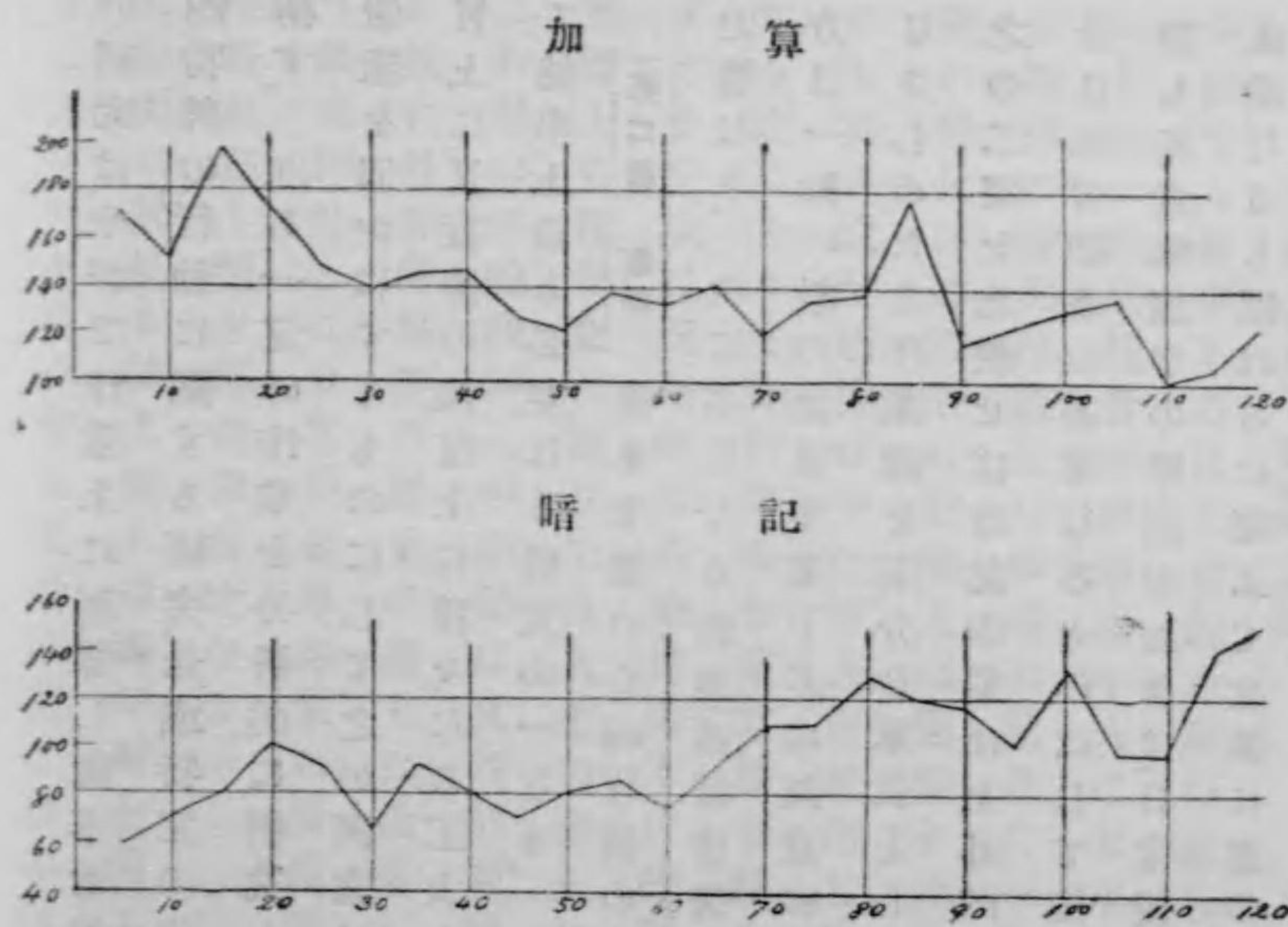
が研究は、やがて作業上に利導し、能率増進に資すること大なるものあり。

四、特殊の行動に關する研究、是或特定の作用に關し、精密なる分析的研究を行ふを稱す。即ち一定の作業を分析的に研究し、此作業に關與する精神的、身體的活動の情態を明かにするものにして、之が研究は作業法の改良、無駄の除去、或は作業の練習上に、又疲勞の恢復上に種々なる工夫を促し、又適材選擇の標準を決定するを得て能率上最も必要な研究の一なり。

第二節 疲勞

能率増進の心的行動の内的條件は疲勞、練習、統覺動搖、興奮、慣知、努力等なり。次に示したる圖形(高橋、積著「心理學」に在り、蓋し外國の例なるべし)の上方は一桁の數の加算作業、下方は無意味なる綴字の暗記を、各二時間づゝ連續的になさしめたる作業線を、五分を單位として測定したる結果を示したるものなり。之の二圖を比較せば、暗記作業は上昇的なるに、加算作業は下降的なり。之即ち前者は練習効果の著明なるものにして、後者は疲勞の影響の顯著なるを見るべし。即ち無意味綴字の暗記の如きは、日常接觸せざる事件なるが故に、始め不訓の爲、不成績なるも慣れるに隨ふて次第に進歩の現はるゝ爲なり。機械の如き無機物は





假令之を間斷なく運轉せしむるも、此かの疲勞現象も見ず。されど人間は之と異りて、一定時間内或作業を遂行する場合に於て、必ず疲勞を感ずるものなり。此疲勞の現象は、即ち生理的變化に基くものにして、其原因に二方面あり。一は有機體を組織する有機物質の消耗に因る者にして、酸素、炭素、ナトリウム等の消耗によるものと、他の一は新陳代謝の結果、所謂疲勞物質と稱せらるゝ炭酸、乳酸、酸性磷酸鹽類等の産出する事之なり。即ち疲勞は有機物質の消耗に關する積極的方面と、疲勞物質の産出に關する積極的方面との、二方面の生理的變化が作

業中に表はるゝより起るものなり。此外疲勞現象の表はるゝ原因には、生理的變化以外に尙主觀的に現はるゝ疲勞の感あり。之の疲勞の感は必ずしも實際の疲勞の度を表はすものにあらずと雖、此疲勞の感も作業上に影響する所甚大なるが故に、亦觀過すべからざる問題の一なり。此如く人間は如何なる作動を營む場合に於ても、以上の如き疲勞現象の現はるゝ者にして、此現象は單に、現に遂行しつゝある行動にのみ現はるゝにあらず他の行動にも亦影響す。かくて之が影響を客觀的に其成果より見る時は、一定時間内に遂行し得べき分量は減退し、性質は劣悪となるなり。即ち能率の下降現象を來すなり。然して、之の消耗せられたるエネルギーは、一時作業を中止し、以て適度の休憩により之が填補さるゝものにして、是即ち無機物の消耗現象と其の趣を異にする所なり。嘗て、フェルヴオルン Verwoort は實驗的に疲勞物質なき疲勞を起したることありき、而して、氏は有機物質の消耗による疲勞の現象を疲勞と稱し、疲勞物質の産出による疲勞の現象を、單に疲勞と稱し、以て、兩者を區別せり。尙又、ツイヒャルト Weichardt は疲勞物質に對抗する性質を有する、抗毒素を發見したりと雖も、未だ一般的には認められず。



第三節 練習 之は或る器管を特殊の行動に順應せしめ、その作業に對する機能上の傾向を起す働きにして、疲勞とは全然正反對なる影響を行動上に現はすものなり。即ち吾人が同一刺戟の連鎖の反復に遭遇し、同一意志作用の連鎖の反復を以て之に應ずることとなり、きまりきつた中間項なる刺戟並に運動は次第に注意せられざるに至り遂に殆んど自動的に順次開發せらるゝに至る。即ち習慣の利益は、最少の精神力を費し、質に於ては精確、量に於ては多、速度に於ては大なる結果を收むること是なり。されど此の如き効果は必ずしも永久的に存続するにあらず、行動の中止と共に漸次消失し、此消失の割合は時間の長短に比例することなくして、一般に行動中止後の初期にありては多大にして、次第に其の量を減す。然しながら、其残存部分は屢々非常なる長時間永續するとあり。此如きは從來の實驗に徴するも明なる處にして、之を練習の存続的效果と稱す。此現象は疲勞が作業休止によりて全部除去さるゝとは全然反對の現象にして、且疲勞が一般的に他の行動にも影響を及ぼすに對し、練習にありては其効果は只其行動が内容上、又は作業法上共通の點ある場合にのみ限らる。然れども現在にありては練習は尙他の

場合に影響がありや否やは未だ定論なし。斯の如く吾人の行動中には、正反對の現象を有する練習と、疲勞とが、常に現はれ何れが重きをなすやによつて作業線は、根本的變化をなすものなり。されども、作業線の進行を規定する内的條件には、此外統覺動搖と稱すべきものあり。

第四節 統覺動搖

吾人が彼の微かに聞ゆる時計のセコンドに注意する時、元來時計の音は客觀的には同一強度の音なるにかゝはらず、一定時間を隔て或は聞え或は黙するを知るべし、恰かも主觀的には、時計の音に強弱あるものゝ如く感せらるゝなり。之、即ち統覺の波動が、山頂に達したる時には之を聞き、谷に落ちたる時には之を聞くこと能はざるに至るものにして、意識の活動は此統覺の波動に左右せらる、而して吾人は、此波動につれて行動を律的に分割せんとする傾向あるものなり。此の統覺動搖の現象は、吾人が如何なる種類の作業を營むも必ず現はるゝ現象にして、行動に肉身的方面の參加する場合は、一層其傾向の著しきを見る、前圖に掲げたる加算と、暗記との二作業の作業線を見るに、一方は上昇的に、他方は下降的に、根本的には相違あるも共に一定なる週期の動搖ある點は異らざるなり。但



多くの作業線にありて、其測定時間單位を十分或は三十分と大にせば、漸次此の動搖は消失することあるべし、然れども五分或は一分と短時間の測定にて之を見る時は、必然的に現はるゝ現象なり、而して此の現象も一作業に對し、作業者に放任せば其個人に従ひたる一定の律動を選択し、以て作動を行ふが故に、其性質は良好となるべし。されども、各自個有の律動あるに關はらず、外部より律動を與へ以て各自の律動を之に順應せしめ、以て作業を營ましむる場合にありては、往々作業量は大となる場合あるも、其性質は劣悪不正確となるを保せず。今筆記作業に於て、之を見るに他人に或る文章、或は詞句を讀ましめ、之を自己が筆記せんとせば、注意の週期的動搖は自然律動に従はずして、外部的刺戟なる他人の言語に、自己の注意を順應せしめざるべからざるが爲、前述せるが如く往々量に於ては大となるを得るも、質に於ては一般的に劣悪となる。即ち外部より與へらるゝ律動と作業者個有の注意の律動との差の大なる程益々作業は困難となり、従つて疲勞の進行は速かに作業の性質は劣悪となるべし。故に、現今の如き往々工場内等に於て、種々の器械に従事し、以て一定の作業をなすに於ては、多くの場合律動は器械によりて

他より與へらるゝが故に、各個人の注意の自然律動を無視し、之が爲め諸種の浪費或は災害の發生を見ることあるが故に、能率増進に意を止むる者は、又以て此點の考察も觀過すべからず。以上の外に作業線進行の規定に關しては、興奮と稱すべき現象あり。

第五節 興奮

現象は、通俗に「油が乗る」或は「氣乗りがする」と稱する情態を指すものにして、如何なる作業線を見るも、普通作業の最大量は、假令それが練習の極點に達したりと思はるゝ時にありても、初期には得られずして、作業を暫時繼續したる後ならざれば得ること能はざる現象なり。是即ち作業そのものによつて起る身體内の一種の變化にして、器械を運轉せしむる時、一の隨性を生ずると同様な精神及身體的器官の一種の隨性なり。此隨性は、作業の進行に伴ふて漸次排除さるゝものなり。而して興奮と稱せらるゝ中にはクレペリン Kraepelin の稱せしが如き、特殊的の興奮例へば加算作業をなす時、次第に其作業の容易なるが如き現象を稱するものと、之に反し一般興奮は或る特殊の作業をなすことが一般に他の作業をなすを容易ならしむる傾向を稱す、之を例せば、吾人が覺醒後、或作業に従事



せんとする前に小時間散歩をなし、或は知的作業をなすことが次になすべき作業に好結果を來す場合のごときは是なり。而して之の一般的興奮は、長時間の休憩例へば午睡、或は夜間の睡眠によりて消失し、特殊的興奮は短時間の休憩によりて消失す。かるが故に、休憩時間は一方に於て疲労を恢復し、地方に於ては興奮を消失せしむるが故に、疲労恢復の爲に置かれたる休憩の後、に於て、疲労は減じ、能率は高まるべき筈なるに、却つて之の結果は反對に能率の低下を見ることあり、之即ち休憩によりて、興奮が消失したるに基くなり、今、疲労練習、興奮の影響と休憩との關係につき、Hylan の行ひたる實驗の結果を見るに、氏は五分宛二回に於ける加算作業に就きて、其間種々の休憩を置き、以て前五分に於ける作業量と、後五分に於ける作業量との百分比を算出せり。之に由れば、先づ被験者Hの成績に於て、二十分休憩を置きたる時を除きては悉く一〇〇以上の成績を示し、即ち休憩前の能率より休憩後に於ける能率の大なるを示す、然るに、二十分の休憩を與へたる結果は、甚しく能率低下の現象表はれたり。又五、十、十五分の休

	0'	1'	5'	10'	15'	20'	30'
被験者 H	100.3	100.8	103.3	101.1	101.1	93.9	106.1
K	98.5	100.6	101.5	98.5	100.4	99.9	100.9
W	100.5	100.1	109.0	110.4	98.4	111.8	112.5

憩時間を置きたる場合の能率に於ても同様結果を見るべく、即ち五分休憩時に於て一〇三・三なるに、十分十五分の休憩後に於ては一〇一・二となれり、之十分十五分の休憩時後よりも五分休憩時に於ける方が一層有効なりしとを提示す。之と同様なる結果は又K、Wの被験者に於ても見らる、Kにありては、十分休憩時に於けると、無休憩に於けると同一成績にて、五分休憩後に於ける能率より低し、Wにありては、十分休憩後に於ける能率は、他の何れの休憩に於けるよりも最も結果悪し、以上三人の成績より總合して考察せば、五分間作業せし後に置く種々の休憩中にありて、十分乃至二十分の休憩の間に能率上に悪影響を來すべき休憩あるを認るなり。之蓋し、休憩の爲め多少疲労が恢復せられたるも、作業中止による特殊の興奮消失する爲めにして、或長さの休憩は、却て他の種々の休憩よりも効果少なきを見る。かるが故に、興奮も亦心的作用の内的條件として認むべく、之が消失と休憩との關係は能率増進上必要なる問題の一なり。

**第六節 慣知** 普通練習とは反覆以て聯合が強固となるものにして、精神的身體的基礎の上に立つ行動なり。然るに、慣知は之と少しく其趣を異にするも、一般概



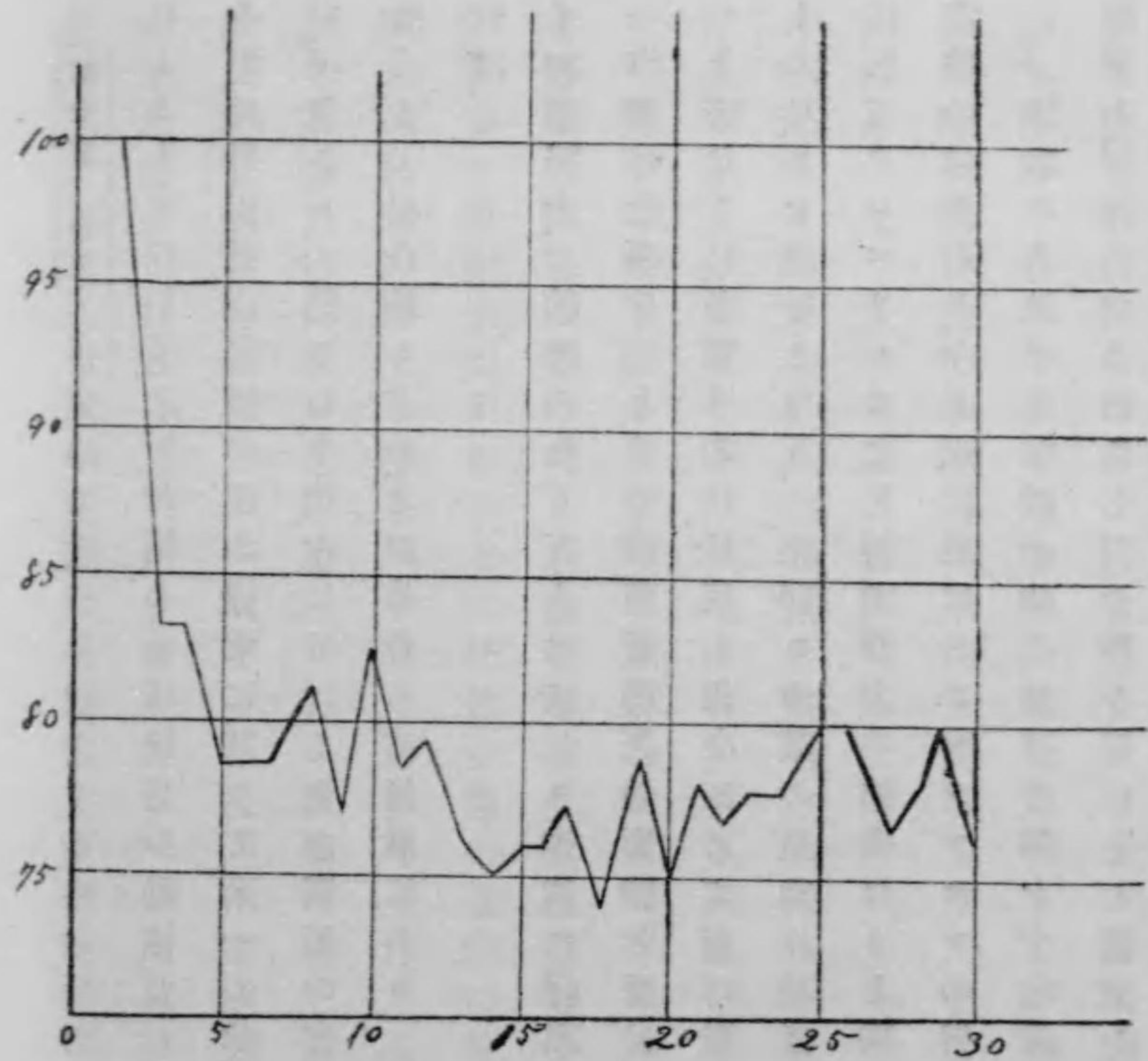
念に於ては尙練習の中に包含せらるべき一層精神的なる作用なり、即ち吾人が新しき作業に従事するや、最初其作業を妨害するが如き多くの思想が無意識に襲來し、同時に偶發的に小障害の生起を見、以て作業を困難ならしむるの作用起るが故に、吾人は先づ最初作業に着手すると同時に、是等一初の妨害的なる思想並に小障礙を注意外に放追し、心的情態を整理し、内外の諸情況に影響せられざる様意を用ふることに必要なり、此の整理の付かざる内は一種不慣の感情の存在を認むるなり、然るに此不慣の感情なる主觀的情態は、作業連續と共に次第に消失し、以前と反對なる作業に慣れたりと感ずる親熟、或は慣知の感情の生起するものなり、一度慣知の感情生起するや、未だ練習(普通の意味に於けるものにして、グントの所謂聯合的練習に同じ)の効果が十分に發揮せられざるに作業は大いに昂進す、斯の如く慣知の情は統覺を容易ならしめ、作業に對し注意し易くなるの點より、グントは又之を統覺的練習とさへ稱せり、彼の作業休止後に、再び作業に従事し、以て能率を昂進せしむるは、蓋し此現象によるべく、又此の感情は、一時間或は二時間の連續的作業時間につきて見れば、初期に此感情著しく末尾に於ては少なりとす。

第七節 努力

作業線の進行を規定する根本的問題は、練習と疲勞との程度如何によるものにして、之が動搖あるは統覺の動搖並に興奮等によるは前述の如くなるが、此外尙意志緊張の度の變化に基きて、又一の律的に動搖する傾向を有する一の現象あり、然るに作業中に於ける意志緊張の度の動搖は種々なる條件に支配せらるゝ場合最も多く、之が條件も亦無數にあり、されど其の著しきものを擧ぐれば、

イ 初頭努力、前述の如く吾人は新しき作業に従事せんとし、或は又休憩後、再び同一作業に従事せんとする時興奮消失の影響を受け、作業量は最初比較的僅少なるべき筈なるに、事實は之れに反し、假令極めて短時間なりと雖、初發の作業量が著しく大なるを認むるなり、之即ち作業の最初に現はるゝ強き意志衝動に基くものにして、クレベリンは之を初頭努力の結果なりと稱せり、又之に關する種々なる實驗の結果あり、今米國に於けるチャップマンの得たる成績を示せば、即ち次の如し、實驗の方法は單位數十個の加算作業を十七歳の女生徒二十名につきて十六分間宛七回課したる結果を三十秒を單位とし測定したるものなり、上圖は即ち其結





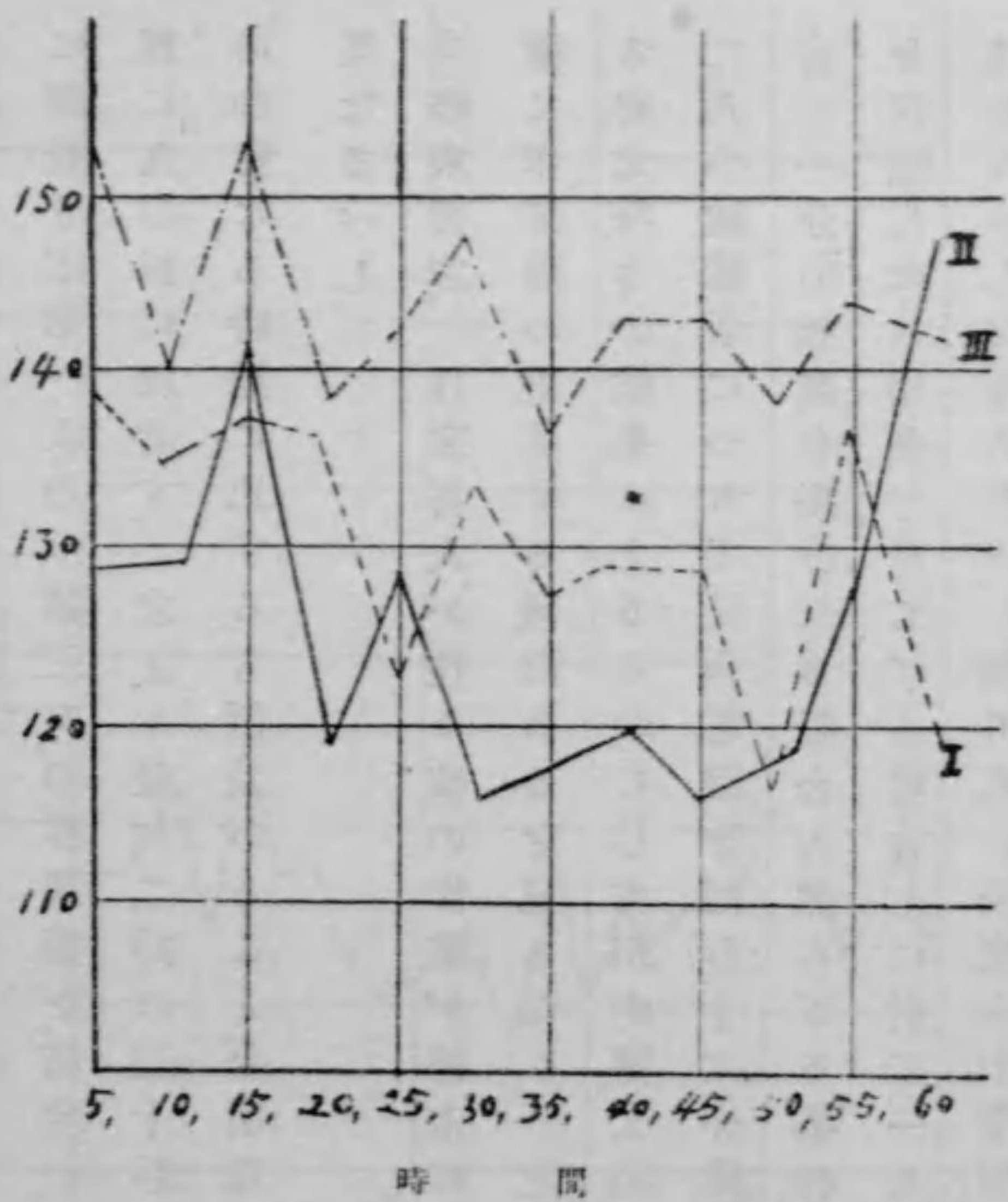
果を示せり、最後の一分に於ける成績は他種の條件挿入あるを恐れ之を除外せり。圖中横線は三十秒單位に於ける時間の経過にして、縦線は各三十秒の成績を第一次の三十秒に於ける成績に對する百分比にて能率變化を示せり。之によれば、第一次三十秒に於ける成績が、第一次乃至第三十次の平均能率に優ること二八・八%なり。然るに第十一次乃至第三十次の平均に對し、第二次は一

四七%、第三次は一・一%、第四次は二・三%の第五次は三・四%第六次は八・五%、以後動搖ありて或は第十一次乃至第三十次の平均能率より劣る場合もあり、之を個人的に調査せば第一次乃至第三次の作業量が、第十一乃至第十三次の總量に優るものに九〇%に相當す。之より最初二回の三十秒間、即ち一分間に於ける能率は、他の如何なる時期に比するも優差あること分明なり、之が現象は即ち初頭努力の結果なるべし。

2 終末努力。日常吾人が往々彼の作業が終末に近付きたるを意識したる時に、急に作業線の上昇する傾向あるを見るなり。之又一時的なる強度の意志衝動たる終末努力の結果によるものにして、田中博士が行ひたる其の實驗によれば、先づ二人の被験者につきて三角電鍵を用ひ、十六分宛打叩せしめ、十五分の終りに於て「あと一分」の相圖を用ひたる場合と然らざる場合とを作り、之が比較をなすに、終末を意識したる場合と然らざる場合とに於て、一人は六七%他の一人は四五%だけ速かなりしを認めたり。此外其の研究中、中學四年の一生徒につきて四個の單位數の加算作業を毎日一時間宛練習せしめたる時、偶然終末努力と認むべき現象を



發見せりと言へり、左圖によりて之を示さば、圖中三個の曲線は夫々一回の作業線



間接原因となつて能率を増進せしむる場合あり、それは、作業者が作業に従事中自ら

を表示す。横は五分を單位とする時間の経過なり、縦は五分間に遂行したる加算數なり。I及びIIIは全體として下降的標式の作業線なれど、IIは凹狀的標式を提示す、此の曲線を得たる日には、作業を始むる以前に於て、一時間過ぎ十分なるを既に知り居たる爲め、作業中二時を報する時計の音によりて今十分にて終了するを意識したるものなり。尙此外疲勞が

疲勞の爲め、能率の遲滯した事を意識し、遂に意志の緊張を見る、此一時的意志衝動の發現が即ち能率上に好影響を與ふるなり。又作業中途に於て妨害起るや之を除去せんとして意志を緊張し却つて能率の増進を來す場合あり、之に對し田中博士は次の如きことを云へり。「妨害を與へたる瞬間に於ては能率は一時減退の現象を見れど、暫時の後には妨害的刺戟あるに關はらず、能率は漸次増加し更に妨害的刺戟を全く除去せば、著しく能率の増大を來すことを發見せり」と。即ち、以上述べたるが如く作業線進行を規定するは、練習、疲勞、興奮、統覺動搖、慣知、努力、初頭努力、疲勞による努力、障礙努力、終末努力は統覺の動搖を左右するが故に、統覺動搖の一部に包括すの五個の要素が根本をなし、以て作業線を變化するが故に、之實に能率増進の根本的問題なり。而して、以上五要素の中にありて、心的作用の内的條件として最も重要な因をなすは疲勞と練習なるが故に、能率増進に關する心理の究研は先づ之より始めざるべからず。

(支那の能率論)

人を取るは己れを以てし、事を成すは質を以てす、用財を審にし、施法を慎しみ、稱量を



察す、故に用材は以て尙むべからず、用力は以て苦しむべからず、用材を尙めば則ち費へ  
用力苦しめば則ち勞す。(管子 版法)

萬物は字を同くして體を異にす、宜なくして用あり、人の役たるや人倫並び處る、求を  
同くして道を異にし、欲を同くして知を異にす。(荀子 富國篇)

故に百枝の成す所は、一人を養ふ所以なり、而して能も技を兼れる能はず、人も官を兼  
ぬる能はず、離居して相待たざれば、則ち窮し、群して分無ければ、則ち争ふ、窮者は患なり  
争者は禍なり、患を救ひ禍を除かんとせば、則ち分を明にし、群せしむるに若くばなし。

(管子 君臣)

身其の故を盡さば、則ち美なり、類は兩にすべからざるなり、故に知者は一を擇びて、而  
して一にす、農は田に精くとも、以て田師となすべからず、賈は市に精くとも、以て市師と  
なすべからず、工は器に精くとも、以て器師となすべからず、物に精しき者なればなり、人  
あり此の三技を能くせざれども、三官を治めしむ可きはなんぞ、曰く道に精しき者なれ  
ばなり、物に精しき者は物を物とするを以てし、道に精しき者は、物を物とするを兼ね、故

に君子は道に一にして、以て物を參稽す、道に一なれば、則ち正し、以て物を參稽すれば、則  
ち察なり、正志を以て察論を行へば、則ち萬物官す、昔者舜の天下を治むるや、事を以て詔  
せずして、萬物成りき。(荀子 解蔽篇)

故に著者の三代暴王桀紂幽厲の其の國を失、扞し其の社稷を傾覆する所以の者と雖、  
此を己ちての故なり、何となれば、則ち皆小物を明にして、而して大物を明にせざるを以  
てなり。今王公大人一の衣裳ありて、制する能はざるなり、必ず良工に藉らん、一の牛羊  
ありて、殺す能はざるなり、必ず良宰に藉らん、故ち此の二物のごときは、王公大人賢を尙  
び能を使ひ、以て之を治むることを失はず、其の國家を建つるに至りては、則ち未だ賢を  
尙び能を使ふを以て、政を爲す事を知らず、視威なれば、則ち之を使ひ、母故富貴面目倥好  
なれば、則ち之を使ふ、夫れ母故富貴面目倥好なれば、則ち之を使ふは、豈必ず智にして且  
慧ならんや、若し之をして、國家を治めしめば、則ち此れ智慧ならざる者をして、國家を治  
めしむるなり、國家の亂、社稷の危、既に得て知るべきのみ。

且夫王公大人其の色を愛する所あり、而して之を使ふ、其の心其の知を察せず、而して其  
の愛に與す、是の故に百人を治むる能はざるものなるに、千人の官に處らしむ、千人を治  
むる能はざるものなるに、萬人の官に處らしむ、此れ其の故何ぞや、曰く若の官に處る者



は、爵高而して祿厚し、故に其色を愛し而して之を使ふなり。(墨子 尚賢)

天地全功なく、聖人全能なく、萬物全用なし、故に天は生覆を職り、地は形載を職り、聖は教化を職り、物は宜しき所を職る。然れば則ち天も短なる所あり、地も長する所あり、聖も否なる所あり、物も通ずる所あり。何となれば則ち生覆するものは形載する能はず、形載する者は教化する能はず、教化する者は宜しき所に違ふ能はず、宜しく定まる者は位する所を出でず。(列子 天瑞)

氣を搏むる神の如し、萬物備はり存す、能く搏むるか能くト筈なく而して吉凶を知るか、能く止るか、能く止るか、能く諸を人に求むるなく、而して之を己れに得るか之を思ひ之を思ひ又重ねて之を思ふ、之を思ひて通ぜず、鬼神將に之れに通ぜんとす、鬼神の力に非るなり、精氣の極なり。四體既に正しく血氣既に靜かなり、意を一にし心を搏にし、耳目淫せず、遠しと雖近きが如し、思索知を生ず、慢易憂を生ず、暴傲怨を生ず、憂鬱疾を生ず、疾困り乃ち死す、之を思ひて捨てず、内に因み外に薄る、蚤く國を爲さず、生將に舍を異らんとす、食は飽くことなきに若くばなし、思ひ致すなきに若くばなし、節適の齊彼れ自ら至らんとす。(管子 内業)

木を搖が者、一其葉を搦すれば、則ち勞して徧らす、左右より其の本を拊てば、葉徧く搖く、淵に臨みて木を搖がせば、鳥は驚きて高く、魚は恐れて下る、善く網を張る者は、其の網を引く、若し一一萬目を攝して、後に得むとせば、則ち是勞して難からん、其の網を引きて魚已に盡せり、故に吏は民の本網たる者なり、故に聖人は吏を治めて民を治めず。火を救ふ者、吏をして壺甕を挈げて火に走らしむれば、則ち一人の用なり、鞭箠を操りて指麾して人を趣がし使へば、則ち萬夫を制す是を以て聖人は細民を親ます、明主は小事を躬らせず。造父操る時に方りて、子父の車に乗りて過ぐる者あり。馬驚きて行かず、其の子車を下りて馬を牽き、父子車を推す、造父に請ふ、我を助けて車を推せと、造父因りて器を收め、輻めて之れに寄載し、其子之を援きて乗らしむ、乃ち始めて轡を検し、笑を持つ、未だ之を用ゐざるなり、而して馬驂驚せたり、造父をして御する事能はざらしめば、力を盡し身を勞して之を助けて車を推すと雖、馬猶肯て行かざらんとす、今身佚し且つ寄載して人に徳あらしめたるは、術ありて之れを御すればなり、故に國は君の車なり、勢は君の馬なり、術なくして以て之を御すれば、身勞すと雖、猶亂るゝことを免れず、術ありて以て之を御すれば、身佚樂の他に處ると雖、又帝王の功を致すなり。(韓非子 外儲說)



## 第二目 能率の生理的條件

### 第一 個人差

#### 第一節 英國の例

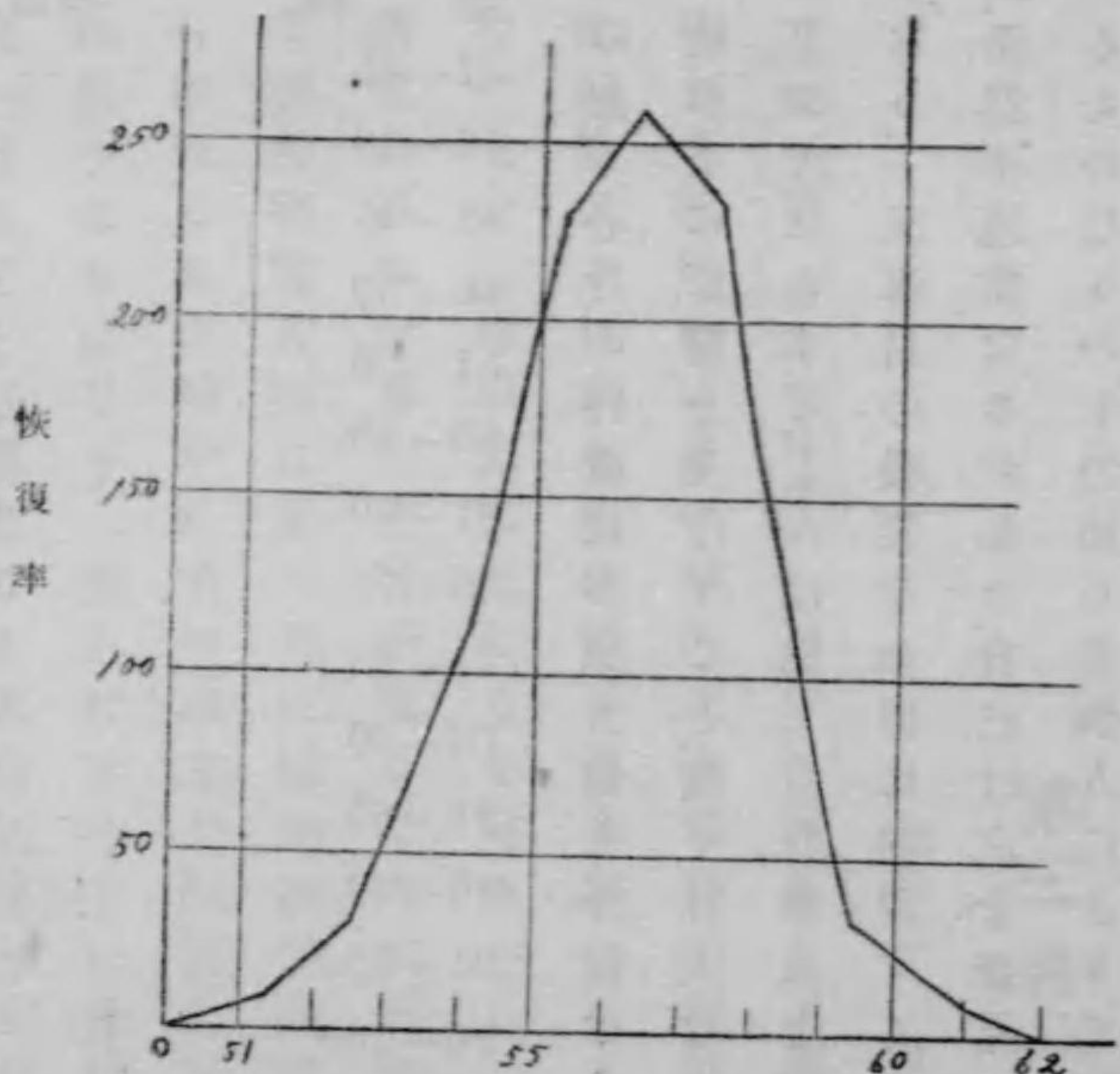
人は一個の人間として一定の型 Type を形成するも、分量的に之を見る時は千差萬別なり、其性質に於ても亦同様にして「十人十色」一人として同一なるはなし。然らば此等の差異は如何して發生したるか、人間には遺傳あり、環境あり、遺傳に於て同じ素質を有するものも又環境によりて個人的の差異を生じ環境同じきも又遺傳により各人の才能、品性、行動に於て著しく異なるものなり。此の如くなるが故に個人差が能率上に及ぼす影響も亦實に大なるものあり、一の作業に不適當なるも他の作業には適する性能を有することあり、然して又個人差の研究に於ては人種の別、男女の性の別、年齢の差異によりて大いに斟酌せざるべからず、前述せる如く人は其大體の型に於て共通なるも之をピアスンが英國に於て十六乃至十九歳の男兒一〇七一人の頭圍につきて測定したる結果によるに、左圖の如き結果を見たり。此の圖の如く左右相對的の出現數を見る即ち五一センチ

メートルより最大六二センチメートルの範圍を有し、最出現數五七の所にあり。

#### 第二節 我國の例

右と同様の統

計を田中博士の實驗に求むるに、東京府立第五中學校に於ける大正八年度入學試験の國語の成績の結果につきて次の如きことを云へり、最低より最高得點に至るまで漸進的に少しの間隙もなく連續的なること、此の結果より尋凡の者最大多數にして、優等及び劣等の者は共に其數少なりと、今參考としての出現人數と得點を見れば、





得 點	現出人數
31-35	1
36-40	6
41-45	5
46-50	29
51-55	48
56-60	75
61-70	82
66-75	107
71-66	88
76-80	70
81-85	50
86-90	26
91-95	12
96-100	2

右の如く心身の特徴は多數人間に分配せらるゝを見るべきなり、而して此特徴たる能率上に影響を及ぼすこと廣く且大なるものあり。假令ば彼の畫家、文士、音樂家等の天稟の才なくんば、能く自我發展を遂げて成功を期する能はざるが如き事實なり。又海員の職業を如何に熱望するも色盲にて赤及び綠との辨別力なくんば、全然不適當なるが如き、自己は之を發見せざるも色彩感受性が心的缺陷を暴露するものなりかくの如く各個人によりて夫々差異を有するが故に、此問題は能率研究の重要な部分なり。

### 第三目 能率の内部的條件

#### 第二 疲 勞

##### 第一節 疲勞の研究

疲勞に關する問題は、最近世界を通じ最も多く研究せられたり、英國にては彼の歐洲大戰勃發後幾許もなく能率増進、保健衛生に關する委員會が設定されたり、此の會の調査報告によれば、從來疲勞に關する文獻のみにて實に一七〇〇種以上に上れるを見るべし。實に疲勞問題研究は、之が行動に關する研究の根本を爲し、疲勞研究なくんば行動研究をなすこと能はざるが如し。而して疲勞研究方面に於て嘗に純理論的研究のみならず、又實務的方面よりも研究せられたるもの尠からず、勿論之が動機に至りては、工場或は學校等に應用する目的に出づるものなり。然らば疲勞とは如何なるものを云ふか、之を心理學者の言に従へば、疲勞とは適當なる休憩を投入せず、連續的作業に従事するに由りて起る能率の一時的下降現象及び行動、遊戯或は單なる心的活動の結果、或種の行動に於ける能率の一時的下降現象之なりと、而して尙行動、疾病、藥劑その他の原因の何たる



を問はず、能率の一时的下降現象も包含せしむれど、此の如きは寧ろ疾病或は藥劑の影響として研究せらるべきものなり、又所謂疲勞の感と稱せらるゝ主觀に現はれたる一種の複雑なる感情状態の如きは、疲勞の量的測定困難にして、前述せる疲勞の一部に包含せらるべきものなり。尙、此疲勞とは一般的現象、即ち疲勞は一般に何れの器官にも影響を及ぼすか、或は又局部に限りたる特殊の現象なるやの問題は、學者によりて種々議論ある所にして、今日にては理論上に一般説を正當とするも、亦一般に何れの器官も同程度に影響を及ぼすとなすは不可なり。又局部説にありても現に活動しつつある局部に於て特に疲勞現象が著明なりと見るは妥當なるべし。斯の如く局部説或は一般説の議論は、遂に疲勞測定法の研究を促し、次いで疲勞進行の形式及び疲勞恢復に關する諸問題を惹起せしむるに至りたり。

第二節 疲勞進行の形式

疲勞進行の形式に關しては器械的學說及び生物學的學說との二方面の學說に分れ、前者に従へば疲勞の進行は一定の法則を以て進行する經路を表示するを得るものとす、其の主張に據れば、作動進行中は次第に勢力は消耗せられ、休憩によりて再び恢復すること恰も彈性ゴム球若しくは蓄電池の

如しと、又一方物理學的學說によれば、疲勞進行の形式は一定の法則を以て律するを得ず、不規則的進行をなすものなり、何となれば疲勞は筋肉の働が單に其組織の力の減少するによるのみならず、副産物として或る毒物の存在するが爲に疲勞現象を起すものなり、吾人の心的行動に於て、疲勞現象の生ずるは、單に作業能率の低下のみならず、或る他の副産物、例へば退屈、睡、頭痛等作業の結果として生ずる諸種の影響によりて妨害せらるゝが爲なり、斯の如き禁止作用は不規則に現はれ、從て疲勞現象は必ずしも遂行されたる作業に一定の關係を保ちて起るものにあらざるが故に、疲勞進行の形式は不規則的なりと、之の説はツルンダイクも主張する所なり。

一、肉體作業の疲勞進路。之より諸家の行ひたる、疲勞進行の形式に關する研究を見るに、先づクロネツケル Kroncker は蛙の筋肉により、種々の實驗を行ひ其結果より等しき強さの強き感應電流によりて一定の隔りたる間隔に於て收縮する筋肉の疲勞曲線は直線を以て表はさるゝと稱し、即ち一八七一年に於て直線説を發表せり。然るに是より先きランケ Lanke マーレー Murey 等が種々研究し、後ポツディツチ



Bowditch (一八七一)がトウレットベ Tripple と名命し、之を發表したる現象あり、此説の云ふ所は、單一筋の作業線は直斜線的にあらずして最初の段階に於ては漸次階段的に上昇し、然る後下降するの現象なりと云へり、蓋しトウレットベとは階段の意味なり。此最初の段階的現象に關する原因に二説ありて、一は消耗作用の行はるゝ際筋肉中に生ずる化學的物質の影響なりと云ひ、他の説は活動の結果生ずる熱の影響なりとす。Waller は前説に左祖し、「疲勞物質の少量に産出する時は、却て被刺戟性を増加するものなり」と云へり、而して又筋肉的動作のみならず知的作業に於ても此階段的現象は現はると、此階段的現象の研究は此外テイゲル Tipler 其他多くの學者によりて研究せられたる問題なり。以上の單一筋の電流刺戟による研究と異りて、モツソニー Mowson は意志的動作につきて研究を行へり。之が實驗的研究の方法を見るに、氏自身の工夫に關はる、エルゴグラフ Ergograph と稱する器械によりて、中指の屈筋の作業線を描かしめ、二個の一般的なる標式を發見し、之を個人的特徴を表示する不變的標式なりとせり、之の説に左祖し同じくエルゴグラフにて實驗的研究をなせるレーマン Lohmann (一九〇一)は、更に知的作業に關

しても疲勞進行の法則は適用せらるゝと唱へたり。斯の如くして其後次第に疲勞進行に關する経路は研究されて、此方面の實驗は最近著しく發達したり。然らば疲勞進行は如何なる形式を以て進行するか、諸種の實驗並に諸家の研究より之を綜合せば、先づ之を外部的意志動作に於ける速度によつて之を見るに、作業時間が等差級數を以て増加せば能率は等比級數を以て増加す、而して力量に於ても又同様の結果を得るなり。今時間の経過を現はすに T を以てし、E を以て能率を現はすとせば、次の如く之を表示することを得べし。

$$T = aT^n \dots aT^n$$

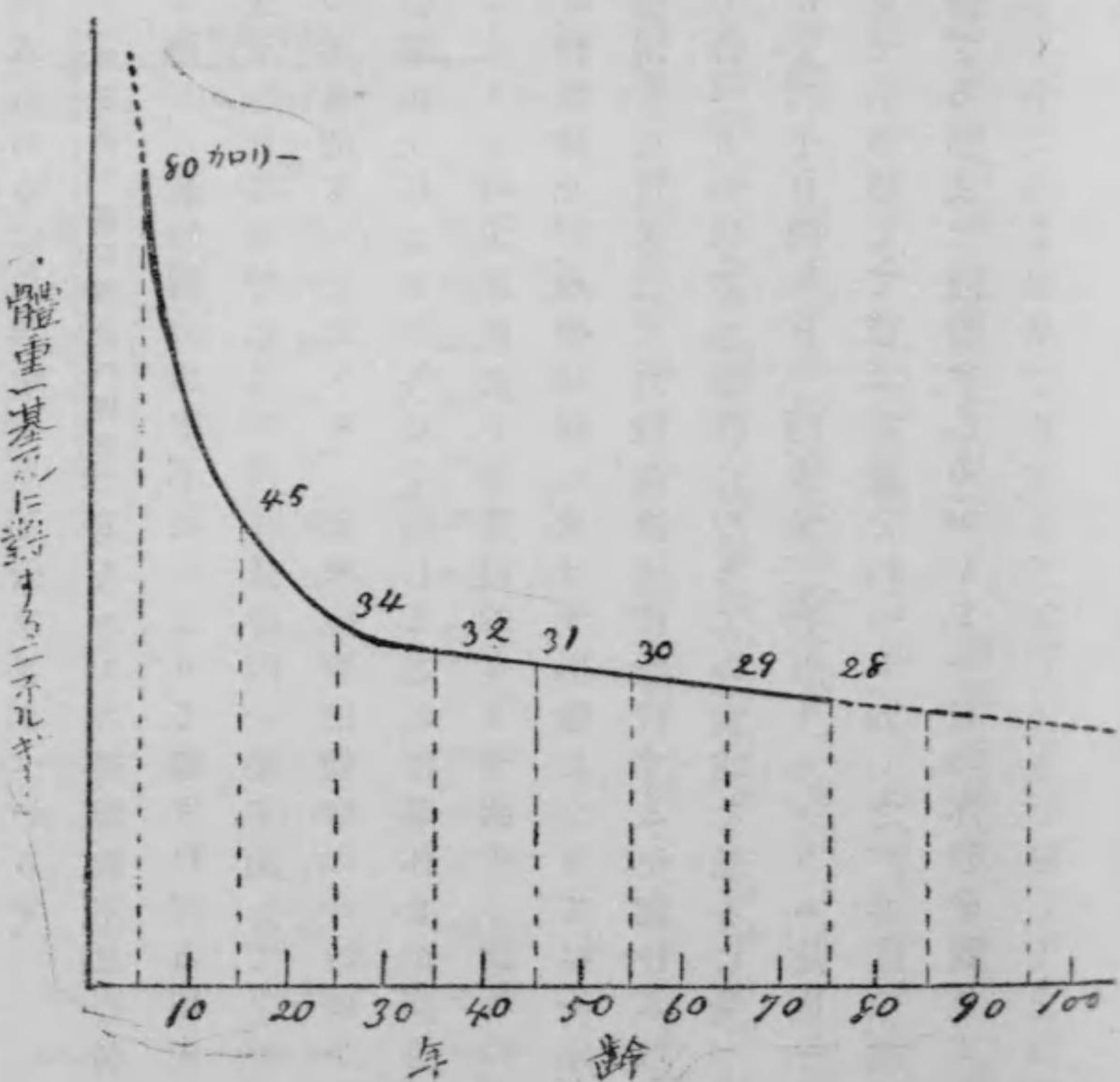
$$E = EK \dots EK^{n-1}$$

一般的に表はせば即ち右の如し。而して K は恒常數を表はし、常に一より小なる値を有す。即ち時間が倍となるや能率は E の値に K を乗じたるもの、時間が三倍となるや、能率は  $(EK) \times K = EK^2$  となり、斯の如くして n 時間の後に、到りては能率は  $EK^n$  となるなり。

二、知能作業の疲勞進路。次に知能作業に關する疲勞進行の形式は如何に、之



も亦種々の實驗の下に或は加算作業に、或は翻譯作業に、又は色名唱呼、形名唱呼等短きは一分に足らざる實驗より長きは一時間或は數時間、數日の實驗あり、之が能率に影響し之を變化せしむるに、又一一定の法則に支配され、能率變化の状態を一の曲線にて表現せば、其進行の形式は一の對數曲線なり。而して一定の期間は一定の比率を以て減退す。故に之を一定期間につきて見れば、減退度は初めは急速にして後には緩徐たり。然も更に作動を繼續せば、更に一層大なる比率を以て減退するものゝ如し。然して、此規則正しき進路を變化せしむるは初頭努力、終末努力等の意志緊張の度の變化なり。此法則も亦人生に於けるエネルギー減退の状態にも見らるゝ所にして、先づ二十四時間内に産出せらるゝエネルギーの分量を、年齢に對せしめたるを圖を以て示さば、即ち次の如し。横線は年齢を示し、縦線は體重一キログラムに對するエネルギーの分量を熱量を以て示したるものなり。之に由りて見る時は、五歳の時は、八〇カロリとなり、十五歳の時は四五カロリに減じ、二十五歳にては三四カロリとなり、以下僅少の減少を以て七十五歳に至る、五歳以前及七十五歳以後は假想線なり。五歳よりも十五歳の時のエネルギーの



體重一キログラムに對するエネルギー

第參編 對我論 第貳章 心力

絶體分量は増加するも相對的には減少するものなり、然しながら此七十五歳以後に於ける假想線が此の如く進行するや、或はエネルギーグラフに於けるが如く更に大なる率を以て減退するものなるや、斷定を下すことは早計に失するが故に斷定すること能はず、されど此圖を見る時は、之が一種の對數曲線にして前掲の一般式にて示したる疲勞の進路と同一



形式にあるは又興味ありと云はざるべからず。

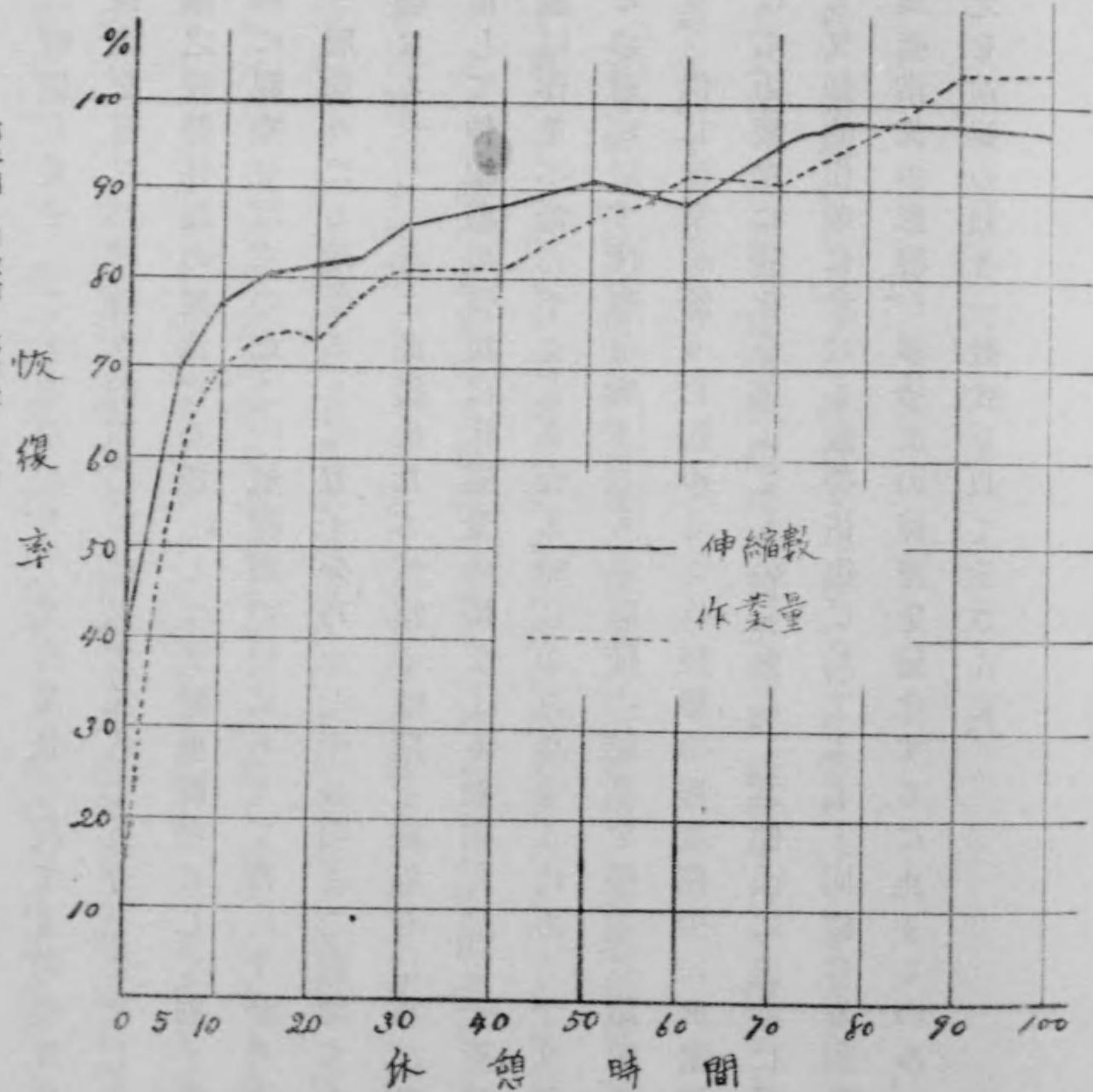
第三節 疲勞恢復の経過

英人スミスは、睡眠不足の場合に於ける疲勞恢復の研究に關し、數時間の睡眠不足によりて起されたる損失は、之を恢復し平常の状態に至らしむるまでには非常に長時間を要す、而して之が恢復の経過は、徐々にして、且つ不規則なり」と云へり。元來、疲勞は能率の一時的下降的現象にして、之が恢復は作業休止によるの外なく、然して之の作業休止が疲勞を恢復せしむる経過は、果してスミスの云ふが如く不規則的なりや否や。諸種の實驗並に研究の結果によれば、作業休止が、疲勞恢復に及ぼす影響につきては一定の法則あるものゝ如く、之が法則も全體として對數曲線的に進行するを認むるなり。今、田中博士が之に關して行へる、外部意志動作につきての實驗を見るに、先づ實驗方法は、エルゴグラフにて、三十日間毎日一回重量三七五キログラム、速度一分間に三十回にて、十分練習をせしめ、然して後本實驗を行へり、即ち之が要領は被験者が全く伸縮運動をなし得ざる點まで疲勞せしめ、かくて一定の休憩を置いて、更に第二回の伸縮運動を同じく全く作業出來ざる處までなして止む、然して之の間に於て一定の休憩時間は

長さ最短三十秒より、最長一〇〇分乃至一一〇分に至る、而して各休憩時間につきて各々四回宛の實驗を行へり。其順序は次の如き二系列を二回繰り返すものとす、第一系列最短の休憩時間より初め、毎日に休憩時間を長くす、第二系列最長の休憩時間より漸次休憩時間を短縮す、第三系列は第一系列と同様第四系列は第二系列と同様此の如き實驗の結果は左表の如し、伸縮數%は休憩前の伸縮數に對する休憩後の伸縮數の百分比なり、作業量に於ても同様方法による平均は被験二人の平均なり。

被験者T	作業量%	
	被験者F	平均
14,14	16,30	15,26
20,56	21,09	20,83
34,75	37,77	36,26
44,87	46,42	45,65
62,70	62,88	62,79
72,24	67,52	69,88
77,38	70,09	73,74
76,84	70,76	73,80
80,91	76,22	78,57
81,73	79,77	80,75
82,42	78,49	80,46
85,52	85,16	85,34
89,75	93,37	91,57
91,08	90,88	90,98
98,03	96,48	97,26
101,30	100,94	101,12
100,04	102,98	101,51
104,19		





此表に見る如く、伸縮數に於ける恢復率は、作業量より早きを見るも、何れにせよ共に一種の對數曲線なるは同様なり、尙之につきて見るが如く、平均に於て二分の休憩に於て恢復せる伸縮數の%は五四%なり。然らば残りの約五〇%は之を恢復するに大凡百分

右の表を圖にて表はせば次の如し。

(休憩時間)	伸縮數%		
	被験者T	被験者F	平均
30秒	31,35	40,23	35,82
1分	43,47	48,84	46,16
2	50,05	58,45	54,30
3	45,00	64,94	59,47
5	61,81	74,62	68,22
10	77,86	73,69	75,78
15	83,33	77,69	80,29
20	83,94	77,24	80,25
25	75,70	76,56	80,93
30	84,89	86,15	85,88
40	92,72	89,86	88,17
50	94,29	83,62	90,60
60	90,06	87,02	89,36
70	96,99	88,66	94,42
80	102,62	91,85	97,12
90	96,69	99,40	98,05
100	95,33	99,18	97,27
110	106,27		



の時間を要せしこと明白なり。又作業量に於ても同様五分に於て既に六三%の恢復を見れば、残り約四〇%は又大凡八十五分を要せしことを證すべし。由是觀之、疲勞恢復の經路は全體として對數曲線的にして、初め急速に後緩徐たり、尙仔細に觀察せば右の如き一般經路の中にありて、特に十分乃至十五分の休憩の後に一層徐々たる現象ありて五十分乃至七十分頃まで繼續す、之恐らく興奮消失の影響なるべし。次に此緩徐たる恢復の時間を經過せば、再び稍々急速なる恢復あり而して伸縮數の恢復は作業量の恢復より、初期に於て一層速かなり。右の如き現象は、作業不能に至らしめたる時にのみ生ずるにあらず、又作業不能に至らしめざる以前に於て、休憩を興ふるも亦同様の結果を得るは、諸家の實驗に徴して明かなり。但し作業が餘りに短少せられ疲勞の程度僅少に興奮消失の影響又小なる時は、右の經路に變化を興ふるものゝ如し。其他或は速度に於ける疲勞恢復に於ても、又知的作業に於ける疲勞恢復に於ても右と同様なる對數曲線を以て進行す、只興奮消失の影響が多少、其の經路を變化するに止まるのみ。之を前述の如き一般式を以て示さんに、

$T = \frac{1}{K} \left( \frac{1}{1 - e^{-Kt}} \right)$

$E = KE \cdot EN^2 \dots EN^{(n-1)}$

但し此場合にありて注意すべきは、 $K$ は常に一より大なる値を有する正數なることと是なり。即ち疲勞恢復は時間が等差級數を以て増加せば、疲勞恢復率は等比級數を示すを見るべし。

第四節 作業程度と疲勞恢復

勢力の消耗、並に疲勞物質の蓄積によりて疲勞現象

を發生せしめ、之が填補恢復には休憩の必要なることは前述せる所なり。嘗てモツソ一は、既に疲勞せる筋肉によりて行はれたる作業は、正常の状態に於て行ふ一層困難なる作業よりも有害なる影響を興ふと言へり。然らば如何なる程度の作業に對しては、幾何の休憩を興ふれば之が完全に填補し得るや、一般には作業時間に正比したる休憩時間を必要とするが如く考へらるゝも、之は正當なる考察にあらず。モツソ一の弟子にマツジヨラありて、エルゴグラフにつき、屈伸作業と之より生ずる疲勞を恢復するに要する時間との關係につきて行ひたる實驗の結果によるに、先づ作業不能に至るまで連續的作業をなし、之を全く舊の如く恢復



るにす要する時間は、二時間を要したり。然るに若し、作業即ち伸縮數を半分にて止むれば、之を全く舊の如く恢復するには三十分にて十分恢復するを見る。即ち二倍の作業時間によりて得たる疲勞は之を恢復するに四倍の休憩時間を要するなり。之より亦前掲の如き一般的標式にて言ひ現はさば、

$$\frac{N}{n} = \frac{2N}{2n} \dots \frac{nN}{n^2} \dots \frac{1}{n}$$

Kは一より大なる正數にして、例せば2と云ふ値を有するが如き之なり。又伸縮數に作業時間「T」を置換へるも亦同様なり。

$$\frac{T}{t} = \frac{2T}{2t} \dots \frac{nT}{n^2} \dots \frac{1}{n}$$

斯の如く作業時間が等差級數を以て増加せば、恢復に要する休憩時間は等比級數を以て増加せしめざるべからず。此作業が常に力量のみならず速度其他の作業に於ても同様右の法則に支配せらるゝなり。

第五節 疲勞と作業關係

作業を速く良くなさんとするには疲勞現象の現はれざ

る時に於て爲さざるべからず。疲勞現象の表はれたる場合にありては、一般に作業分量は緩徐に、且其性質は劣惡となるべし。疲勞の影響は分量上にも、亦性質上にも相伴ひて作業上に變化を及ぼし、「遅く悪くなるを普通」とす。斯の如き實例は吾人の日常の觀察に於ても見る所にして、吾々が長時間連續的に原稿を書く時、作業の初めと終りとを比較せば、文字の大いさ、及明瞭の度に大なる變化あるを認むべし。かく文字が終りに至りて大になり、且其明瞭の度を減するは、疲勞の現象によりて、筋肉の調節が良好に行かざるに結果し、又脱字誤字の數を増加するに至るは、是即ち注意の集中が困難となりしを立證するものなり。斯の如き作業にありては疲勞現象の爲め誤謬なり、或は文字が劣惡となるに止まり、身體上には何等の傷害を來すことなし、然るに大なる機械が急速度を以て回轉し或は反應を生ずる化學的藥品を取扱ふ工場内等に於て、若し之に従事する作業員にして疲勞現象の爲め、筋肉の調節が良好ならざるが如き、或は注意力集中に困難を來すが如き場合に於ては、其蒙る損失又は災害も實に甚大なり、實に工場管理者の考慮を要すべき重大事項の一なり。



一、疲勞影響 以上の如く疲勞現象は分量に於ても又性質に於ても非常に大影響を及ぼすも中には個人差の如何によりて、「疲勞中毒」と稱する現象を起し、性質を犠牲に供し、而して不規則なる作業を分量多く營むが如き、特殊なる現象を呈することあり。されど作業の分量よりも寧ろ性質を以て、之が疲勞の指數となすは適當なりとす。而して以上の如き例外はあれども一般に分量大なる場合は性質も良好に常に正比を表はすべし、今伊太利に於けるピラニ教授が熟練したる四人の活版組工につきて、午前八時より午後五時に至る間の能率變化を調査したる結果を見れば、之を明にせり。即ち作業速度と誤謬數は反比例せり。

百分比	誤植の平均
13.75	17.00
17.02	10.60
15.06	18.28
14.08	28.00
16.17	5.50
13.42	22.60
10.47	30.00

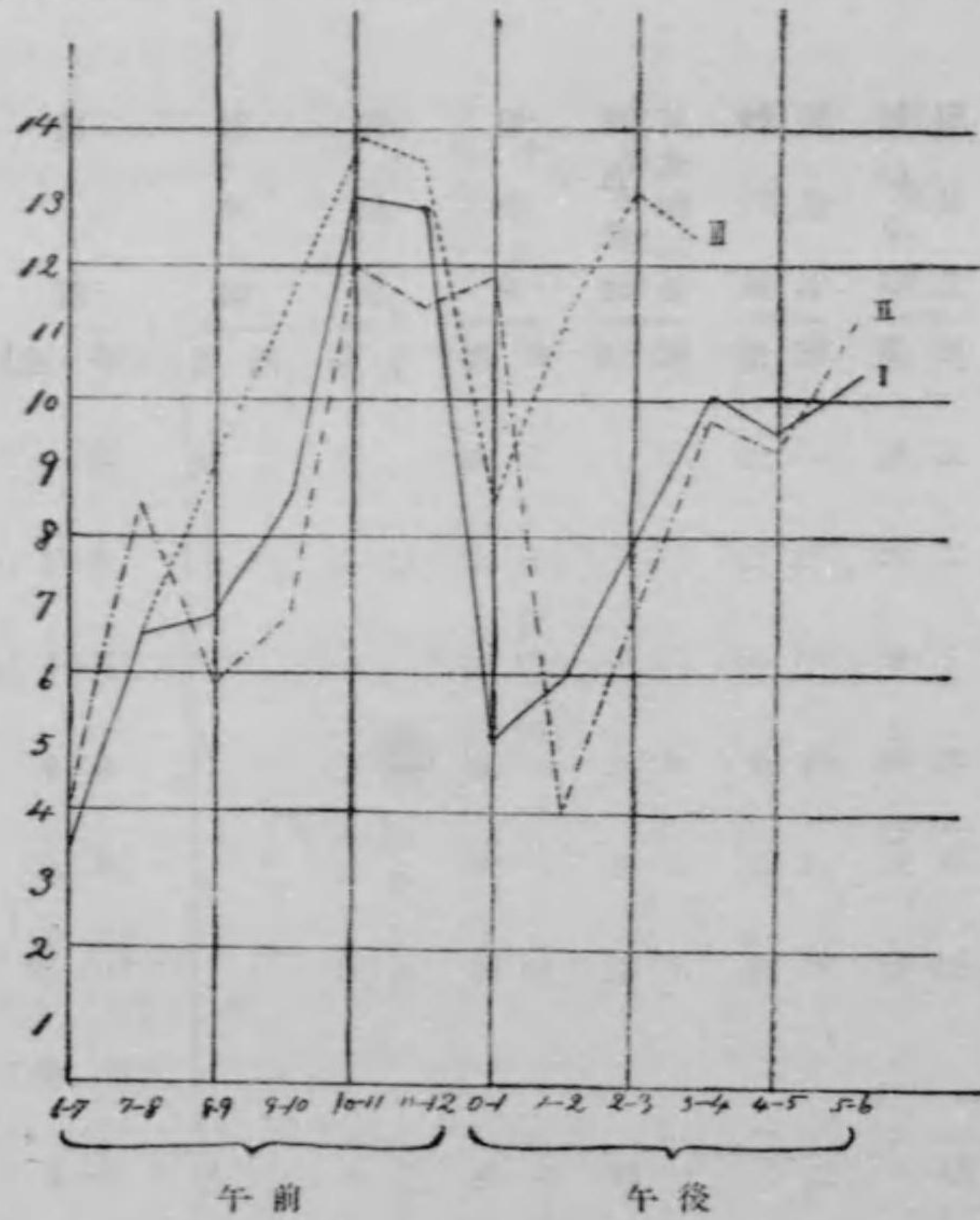
又レーマンが、フリードリッヒの行ひたる兒童に關する計算作業の實驗の結果にを整理し、次の如き興味ある結果を發表せり。其によれば、左表の如く大凡 $\frac{1}{4}$ の率を以て増加するを示せり。即ち作業時間が等差級數に増加せば、誤算數は等比級數を以て増加するを見るべし。但し後方に於ては、疲勞以外の他の影響ありて、多少動搖はあ

時間	組上行數平均
8—9	21
9—10	26
10—11	23
11—12	21.5
12—2 (休憩及食事)	
2—3	24.7
3—4	20.5
4—5	16.0

れど右の如き現象の由つて起る處は即ち疲勞に由るものなり。斯の如く症勞の影響は諸種の方面に惡結果を齎らし、不測の災害を生せしむる原因となるものなり。夫の歐洲の大戦勃發してより、生産工業其他の事情によりて、國民は工場動員を受け、労働時間の如きも亦長時間を必要とするに至り、其の結果過勞の爲に多くの落伍者を出したる事あり。之を國家濟上に見るも實に傷害疲勞による經濟上の浪費は、病氣による浪費よりも尙遙かに大なるを知るべし。即ち疲勞せるものは所謂病人と比較して其數甚だ多し、されど疲勞は其結果として病人の如く能力を全く働かし得ざるにあらざるも、疲勞の結果より生ずる能率の損傷は或る場合は案外恐るべき病氣或は災害の誘因たればなり。

二、疲勞と災害 一八八四年獨逸に國民災害救濟制度設定せられ、一八八七の労働日に於ける災害の最も多かりし時間を調査せし結果によれば、午前十時より十





之を圖にて示さば。

右の表に於いては、各時間に於ける就業人員を示さざれど、大體に於て時間の進むにつれ災害出現の数を増大し晝食及其後の休憩時間が之の一般的傾向を變化せしむるを見るべし。此一般的傾向は、即ち作業を連續的に行ふ爲に生ずる疲勞の結果なり。之より我國に於る災害と死傷との時刻別調査によれば、大正八年九月農商務省に於て發表したる統計に於て。

二時、午後三時より六時に至る時間は最も多數を示せり。又英國及米國に於ても斯の如き統計の結果を發表せり、左に之を掲げん表中百分比とあるは當該表中の災害出現總數に對する比なり。

I 獨逸全國工場に於ける災害數			
日 時	災害數	百分比	
午前	6-7	435	3.51
	7-8	794	6.41
	8-9	815	6.57
	9-10	1,069	8.63
	10-11	1,598	12.88
	11-12	1,590	12.82
午後	12-1	587	4.73
	1-2	745	6.00
	2-3	1,037	8.36
	3-4	1,243	10.01
	4-5	1,178	9.59
	5-6	1,305	10.53
II 英國ランカツシャー綿絲工場に於ける 災害數(1908)			
日 時	災害數	百分比	
午前	6-7	240	4.33
	7-8	457	4.24
	8,30-9	316	5.69
	9-10	372	6.71
	10-11	665	11.99
	11-12	623	11.24
午後	12-12,30	651	11.74
	1,30-2	222	4.00
	2-3	335	6.04
	3-4	536	9.67
	4-5	512	9.24
	5-5,30	615	11.09
III 米國イリノイ州マンチエスター工場に於ける 災害數 (1911-1913)			
日 時	災害數	百分比	
午前	7-7,59	695	6.49
	8-8,59	970	9.06
	9-9,59	1,275	11.90
	10-10,59	1,485	13.86
	11-11,59	1,438	13.43
午後	1-1,59	886	8.27
	2-2,59	1,253	11.70
	3-3,59	1,382	12.90
	4-4,59	1,327	12.39











七、例せば作業者が自己の足上に砲彈を落し、それによつて災害を蒙りたるが如く、被害者自身が原因となりて其取扱ふ物質に異常な作用ありて災害を起す場合即ち之なり。

右の場合を通覽せば、Aに屬するものにおいては人的要素は加味せられざるも、B及Cに於て漸次加味せらるが故に、右五、六、七に屬すべき災害は之を作業者の作業力の減退によると見るも可ならん。右の如き條件を前提として、一九一五年中に

災害の分類	出現數	百分比
1	11	5.4%
2	14	6.8%
3	9	4.4%
4	7	3.4%
5	35	17.1%
6	23	11.2%
7	15	7.3%
8	71	34.5%
9	47	22.8%
合計	204	100%

於て英國の或る兵器工場の災害二〇四件を前記七種の段階に該當せしめ、之を分類せば即ち次表の如し。表中百分比とは、災害二〇四に對する各段階に於ける出現數の百分比なり。此表によれば、第六及第七に該當すべきもの、非常に大なるを見るべし。即ち全體の約六割を占む、次に英國ランカツシヤに於ける紡績工場を取扱ふに次の如し。此表中第一と第二とに屬せしむべきもの六、何れの一とも言ひ得ざるも、第一より第四に至る中に包含せらるべきもの七八、第四に屬するもの九十七、故に一より四までの總計一

災害の分類	出現數	百分比
1	6	17%
2	78	17%
3	97	83%
4	888	83%
5		
6		
合計	1063	100%

八一、次に第五と第六とに含有せらるるもの八八八なり、第七に屬すべきものなきは、紡績工場に於て作業の性質上當然の事と云ふべし。米國イリノイズに於て起りし、災害數二六六六につきて調査したる、ボガーガス Bogardus も次の發表をなせり。全災害總數二六六六の中四六三は不可抗力によるもの、残り二二〇六は、作業者が注意により免れ得たる災害なりと、即ち全數の八二・五%が之に該當すべし。尙一九一一年、同所監督委員會に於て調査したる一一四三件の災害中九〇%は疲勞の原因にして、少しも疲勞現象の關係なきは七%に過ぎざるを明にせり。

三、過勞の弊害 以上は作業者の疲勞に結果して起りたる災害なるが、之を生理的見地より見る時は、些少なる筋肉の疲勞が其程度を越ゆる時、筋に一種の痛みを感じ、尙高度の疲勞に於ては電流の刺激すらも、筋に反應せざるか如き状態となる。斯の如き状態とならんか、其筋の痛は數日間消失せざるのみならず、其附近にも故障を生じ、大なる範圍に於て作業不可能となるに至る。又強度なる活動の作業に従事する者等は、心臟擴張を起すこと尠から



す、即ち心筋の疲勞に心臓勞作の高潮を來し、心筋は之が伸び且つ弛みて、容易に舊形に復することを得ざるに至る。されど斯の如き現象は長時間の休憩によりて回復するを原則とするも、之が擴張の度大に、且つ屢々擴張を起さば終には心臓虛弱を誘發し病的に心臓の肥大を喚起し、延いては心筋の變性或は心臓辨膜の故障を來し其作業中に卒死の不幸を見るに至るべし。尙或作業に連續的に從事し過勞を起さば之が現象として次の如き徵候を來す。1 作業の繼續を忌み。2 感情亢奮して怒り易く。3 全身倦怠、打撲感、脱力感、睡眠障害を來し。4 脈膊は小に且つ頻數となり。5 體溫屢々三十八度以上に昇り、時として四十一度に達す。6 食欲は缺損し翌日になるも四肢重く打たれたるが如き感あり。輕度の疲勞は生理的に必要にして、且つ前述の法則のごとく短時間の休憩にて之を恢復し得るも、過勞にありては一種の病的現象となり、潜伏せる結核を能動性のものとなし、肺炎丹毒等に冒され易くなり、僅少の傷も治癒し難く、輕き病に罹るも又重くなることあり。斯くの如き過勞現象を起さば、翌日十分なる休養を取らざれば身體は細菌の繁殖に適せしむるは勿論、過勞したる又死後其屍が硬直に陥ること速かなりとの

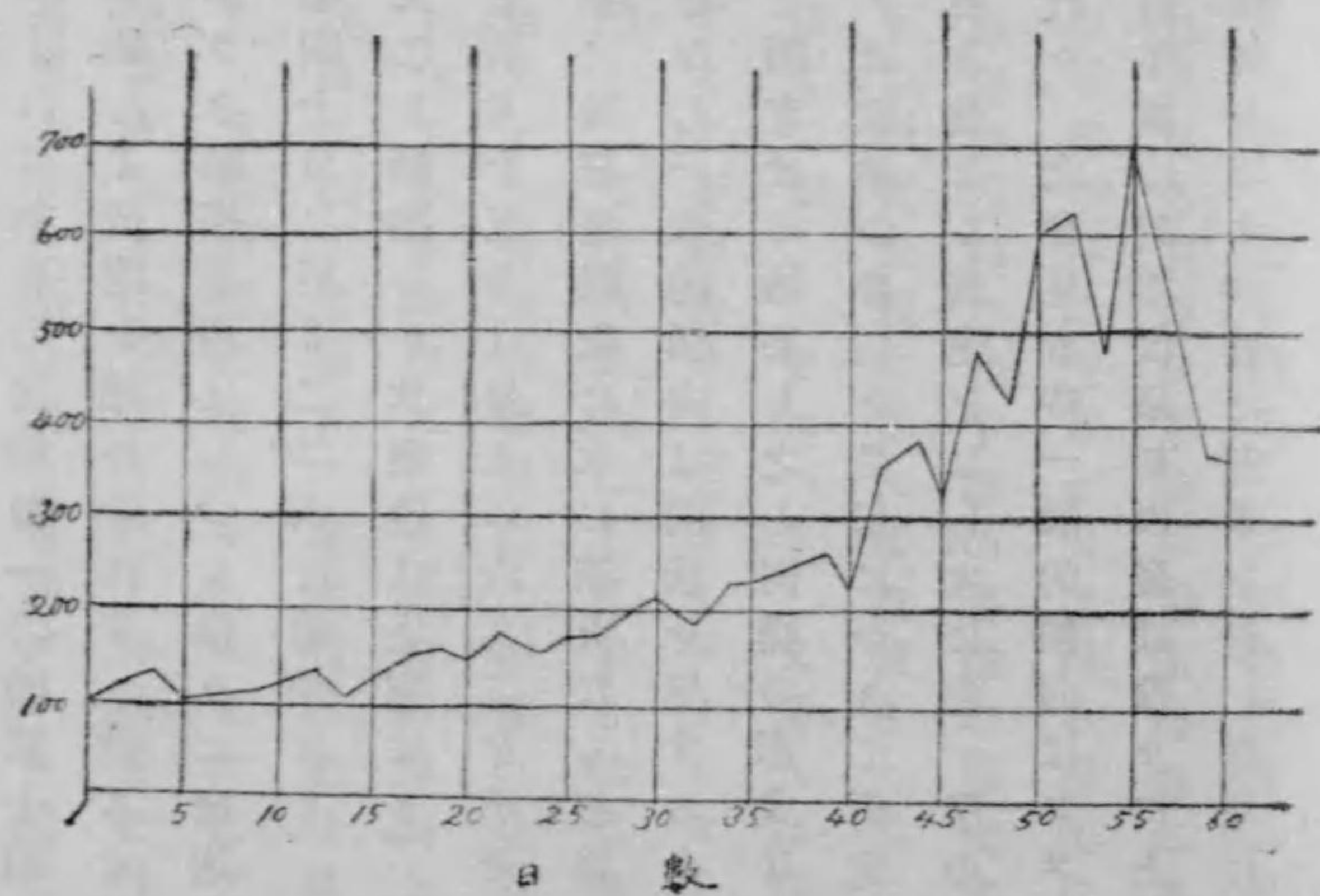
り。斯の如き疲勞過度の現象を貧困或は特殊の事情の爲に、十分なる休養を攝ること能はざる場合にありては、疲勞の恢復が十分に行はれず、次の如き徵候の表はるゝことあり。1 全身倦怠、無力。2 貧血。3 消化不良。4 筋の弛緩、及容積減少。5 體重減少。6 精神憂鬱等にして一般生活力の減退を來し、精神病素質あるものは精神病を發し、又身體の抵抗力なきが故病魔の襲ふ所となる。以上の如く疲勞の影響は常に作業能率上のみならず、精神及身體上にも亦多大の影響あるものなり。由是觀之、疲勞による災害の豫防に、機械は勿論一般設備に危険なき設計をなすは必要なれども、より一層必要なるは其の環境に應じ、適當なる反應をなし得る様心理的原因を除去するにあり。即ち作業者をして過勞に陥らしめざるを緊要とす、而して過勞防止は作業者の生活によりても災害防止の點に於ても、又能率増進より云ふも延いては國家經濟及人道よりするも、總ゆる方面に於て最も重大なる條件なり。然らば過勞防止は如何にして得らるゝや之に對して内外の諸條件を列擧して答へざるべからざるも最も重要なるは作業時間の短縮、休憩時間の分配、作業時律の加減等はなり。



第三 習練

第一節 練習の性質

能率増進に必要な根本問題の一として心的行動に於ける生命的條件の内疲勞につきて述べたるが此の外、生理的條件の中に疲勞とは反對の現象に練習あり。元來人間は其性能として經驗により學習し得るものなり、例せば吾人が若し小兒に火を近附けしむれば小兒は喜びて之を掴まんとす、然るに一度火傷を蒙りたる小兒には火を近附くるも、之を掴まんとせざるのみならず手を引込ますに至る、是全く經驗によりて習得したるものにして、火なる刺戟に對し、之を掴む反應は弱められ、手を引込む反應の強められたる結果なり。即ち人間は愉快なる精神状態を起す如き刺戟は之を永續せんことを欲し、不快は之を避けんが爲め色々な運動を試むるものなり。かくて吾人の雜多なる運動中より、或種の運動のみ選はれ、愉快を與へるが如き反應は反覆以て益々強固たらしめ、不快を與へるが如き反應は可能的に之を抑制するが爲めに漸次弱めらるゝものなり。斯の如く刺戟と反應との結合は、二方面よりなざるゝものなり。然して此一定の聯合の形成を目的として或作動を有意的に反覆する時、之を練習と稱す。之



第參編 對我論 第貳章 心力

も亦疲勞の場合に於けるが如き一定の經路を取りて練習効果が現はるゝや、即ち練習効果線進行の形式を研究せん、之が研究に従事したる最初の研究者としてフエヒネルは、兩手に各九五ポンドの重量を有する鉛製の亞鈴各々一個宛を持ちて、約二秒間毎に垂直に垂れたる位置より、之を頭上まで上げる上下運動を行ひ、六十日間練習したる結果を一の曲線にて示し、以て練習曲線 Dehnungskurve と命名せり。次に掲げた



右圖によれば、初日の運動數一〇四、第十四日に一〇八、此四日間にて多少の増減あるも、殆んど發達を認められず。然るに第十五日より第四十日の間に於ては比較的、小なき動搖を現はしつゝ、徐々に發達する時期なり。即ち第十五日は一二〇、之が第四十日に於て二二六に増加せり。最後に第四十一日より第六十日に至る間は、大なる動搖あり、其發達は急速なり。即ち第四十一日は二七八、第四十三日は四二三、第五十五日は最大の六九二を示せり。即ち之によりて見る時は全體として、最初に其發達輕微に、次に稍大なる發達を爲して、最後に急激なる發達をなす三段階をなし、一般的傾向は凹狀を呈するを見る。ロンバードがエルゴグラフにつきて研究せる結果も之と同様の形式なるを發表せり。然るにブライアンとハアターは、電信の發信を受信につきて研究の結果を公にし、先づ發信作業につきては最初急激なる發達をなし、次に尙一層の發達をなし、然して後は殆んど發達なきに至れり。之を見る時、一般的傾向はフエヒネルの曲線と反對に凸狀なり。然るに受信作業に於ては、最初の發は徐々に上昇し、次いで全く練習効果の停滯を見、尙繼續練習をなすや更に進歩を起し急激に上昇す。而して同人は此の停滯を高原

Plateau と稱し、之を研究し習慣の體統の説を立て、次の如き斷定を下せり。曰く「曲線に於ける高原は下級の習慣は既に其發達の最大限に近づきたるも、尙高級の習慣の形成のみに注意を向け得る程度に器械化されざるを示せるものにして、高原の時期の長短は此下級の習慣が器械化せられる困難の度を示すものなり」とスキフトの研究發表によれば、被験者六名に對する、球取りの練習を行ひて、其効果線は凹狀式なることを云へり。又同人は速記文字の練習に於て、効果線が直線的に上昇するとを發表せり、又タイプライターの練習を試み、一上一下律動的なる、而かも全體としては直線的に上昇する効果線を得たり。然して同人は右の三箇の練習の結果より、特殊の學習には、特殊の發達の形式あるを知り、高原は習慣の器械化の起りつゝある時期にして、練習の單調より來る感情の影響にて熱心の度を減退する時期にして被験者の身體的狀態は其發達に大なる影響を興へるものなりと曰へり。又其研究には種々あるも次にブックの行ひたる實驗の結果を見んに、二人の被験者にタイプライターの練習を行ひて、凸狀式効果線を得たり。而して一人は高原を有し、他は之を有せざりき、而して同人は其結論中次の如き事を云へり

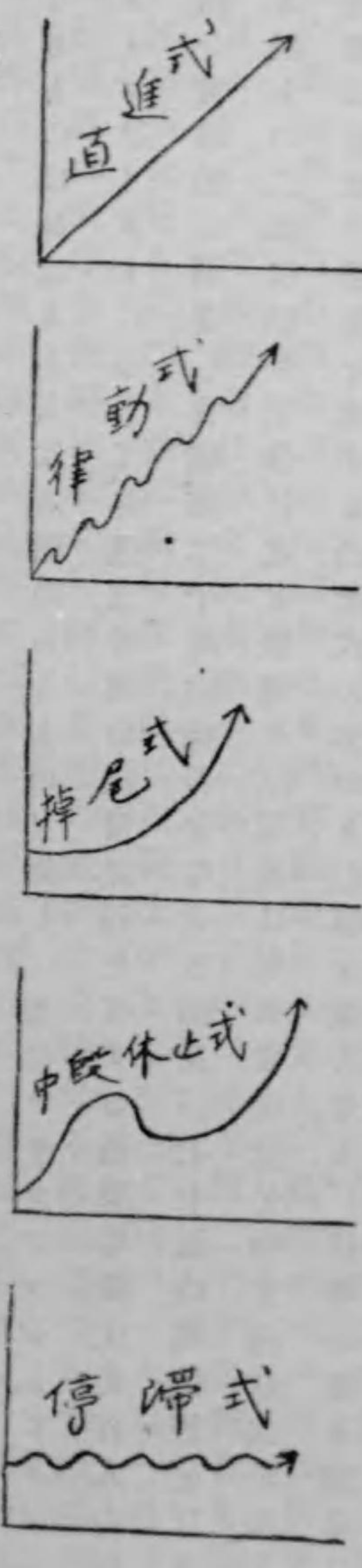


練習効果線の高原因は、熱心の度の減退によること多く、被験者は經濟的方法は無意識的に得らるゝこと、及タイプライターの練習に於ては作業に特殊なる精神物理的習慣及び作業に際し情調を適當に保持し、努力を經濟的に使用する手心を覺える二箇の習慣の形成せらるゝこと之なりと曰へり、次にソルンダイクの研究に依れば、二箇の三位數の乗算につきて、個人差の如何によりて、練習の効果を、一の法則に包括することを得ずとせり。而して又成人の被験者が短期の練習によりて著しき發達を見るには、一面には被教育の長き間繼續するを示し、他面には練習効果の轉移の現象の少なるを表現するものなりと云へり。此外其實験も赤數多く其著、學習の心理の内には種々なる研究發表をなせり。此外ウエルズの研究を見るに、二人の被験者につきて左右兩手に、毎日三十秒間宛五回三十日間練習を課し、其結果を見るに、二人共に最初は緩徐たる發達をなし、而して途中、一人は一時下降し、後更に大なる發達を示せり、而して此の最初の緩徐たる發達につきて、組織的にはあらざるも多少運動の速さにつきて日常練習あるが爲なりとせり。又加算數字の抹消作業につきて、男女各五名宛につきて三十日間練習せしめたる結果に

つきて、漸次發達の減少をなす凸狀式なることを立證せり。然して最初の能率大なるものは發達も亦大なる傾向あるものゝ如し。次にチャップマンとヒルズはタイプライターにつきて、毎週三時間の練習課程を有する商業學校生徒百人の成績を實驗的に調査し、實驗前二十時間練習をなせる組及び七十五時間練習をなせる組との二組に結果を分け、之を整理せば、前者は漸次發達量を増す凹狀式が多、後者は漸次發達量を減する、凸狀式の多かりし事を報告せり。打叩の如き簡單なる作業に於ては、被験者は短時間にて其作業に順應するが故に、初期の發達は加速度なれど、此期間は極めて短時間にて直ちに減速度的發達の方に移り、遂に生理的極點に到達す。斯の如く減速度的發達、即ち練習効果線に於ける、一般的形式は、此凸狀式と見るべきものなり。然して幼兒につきて練習を課する場合に於ては成人と同一なる経路を取るものなりと豫期すること能はず、而して其發達は益々増大し來たるものなり、蓋し或る作用の練習によりて得たる總ての習慣は、又之を次の他の習慣を得る便法たるが故なり。かくて加速度的曲線、即ち凸狀式曲線が得らるゝなり、然しながら尙其の運動を繼續せば、之が減速度的曲線と所を變へ遂に



は生理的極點に達す。之によりて見る時は練習効果線は次の如き四箇の部より形成せらるべし。(一)加速度なる發達の部分。(二)加速度零となりて直線的なる發達の部分。(三)減速度なる發達の部分。(四)發達停止の部分。以上の如きは前記實驗家の提言せる所にして實に從來の人々の氣付かざる點に着眼せしは能率研究に貢獻する所多し。パットソンは最も困難なる高原の原因に關し、次の如き實驗の結果を發表せり。學習に於ける高原は、學習せらるゝ作用中に含有せらるゝ要素及注意の分配に基くものにして、簡單なる作業に於ては之を認めず、粗雜なる場合に於ても其現はるゝ場合と然らざる場合とありと曰へり。此外ビイタスン、モイ



マン、レーマン等の研究もあり、皆多少の貢獻する所あり。然して我國に於ても松

本博士は練習効果線の標式を直進式、律動引、掉尾引、中段休止式、停滯式の五種となせり即ち前表の如し

右の如く五種に區別したるも、其後大正五年更に此様式に改正を加へ、上昇式、中段休止式、掉尾式、停滯式、下降式の五種となし、其中にて上昇式は之を三に區別し、凸狀式、直行式、凹狀式となせり。以上の中にて上昇式最も屢々現はれ就中凸狀式最數多し、次に中段休止式、掉尾式も相當の出現數ありと云へり。又檜崎淺太郎學士は之が實驗をエルゴグラフに求め、其結果フエヒネルコムバアの得たる凹狀式曲線と其本質に於て全然同一なる結果を得たり。而して、其發達率は、個人によりて差異あり、年齢十五歳のものとは二十六歳のものよりも著しく優れりと、又握力の練習に於て四十九人の被験者につき次の如き事を曰へり、發達の過程は各個人何れも同一にはあらざるも、其副次的要素を省略し、本質につき整理せば數種の標式に歸着せしめ得るとして直行狀、律動狀、掉尾狀、中段休止狀及、動搖不進狀の五種の標式を立てたり。又所謂豆拾ひの動作、即ち用箸運動に於て其の結果を整理し、直行式、律動式、此中更に、鋸齒狀、段階狀、波動狀の三つに區別す、凸狀對數線式、掉尾式、中段休



止式の五種とし、加算作業に於ては之に拋物線的、直行的、中段休止、掉尾の四箇の標式に區別せり。又千輪文學士は小學兒童につきて、映鏡描寫法 *Mirror drawing* の練習作業をなさしめ、對數曲線の効果線を得たり。又田中博士が電鍵の打叩の實驗に於て、得たる結果によれば最初は殆んど進歩なく、却つて下降の形勢を示し、次に直線的に急激に發達し、然る後漸次減少し、再び上昇し、最大限度に達し此頂點より又下降の形勢を示す曲線を得たりと、然して此曲線は、フエヒネル及び、檜崎學士等の認むるが如き多くの練習効果線に現はるゝ現象と同じく全體は凹狀を呈したる掉尾式なりと曰へり。又力量に關してエルゴグラフにより六人の被験者につきて實驗したる成績によれば、六人共に、毎日動搖はありて甚だ不規則的なれども、其中一人を除きては何れの曲線に於ても、初期に發達緩徐にして、後に至りて急激の進歩を示す點は同様なり、然して此曲線中小動搖を除きて考察せば五人は凹狀上昇式又は掉尾式なり、然して他の一人の曲線は凸狀形よりも寧ろ直行的にして實驗の結果一の凸狀式も現はれずと曰へり。又握力に於て中學四年生十四名には毎日十五回宛三十日間の練習の結果、上昇的のもの九、停滯式のもの四、下降式

のもの一にして上昇的のものには、中段休止式最も多數を占め、直行的、及凸狀的のものは殆んど之を認めずと曰へり。尙知的作業につきては諸種の實驗の結果より各個人絶體の速度は最初より異なるも、それが發達の標式を見る時は、凡て最初に著しき發達ありて、次に發達の停止或は退歩の時期あり、然して更に多少の進歩を示すものなり。かくて之が全體の進路は動搖ある凸狀上昇式なり。又置換作業に於ても、右と殆んど同様なる結果を得、凸狀上昇式最も多數に現はれたり。加算作業に於ても亦殆んど同様凸狀上昇式を現はし、中には中段休止式もあり、又實驗條件として、練習と練習との間隔時間大なる場合、若しくは練習時間の短時間なる場合は直行式凹狀式又は中段休止式が優勢にして停滯式さへ現はすに至ると曰へり。以上諸家の實驗並に研究を綜合し、フエヒネルの扛舉運動、スキフトの球取運動、ウエルズの打叩、バットメンの球取動作、檜崎學士のエルゴグラフ、松本博士の速度及び力量に關する實驗等より見て、外部的意志動作に於ける練習効果線は速度に於ても亦力量に於ても、凹狀式を主とし、而して練習條件の變化は効果線に影響し種々なる標式を現はふものなり、併して又知的作業に於ては凸狀式を以て



之を代表せしめ得べし。されど之も亦一般的傾向に過ぎずして、練習條件の如何によりて、多人數の間に種々なる標式の現はるゝものにして、唯一つの型に之を歸着せしむるは不可能事なり、要するに上昇式、停滯式、下降式、の三様あるものとし、上昇式中、凸狀、凹狀、直行、中段休止、掉尾の五種に細別するを可とすべし。

第二節 練習の効果積極的波及

一ツの練習効果は、之が他の作動に其効果を波及するや否やは、能率問題に關し重要な問題にして、即ち從來行ひ來れる作業法を改良し、或は新しき機械を使用する上に、又或は組織を變更する上に必要なる研究事項なり。然して此一個の行動に於ける練習効果が、他の行動に波及する所を見るに、能率を促進する効ある場合と、之に反し却て練習の効果あるが爲に、能率を減退せしむる場合との、積極的並に消極的なる兩方面の波及あり。

一、練習効果積極的波及

(イ)手に關する實驗、フォルクマン Volkman が左手に於ける觸覺の辨別作用を練習し、其辨別閾をしりメートルを單位とし、二三・六より一一・二に發達したる時、全然練習を行はざりし右手に於ては、二・六四より一・五七に發達せることを示せり。蓋

し是日常教育界に於て數學の教授を以て一般推理力の發達を圖り得るとする、又教育と同一結果に基くべく、之が實驗は身體の左右對稱的部分に練習効果の波及あるとを立證したる最初の實驗的研究なり。次にフェヒネル Fechner が、同様左右對稱的部分には練習効果の波及あることを、文學及幾何學的圖形の描寫に於て明にし、右手にのみ練習を行ひたる場合に、其効果は練習を行はざる左手にも好影響ありと曰へり。次いで之等の實驗を確定ならしめ、併かも之に交叉教育なる名稱を與へたる人に、スクリプチュア Scripurae あり。其實験によれば、握力の練習に於て、右手の練習が左手に波及する効果の割合は、五〇%にして、右手に於て確定度の練習二百回の練習効果の波及は、左手に五〇%以上の發達を來したるを報告せり。又、デイヴィス Davis も打叩、握力、正確度に就きて身體の一部分の練習が他の部分に及ぶ一層著しき結果を得て、それより次の如きことを主張せり、身體の一面約練習が他の部分に及ぶは、練習によりて注意力の訓練が行はるゝが故なりと其他、右と同様なる一方の手の練習効果が他方に好影響あるにつきては、ライフ・ヒム、はピアノ打鍵速度につきて、ウッドウオース Woodworth は打點の正確度につきて



スタアチは映鏡描寫作業につきて之を證明せり、尙ウオリンは *Willin* 倒逆錯視圖につきて一方の眼の練習が他方の眼に、中央小窩に於ける練習が周邊に影響を與ふることを證明せり。而して、スキフトは右手につきて球取の練習効果が左手に及び、右手の練習後には左手の發達の経路は、右手と同様なれど極めて速かに上昇することを發見せり。

〔ロ〕記憶力に關する實驗。次に記憶に關する之と同様な波及の現象あるや否やを見るに、其最初の研究はゼイムスに依らざるべからず、同人はミルトンの書きたる「失樂園」を毎日二十分餘宛三十八日間暗誦することを練習し、其前後に於てユーゴーの詩を百五十行暗誦せり。此結果によれば、練習前には一三一・八分を要したるに練習後には一五一・五分を要したり。即ち練習後に於ては却て反對に多くの時間を要したり。然し之に對し最後の検査の時にありては他の作業の爲に疲勞せる時なりしが故に、之の成績は完全なりと見るを得ざるべく餘程割引して之を考察せざるべからず。尙同人が四人の被験者につきて行ひし所を見るに右と同様な實驗に關し、一名は十五日間他の三名は何れも三十二日間行ひし其

結果に依れば、被験者中二名は練習後稍時間の短縮を示したり、されどこれは又検査實驗其ものに於て發達する機會ありしものと思はる。此の結果より記憶の練習は、其練習せられたる材料につきてのみ有効にして、一般に記憶の發達と云ふが如きものなしと曰へり。又エーベルト *Ebert* 並にモイマン *neumann* はゼイムスと正反對の結果を得たることを曰へり。即ち其取りたる方法によれば無意味の綴字を暗誦する練習の効果が、數、文字、及び綴字の直接記憶、及び固形、散文詩等の間接記憶の上に及ばず影響の分量を測定せり、検査實驗は之を三回に分ちて一は練習前に、次に練習の中途に於て行ひ、最後に練習後に行ひたり。以上の結果によれば、數の直接記憶に於ては六〇%、散文の間接記憶にありては、七二%の發達を示せり、是即ちそが發達率を示したるものにして、之を以て直ちに轉移、若しくは波及と見るは不可なり、而して今モイマン及びデアボンの實驗に於ける最後の検査が最初の検査に優る度を示したるは甲表の如し。

斯の如く整理せばモイマンの得たる高き波及率は僅に二二%に低減するなり、次にフラツカア *Furker* が十二人の被験者につきて練習組八名、試験組四名を設



(乙)	練習組 發達率	試驗組 發達率	差	(甲)		差		
				直接記憶	エーベルト 及モイマン ダイヤ ボーン			
類似の 練習作業との	四種の灰色	36%	4%	32%	數	60%	12%	48%
	九種の音	22	11	11	文字	35	29	6
	九種の灰色	19	10	9	綴字	43	17	26
	四種の音	10	-2	12	(間接記憶)			
(平均)	22%	6%	16%	綴字十個	81	41	40	
異なるもの 練習作業との	幾何學的圖形	13%	8%	5%	詩一六行	11	14	-3
	九個の數	4	0	4	散文二十行	72	58	14
	腕の運動	0	-1	1				
	詩	7	2	5				
(平均)	6%	3%	3%					

け、試験組の検査實驗に於ける發達率を練習組の検査實驗に於ける發達率より引き去りて残りのものを練習効果の波及の度とせり。之が練習の方法としては種々の組合せにて發する四種の強度を異にしたる音の順序を記憶する作業を課し検査作業としては練習作業に類似したるものゝ記憶と割合に異りたるもの各四種類を課し之の結果を示せば即ち乙表の如し。

之れによりて見れば、練習作業に類似の作業にありては、一六%の練習効果の波及あるに關はらず、練習作業と異なりたる作業にありては僅か三%に過ぎざるることとなり。此外キンチ Windi が多數の學校兒童につき、或る種の材料に關してなせる記憶の練習が、他の種の材料の記憶の練習が他の種の材料の記憶に及ばず影響につきての實驗によれば、その豫

備的實驗として、全體の兒童に詩又は無意味の綴の暗誦を課し、記憶作業の能率ト

第一検査 得点	練習組		試験組			
	人員	第一検査 平均得点	第二検査 平均得点	人員	第一検査 平均得点	第二検査 平均得点
得点	3	98.0	133.0	2	98.0	131.0
95-98	5	96.4	130.2	7	96.0	121.1
90-95	4	91.5	123.2	3	91.0	111.6
80-90	2	82.0	113.5	2	85.0	82.0
80以下	3	63.6	94.3	3	62.0	87.0

の如き報告をなせし、或る教科の暗誦を練習して得たる練習効果は、他の教科の内



容の記憶に波及す」と、スライトの *length* は從來の實驗に於ては被験者の數少しとして、八十四名の女兒につきて、實驗を試みたり。先づ之が計畫は十種類の異りたる検査を行ひ、其の成績の結果によりて、之を各能率の等しき四組に分ち、第一組を、試験組として練習作業の前後、及び中途の三度の検査のみを受けしめ、残り第二組、第三、第四の三組は之を練習組として、第二組は詩の暗誦を、第三組は算術上の表の暗誦を、第四組は理科、地理、歴史の散文の暗誦を、毎日三十分宛、毎週四日間、全體にて二十四時間練習せしめたり、其結果に於て、練習組と試験組との差異は錯差の五倍、三倍、二倍の如き値と二倍以下の値を有する場合との二に區別することを得、前三味者を以て意義のものとして考察したる結果によれば、(1) 詩の暗誦の練習は、無意味の綴の暗誦及び地圖の位置の記憶に、(2) 表の記憶の練習は、點の位置の記憶及無意味の綴の暗誦に、(3) 散文の暗誦の練習は、美文、及散文の内容の記憶に好影響を與ふることを證明せり。然して此の四組十種の検査に於ける平均發達率を算出せば

第一組(試験組)一三・〇% 第二組一六・三% 第三組一五・六% 第四組一七・〇%

即ち以上の如く練習組の優越は大凡三乃至四%に過ぎず。因て此結果より又練習の結果として一般に記憶の發達はなく、又一般的記憶能ありと假定し得る證據もあらざるものゝ如し」と云へり。

〔六〕辨別作用に關する實驗、次に辨別作用に關するものには、先づソルンダイクとウッドウオースの行ひたる次の實驗あり、或る形並に大きさを有するものゝ面積、長さ、重さの此三つの判断をなす練習が、異なる形、及大きにつきての判断に如何なる影響を及ぼすや尙又或る文字の抹消作業が、他の文字の場合に及ぼす影響につきて實驗をなせるものにして、練習前後に行ひたる検査の成績によれば多くの被験者は練習効果の波及の現象を示せり。因て之に關し次の如き解釋をなせり、此結果は練習効果の神秘的波及、又は分折すべからざる精神機能の特質に基くものにあらずして、練習作業と検査に於ける共通の要素に基くものなり」と曰へり。而して共通の要素とは、練習作業及検査作業に於ける内容及び作業法の類同をいふなり。尙此知覺に關する實驗に就きてはクウーヴァ *Coover* とエンゼル *Ansell* が音の強度辨別の練習を課し、其前後に於て灰色の濃度の辨別の検査をせしめたる所に



據れば、試験組は七%、練習組三二%の發達率なりしを發見せり。之に由つては、音の刺戟に對する練習によりて得たる感覺的辨別の能率は光の刺戟につきての辨別の能率に轉移せり。而して此効果の轉移は、注意の經濟的順應に基くものにしてその性質の一般的のものなりと曰へり。次にジャツド(Judd)が行ひたる實驗を見るに、先づ練習作業として被験者に、或方向の線を見せ其の方向を右手に持ちたる鉛筆にて指示せしむる作業を課し、検査作業としては九個の異なりたる方向を有する線を順次に現し、見えざる右手の鉛筆を以て其方向を指示せしめたり。之の結果は、練習作業に於ける線同様なる錯誤を生ずる如き方向の線に於ては、明かに練習効果の波及ありしが、練習作業に於ける線と反對なる錯誤を現はしたるが如き線にありては、却て悪影響が現はれたり。即ち後者は消極的波及の現象なりと。亞いで錯視度の強さにつきて二人の被験者に練習を課し、一名には練習中其結果を報告し他の一名には之を知らしめざりき。併して他の圖形につきて検査したる結果は練習中其結果を報告し以て之を知らしめたる者は、直ちに新境遇に順應し以て著しき發達を示したり。然るに後者の練習中其結果を知らしめざる

者は却つて著しき錯誤を起し、如何に練習するも發達の見込みなかりき。又ジャツドがシヨルコウ(Scholokow)と共に二組の兒童に一組には光線曲折の理を教へ、他の一組には之を教へずして深度一インチなる水中に於ける標的を棒を以て打つ作業を練習せしめたるに、兩組共殆んど成績に於て變る所なかりしも、標的の深さを四インチに減じたるに光線曲折の理を教へられたる組の兒童は直ちに新境遇に順應し、好成績を擧げたれど、此理論を教へられざる組にありては、其錯誤大にして、殆んど練習効果の波及は認められざりき。茲に於て練習効果の波及は境遇に關する知識の有無が、大なる關係を有すと曰へり。

(三)感覺運動的習慣 以上は知覺に關するものにつき諸家の實驗を掲げたるものなるが、之を感覺運動的習慣に關する實驗につきて見るに、ベイヤ(Beyar)はタイブライターの六個の鍵に一個宛の符號を貼付し、勝手なる順序に刺戟を現し、以て刺戟に相當する鍵を打つ作業を練習せしめたるに、毎回其符號を變化せしに拘はらず、速度は著しく増加し、同一の符號にて練習せしめたるものの七分の三に相當する發達ありき。茲に於ては、此發達の主要なる部分は、器械に慣るゝこと、及び實驗の狀



況に順應することのみよるものにあらず、如何とならば四人の被験者中一人は既に此等の實驗に慣れて居るに拘はらず、他の三人の發達に比し九割に相當する發達を示せる點を見るも明かなり」と曰へり。クウーグアとエンゼルはカード分類作業の練習が、タイブライターの作業に好影響を及ぼすを發見し、此の如きは兩作業に類同の要素あるが爲にあらず、主なる原因は主要なる作用と、不必要なる附隨的なる部分とを分別する習慣が、兩作業に共通なるに基くなり」と曰へり。又リユージャー Ringer は、迷路の練習に於て、其効果が他の種のものに波及するや否やにつき検査し、特殊の習慣が他の場合に効果を及ぼすや否やは、その作業につきての一般觀念が生じたるや否やによると曰へり。クッドロー Wollenz は正常兒及び低能兒につきて幾何學的分類作業が長さ、色の分類、文字、圖形の抹消作業に波及することを證明せり。スタフワイヤー Sturte は、小學兒童に算術の答案を奇麗に書かしめる習慣を養ひたるに、その効果は只算術の答案にのみは非常に奇麗になりて現はれたれども、他の國語、綴方等の答案には殆んど影響することなきを發見せり。何故に此如き結果の現はれたるや、バグリー Bagley は之に對し次の如く曰へ

り「奇麗にする習慣が兒童の心に於て、理想とならざりしが故なり」と。然るに此立言の正否を検する爲にリユーデイガー Ruediger は算術の答案を奇麗にすると同時に一般に物を奇麗にする習慣の必要なるを説きたるに、之が結果は算術と何等關係なき他の學科の答案にも好影響を及ぼし奇麗になりしを發見せりと。

第三節 練習の効果消極的波及

以上は積極的練習効果の波及に關する諸家の實

驗を見るに、ミュンスタールペルヒの實驗によれば、懷中時計を常に左側の衣囊に入れ置く習慣なりしを、一週の間は之を右側の衣囊に入れ、自動的に右側に手が行く度に之を記録し置き、全く之が機械化するまで繼續し、自動的に常に手が右側に行きて此練習の全く固定したるを見て、再び時計を左側の衣囊に移し、何時なるや時計を見る爲に幾度無意識に右の方に手を遣るかを記録せり。而して此運動が固定するや又時計を右の衣囊に入れ長期間幾度か繰り返し實驗したる結果、新たに得られたる自動的結合の、決して従前の練習効果を消耗するものにあらざるを證明せり。然して第二回目第一の習慣を作るに要する時間は、第二の習慣形成に要する時間よりも一層短時間なりき、之によつて大體次の如き決論をなせり、斯の